

2023 年 3 月

食料安全保障月報

(第 21 号)



令和 5 年 3 月 31 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2023 年 3 月食料安全保障月報（第 21 号）

目 次

概要編

I	2023 年 3 月の主な動き	1
II	2023 年 3 月の穀物等の国際価格の動向	5
III	2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント	5
IV	2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	5
V	今月の注目情報「ロシア・豪州の小麦輸出と輸入国の動向」	6

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	1 0
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 1
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	1 2
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	1 4
5	食品小売価格の動向	1 8
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	1 9
7	FAO 食料価格指数	2 1

品目別需給編

I 穀物

1	小麦	1
	＜米国＞	2023/24 年度の冬小麦への干ばつの影響を懸念
	＜カナダ＞	2022/23 年度の春小麦・デュラム小麦の品質は良好
	＜豪州＞	生産量は史上最高の 39.0 百万トン
	＜EU27+英国＞	飼料用とうもろこしの代替としての小麦輸入量は上方修正
	＜中国＞	2022 年の小麦輸入は、豪州産が 57.9%を占める
	＜ロシア＞	生産量、輸出量とも前月から上方修正され史上最高
	＜ウクライナ＞	小麦の輸出量は前年度同期比 37.4%減の 1,133.7 万トン
2	とうもろこし	9
	＜米国＞	生産量は収穫面積・単収の減少により減産、輸出減の見通し
	＜ブラジル＞	生産量は史上最高、輸出量は世界第 1 位の見通し
	＜アルゼンチン＞	干ばつにより大幅減産見込み（輸出税継続）
	＜中国＞	生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し
	＜ウクライナ＞	ロシアによる侵攻により、輸出量は前年度より 13%減
3	コメ	1 5
	＜米国＞	カリフォルニア州の豪雨・豪雪で灌漑用水の貯水水準が上昇
	＜インド＞	2022/23 年度の実産量・消費量とも史上最高の見込み
	＜中国＞	輸入量は史上最高で世界第 1 位

＜タイ＞ 乾季米（全作付面積の約 2 割）は 43%が収穫済み
＜ベトナム＞ 冬春作の生育・収穫が進展

II 油糧種子

大豆・・ 2 1

＜米国＞ 生産量は減産、輸出も減少の見通し

＜ブラジル＞ 生産量、輸出量ともに史上最高の見通し

＜アルゼンチン＞ 干ばつにより大幅減産見込み（輸出税継続）

＜中国＞ 生産量、消費量は史上最高、輸入量も増加見通し

＜カナダ＞ 収穫面積及び単収の増加により増産

（参考 1）本レポートに使用されている各国の穀物年度について（2022/23 年度）・・・ 2 7

（参考 2）単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 7

特別分析トピック

南米の穀物等生産が世界の需給に与える影響

【利用上の注意】

表紙写真：アルゼンチン サンタフェ州の生育期のとうもろこし（2 月 27 日撮影）
降雨不足のため花が枯れている。アルゼンチンの穀物は
ラニーニャ現象の影響による干ばつで前年度と比べ大幅な減産見通し。

(概要編)

I 2023 年 3 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2022/23 年度の作況については、北半球での収穫はほぼ終了し、南米では生育期から収穫期を迎えている。

品目別にみると、3月の米国農務省（USDA）の需給報告では、小麦については、豪州やロシアの豊作で世界の生産量は前年度を上回る見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、前年3月には過去最高を更新した小麦の国際相場も侵攻前の水準まで戻している。ウクライナの穀物輸出に関する4者合意は3月に再延長されたが、延長期間の合意が得られておらず今後も注視が必要。

とうもろこしについては、ウクライナの減産に加え、米国やEU、アルゼンチンの乾燥等の影響により、世界の生産量が前年度を下回る見通し。一方、大豆については、米国、アルゼンチンは減産も、ブラジルで増産となり、世界全体では前年度を上回る見通し。いずれの品目も旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：2月）については、1月から下落（130.6→129.8）しているものの、引き続き高い水準を維持（参考：前年2月の値は141.2、前々年2月の値は116.6）。

海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近5カ年の平均値の9割程の水準で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021年7月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2023年3月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

米国農務省（USDA）の3月見通しによれば、ウクライナの2022/23年度の小麦の生産量・輸出量は、前月見通しから変更なくそれぞれ2,100万トン（対前年度比36%減）、1,350万トン（同28%減）の見通し。とうもろこしの生産量も前月見通しから変更なく、2,700万トン（同36%減）である一方、輸出量は前月見通しから100万トン上方修正され2,350万トン（同13%減）の見通し（参考1）。

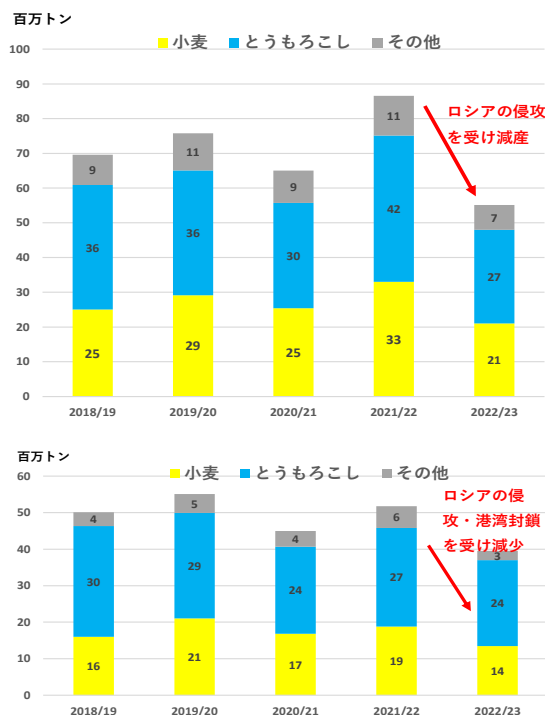
ウクライナ農業政策食料省による3月21日時点の予測によると、冬小麦の作付けがロシアの侵攻前であった2022/23年度と比較して減少したこと等から、2023/24年度の穀物・豆類の作付面積は141万ヘクタール減の1,024万ヘクタール。そのうち、冬小麦は417万ヘクタール（2022/23年度比83万ヘクタール減）、春小麦は29万ヘクタール（同7万ヘクタール増）、とうもろこしは362万ヘクタール（同45万ヘクタール減）がそれぞれ作付け見込み。

同省の3月21日時点の2023/24年度の穀物・豆類の生産量は4,430万トン（2022/23年度5,310万トン）となる見通しで、小麦は1,660万トン（同2,050万トン）、とうもろこしは2,170万トン（同2,560万トン）との見通し。

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意を受け、前年8月以降、オデーサ港等3港からの輸出が再開され、2022年8月～23年2月累計の輸出量は2,272万トン（うち、とうもろこし1,102万トン、小麦630万トン他）。目的地は中国、スペイン、イタリア等。（参考2）。

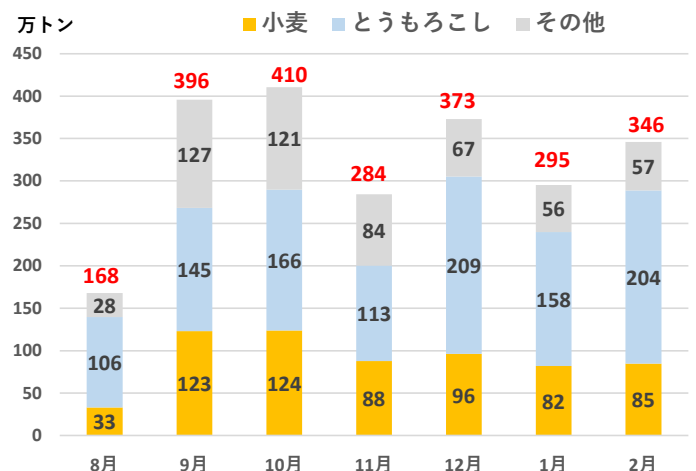
本合意（当初、前年11月18日まで、その後2023年3月18日まで延長）は、さらに3月19日以降延長されたものの、延長期間はウクライナは120日間、ロシアは60日間をそれぞれ主張している。

（参考1）小麦ととうもろこしの生産量（上）、輸出量（下）の推移（年度）



出典：米国農務省「PS&D」（2023.3） 注：その他は他の穀物（大麦等）

（参考2）黒海からの輸出量の推移（月毎）



出典：国連資料（2023.2月末時点）

注：その他はひまわり油・大麦など陸路による輸出を除く。

1 米国の 2023/24 年度のとうもろこし・小麦作付面積は増加見通し

米国農務省は 2 月 23 日・24 日に開催した農業アウトルックフォーラムにおいて、2023/24 の主要作物の作付や需給の予測を公表した。作付面積については、小麦 2,003 万ヘクタール (2022/23 年度比 8.3%増)、とうもろこし 3,683 万ヘクタール (同 2.7%増)、コメ 101.2 万ヘクタール (同 13.0%増) といずれも増加見通しである一方、大豆は据置き (3,541 万ヘクタール) の見通し。小麦、とうもろこし、コメ、大豆いずれも干ばつの影響で単収が低下した 2022/23 年度より上昇する見通し。この結果、生産量は、小麦 5,140 万トン (2022/23 年度比 14.4%増)、とうもろこし 3 億 8,320 万トン (同 9.9%増)、コメ 839 万トン (もみベース 同 15.3%増)、大豆 1 億 2,270 万トン (同 5.5%増) と増加する見通し。

輸出量については、中国向け輸出増を期待するとうもろこしは 5,590 万トンと 2022/23 年度比 14%増の一方、南米やその他の輸出国との競争により、小麦は 2,250 万トン (同 6.5%増)、大豆は 5,510 万トン (同 1.8%増) に留まる見通し。コメは、特に中短粒種の供給が依然としてタイトで価格競争力が弱いものの、318 万トン (同 13.2%増) の見通し。

なお、期末在庫率については、小麦が 30.9%、とうもろこしが 13.0%、コメが 16.3%、大豆が 6.5%といずれも 2022/23 年度より上昇する見通し。

2 アルゼンチンの穀物生産は干ばつで大きく減産

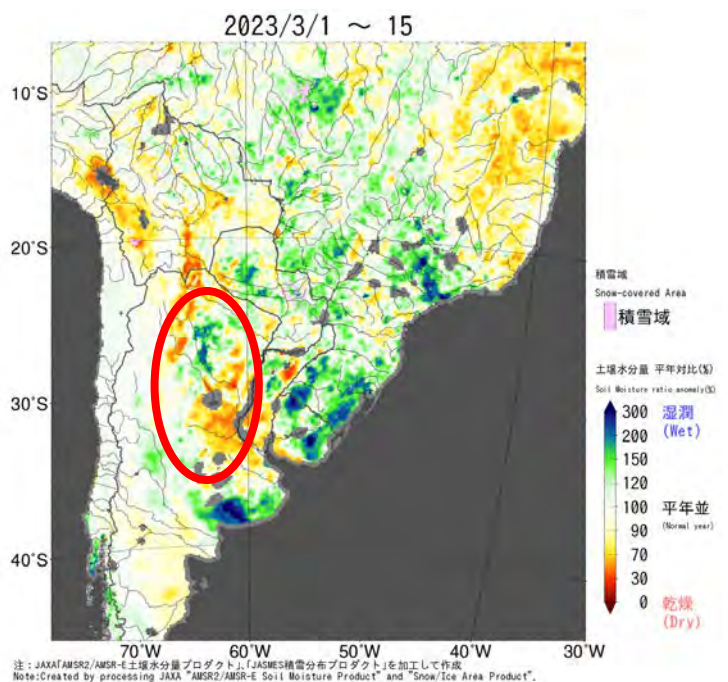
アルゼンチンでは、ラニーニャ現象の影響を受け、60 年に 1 度とも言われる干ばつが継続し、穀物・油糧種子の生産に大きく影響した。ブエノスアイレス穀物取引所週報 (3 月 16 日) によると、生育中のとうもろこしは 3,600 万トン (前年度比 31%減)、大豆は 2,500 万トン (同 44%減) と見込まれている。収穫が終了した小麦は 1,240 万トン (同 43%減)。

アルゼンチン政府は財政赤字の補填のため、大豆最大 33%、とうもろこし 12%などの輸出税を賦課している。これに加えて、国内向けの安定供給を確保するために、例えばとうもろこしについては、2022/23 年度は 2,000 万トンの輸出上限数量を設定している。

なお、アルゼンチン政府は、今般の干ばつ対策として、農業関係者に対し、45 億ドルの融資、7 億 5 千万ドルの減税、運転資金の支援のための 15 億ドルの割引手形を発行するなどの施策を公表した。

(参考) アルゼンチンの土壤水分データ (JASMAI)

3 月に入り降雨があり、3 月前半時点で、一部地域では土壤水分量は平年並みに回復したものの、主産地ではとうもろこし、大豆の単収改善には遅かったとみられる (赤丸)。土壤水分量平年対比+積雪域 (2023 年 3 月前半)



※JASMAI 英語表記画面が 3 月 16 日に表示可能となりました。

<https://jasmai.maff.go.jp/en/>

3 インドは乾季米の増産で史上最高も輸出規制は継続

USDA の 3 月見通しによれば、インドの 2022/23 年度のコメの生産見通しは史上最高の 1 億 3,200 万トン（前年度比 2 % 増）。雨季（カリフ）米は降雨不足で減産も、南部のインド洋沿いで主に作付けされ生育期を迎える乾季（ラビ）米の生産が大幅に増産となり、カリフ米の減産をカバーしたのが要因。

一方、2022/23 年度に熱波の影響で前年度比 5 % 減の 1 億 400 万トンとなった小麦については、2023/24 年度はこれから収穫期を迎える中で、2 月の高温乾燥の影響が懸念されている。

なお、前年 5 月に設定された小麦の輸出禁止や前年 9 月に設定された碎米の輸出禁止のほか精米の一部に賦課された輸出税 20% については、今のところ継続するとみられている。

Ⅱ 2023 年 3 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、2 月末、250 ドル/トン台半ばで推移。3 月に入り、米国産への低調な需要や、黒海経由のウクライナ産穀物輸出を巡る合意の再延長の見通し等から 240 ドル/トン前後に値を下げたものの、同合意の再延長をめぐる不透明感から 260 ドル/トン台前半に値を上げた。その後、18 日の再延長を受けた供給継続予測から値を下げ、3 月下旬現在、250 ドル/トン台後半で推移。

とうもろこしは、2 月末、240 ドル/トン台後半で推移。3 月に入り、米国産の低調な輸出状況や USDA の 3 月需給報告で米国の在庫が輸出量の下方修正により市場予想を上回った一方、アルゼンチンの高温・乾燥による減産懸念や黒海経由のウクライナ産穀物輸出を巡る合意の再延長をめぐる不透明感、3 月下旬の米国産の中国向け輸出成約等から値が小幅に上下した中で、当該合意の再延長を受け、3 月下旬現在、240 ドル/トン台後半で推移。

コメは、2 月末、480 ドル/トン台後半で推移。3 月に入り、新穀（乾季米）の市場への流入継続による供給増加見通しや、来月の更なる新穀流入を見越した海外需要の軟化、バーツ安等により 480 ドル/トン台前半まで値を下げた。その後、バーツ高もあり再び値を上げ、3 月下旬現在、490 ドル/トン台前半で推移。

大豆は、2 月末、540 ドル/トン台後半で推移。3 月に入り、アルゼンチンの高温・乾燥による減産懸念や大豆粕価格の上昇等により、3 月上旬に 560 ドル/トン台半ばに値を上げた。その後、ブラジルの豊作見通しと収穫進展による米国産の輸出減少懸念、原油安等から値を下げ、3 月下旬現在、540 ドル/トン台後半で推移。

（注）小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月予測から 880 万トン上方修正され 27.4 億トン。消費量は、前月予測からほとんど変更なく 27.6 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫率は前年度を下回り 27.6%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正、とうもろこしで下方修正され、穀物全体で上方修正され、27.4 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正、とうもろこしで下方修正され、穀物全体ではほとんど変更なく、27.6 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正も、とうもろこしで下方修正され、4.8 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.6 億トンと前月予測から上方修正、期末在庫率は、前月予測から上方修正された。

（注：数値は 3 月の USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による）

Ⅳ 2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.3 億トン。消費量は前年度を上回り 6.3 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫率は前年度を下回り、18.8%となる見込み。

（注：数値は 3 月の USDA 「Oilseeds : World Markets and Trade」による）

V 今月の注目情報：ロシア・豪州の小麦輸出と輸入国の動向

2022/23年度の世界の小麦需給は、ともに史上最高の生産量となったロシアと豪州の小麦輸出が増加し、ウクライナの小麦輸出の減少の輸入分をカバーした状況となっている。そうした中、エジプトは主にロシア産が増え、インドネシアは主に豪州産への依存を高めている。ロシア・豪州の小麦輸出動向と主要小麦輸入国の動向についてまとめた。

注：文中の「2022/23年度」等は穀物年度で、ロシアの小麦は2022年7月から2023年6月。国や作物によって異なる(品目別需給編P. 27 参照)。

1 ロシアの生産・輸出動向

(1) 生産動向

2022/23年度のロシアの穀物生産量は、天候に恵まれ、米国農務省(USDA)の3月見通しでは、1億3,429万トン(クリミアを除く。以下同じ)。うち、小麦については史上最高の9,200万トン(前年度比22%増)、大麦についても2,150万トン(同23%増)となった。特に小麦については単収が3.16トン/ヘクタールと史上最高となる見通し。ロシアの小麦生産は、主に欧州部で栽培される冬小麦とシベリア地域で栽培される春小麦であり、冬小麦が6,800万トンで約7割を占め、春小麦は2,400万トンとなる見通し。

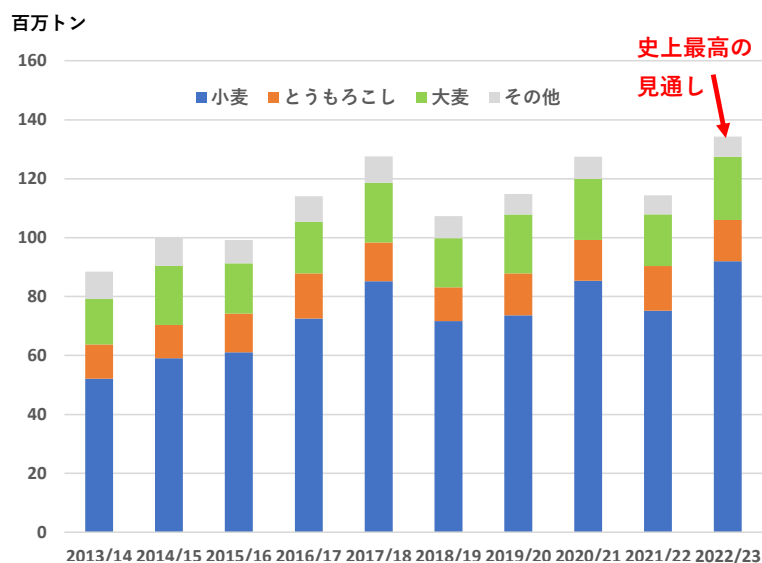
(2) 輸出動向

ロシア政府は、小麦等の穀物輸出に関し、ルール建ての輸出税に加え、本年2月15日から6月30日まで輸出枠を設定している。本年の輸出枠は、小麦、とうもろこし、ライ麦、大麦計で2,550万トン(穀物ごとの区分なし)となっており、前年同時期に設定された穀物輸出枠1,100万トン(小麦800万トン、とうもろこし、大麦、ライ麦計300万トン)を大きく上回る輸出枠が設定されている。

USDAによれば、小麦の輸出量は世界一の4,350万トンが見込まれている。輸出先の内訳は2022年7月～2023年2月でみると、エジプトで、トルコ、カザフスタンの順となっている。輸出量合計では前年同期を上回った。

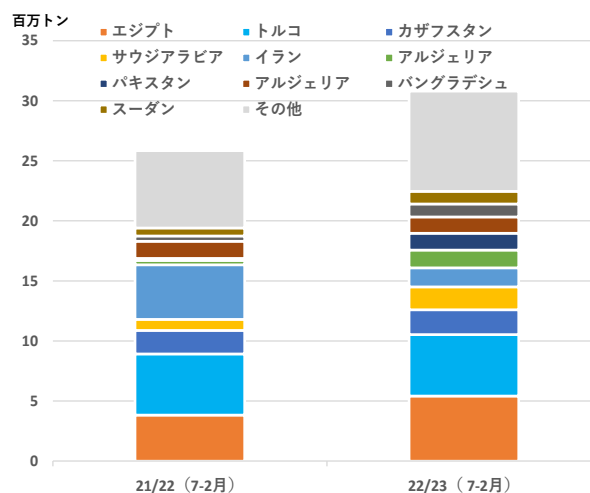
3月上旬のロシアのパトルシェフ農相による発言では、穀物輸出自体は順調であり、2022/23年度は上半期の輸出量が2,800万トン超、下半期は2,500～3,000万トン、通年では5,500～6,000万トンの見込みとされている。

図1 ロシアの穀物の生産量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2023.3)を農林水産省で加工

図2 ロシアの小麦の輸出先(エジプトが1位に)



出典：現地調査会社調べ(2023.3)

2 豪州の生産・輸出動向

(1) 生産動向

2022/23 年度の小麦を含む冬作物について、収穫は終了した。豪州農業資源経済科学局 (ABARES) の「Crop Report」(2023.3.7) によると、冬作の穀物・油糧種子は、生育期の潤沢な降雨に恵まれ、生産量が「7,380 万トンと 3 年連続で史上最高を更新した。中でも、小麦の生産量は、3,920 万トンと史上最高となり、菜種も 830 万トンと史上最高を更新した。特に小麦は西部のウェスタンオーストラリア (WA) 州やサウスオーストラリア州で史上最高を更新した一方、東部のニューサウスウェールズ (NSW) 州では降雨過多により作付けが遅れ、生産量は前年度を下回った。ただし、過去 10 年平均は上回っている。

品質については、ABARES の上記レポートによると、WA 州では春の低温により成熟がゆっくり進んだことで単収は増加したものの、タンパク質含有量が昨年より低い水準となった。

一方、NSW 州では、予想された洪水による品質低下に関し、同州中部及び南部で低タンパク質の飼料用グレードの小麦の生産割合が例年より多くなった一方、同州北部では高タンパク質含有量の小麦が例年と同様の割合で生産された。

(2) 輸出動向

2022/23 年度の小麦輸出については、USDA によれば、3 年連続豊作を受け大幅に増加し、ロシア、EU に次いで 2,850 万トンが見込まれている。

豪州統計局の輸出統計によれば、2022 年の輸出量は 2,879 万トン (対前年比 13% 増)。2021 年の主要輸出先は地理的にも近いインドネシア (493 万トン) が 1 位だったが、2022 年は、中国向け輸出量が倍増し 620 万トン (前年 294 万トン) となり、インドネシア向け輸出量 433 万トンを上回った。中国は、2022 年において、米国やカナダ産の輸出価格が高かったため、輸入を豪州産にシフトしたことが要因と見られる。3 位以下もフィリピン、ベトナムと東南アジア向けが上位を占めている。

図3 豪州の小麦の州別生産量の推移

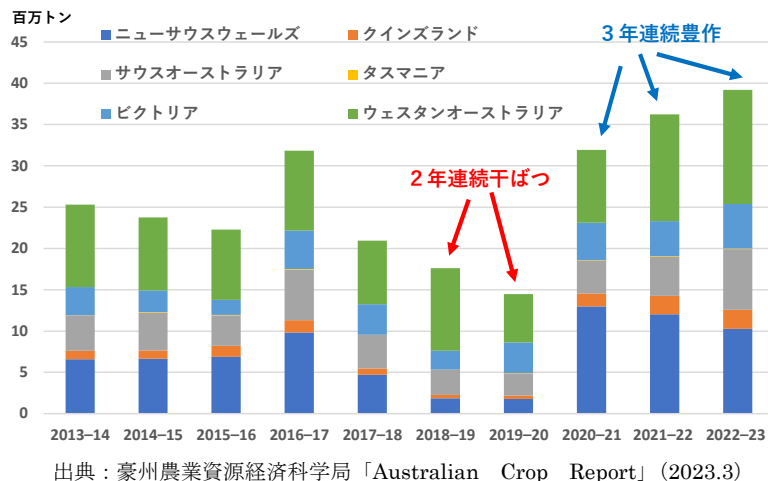
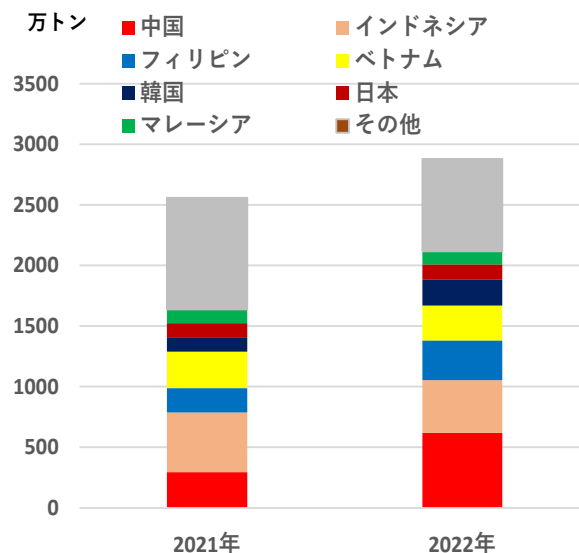


図4 豪州の小麦の輸出先 (2022 年は中国が 1 位に)



3 小麦の国際貿易の状況と輸入国の動向

(1) 輸出国の動向

輸出国では、史上最高の豊作となったロシアと3年連続豊作の豪州の輸出の増加が目立っている。ロシアは、輸出税はあるものの、豊富な供給量を背景に、輸出価格について競争力があること、豪州は中国や東南アジアなど主要輸入国に地理的に近くフレートが安価になることなどが要因とみられる。

他の主要輸出国では、ロシアの侵攻を受けたウクライナと2年連続で生産量が低水準となった米国は減少するものの、小麦への干ばつ被害が少なかったEUや、2021/22年度の干ばつから一転して天候に恵まれ増産となったカナダは輸出が増加する見通し。

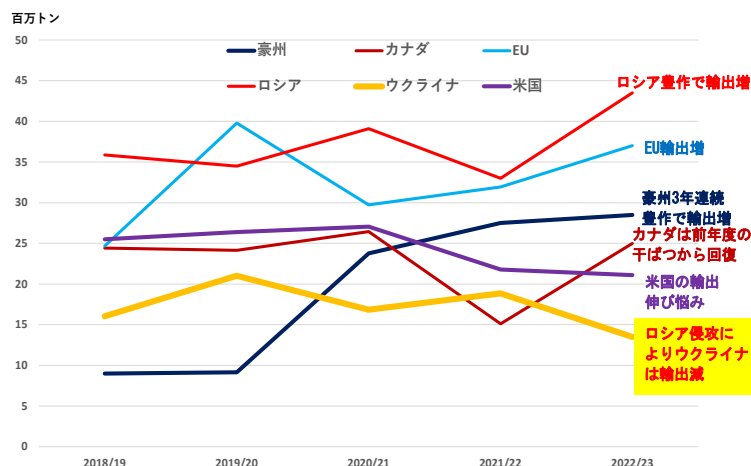
(2) 輸入国の動向

主要輸入国では、USDAの3月見通しによれば、輸入量1位で並ぶエジプト、インドネシアが減少見通しの一方で、3位に並ぶトルコ、中国の輸入が増加している。

エジプトは、小麦輸入の多くをウクライナに依存していたが、前年2月のロシアのウクライナ侵攻以降、一時インド産の輸入を検討した。しかし、5月のインドの輸出規制を受け、ロシア産の輸入を増加させるとともに、国内産の増産政策を進めた。現在、ロシアが加盟しているユーラシア経済同盟とのFTA締結に向けて調整しているとみられる。

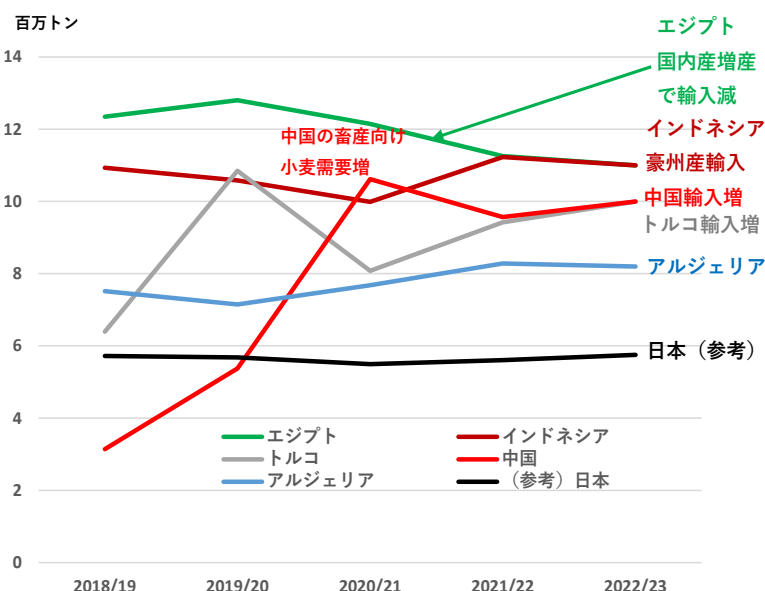
インドネシアは、2022年の小麦輸入に関し、地理的に近い豪州が半分近くのシェアを占めているが、2021年まで300万トン程度輸入していたウクライナ産の輸入が大きく減少し、アルゼンチン産やブラジル産に代替したため、両

図5 主要小麦輸出国の輸出量の推移



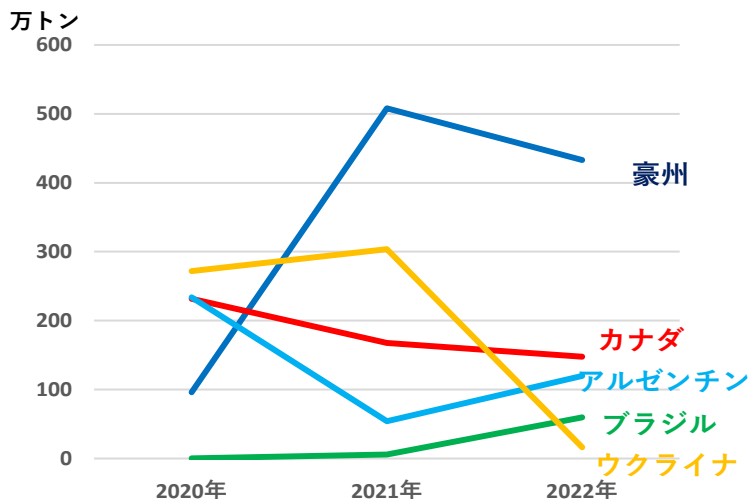
出典：米国農務省「PS&D」(2023.3)を農林水産省で加工

図6 主要小麦輸入国の輸入量の推移（我が国は10位）



出典：米国農務省「PS&D」(2023.3)を農林水産省で加工

図7 インドネシアの輸入先別の小麦輸入量の推移



出典：民間データベース Agri Census (2023.3)を農林水産省で加工

国からの輸入量は 200 万トン弱と増加した。

世界第 3 位の小麦輸入国であるトルコは、エルドアン大統領が黒海穀物イニシアティブの仲介を行い、前年 7 月には合意にこぎつけ、2022/23 年度の小麦輸入は前年度より増加する見通し。なお、USDA の GAIN REPORT (2023 年 1 月) によれば、2022 年 6 月～11 月までの小麦輸入量は前年同期比 1 割減の約 470 万トンとなっている。内訳はロシア産 330 万トン、ウクライナ産 120 万トンと地理的に近い両国からの輸入に大きく依存している。

(2) 今後の動き

小麦を始めとする穀物貿易に大きな影響を与える黒海穀物イニシアティブについては、本年 3 月 18 日に期限を迎え、ウクライナは当初のイニシアティブのテキストどおりの 120 日間の再延長を主張した。

一方、ロシアは、西側諸国の経済制裁によりロシアの穀物や肥料の輸出が支障を受けているとして、改善がない限り 60 日間の延長しか認めないと主張し、この結果、期限が確定しないまま延長されたとみられる。

ロシア側は、ロシア農業銀行の SWIFT への再接続、ロシア産アンモニアのパイプライン経由でのウクライナ・オデーサ港からの輸出などを求めているとされている。ただし、ロシアの好調な小麦輸出状況を見ても、経済制裁の影響がどこまであるのか疑問であるとの見方もある。

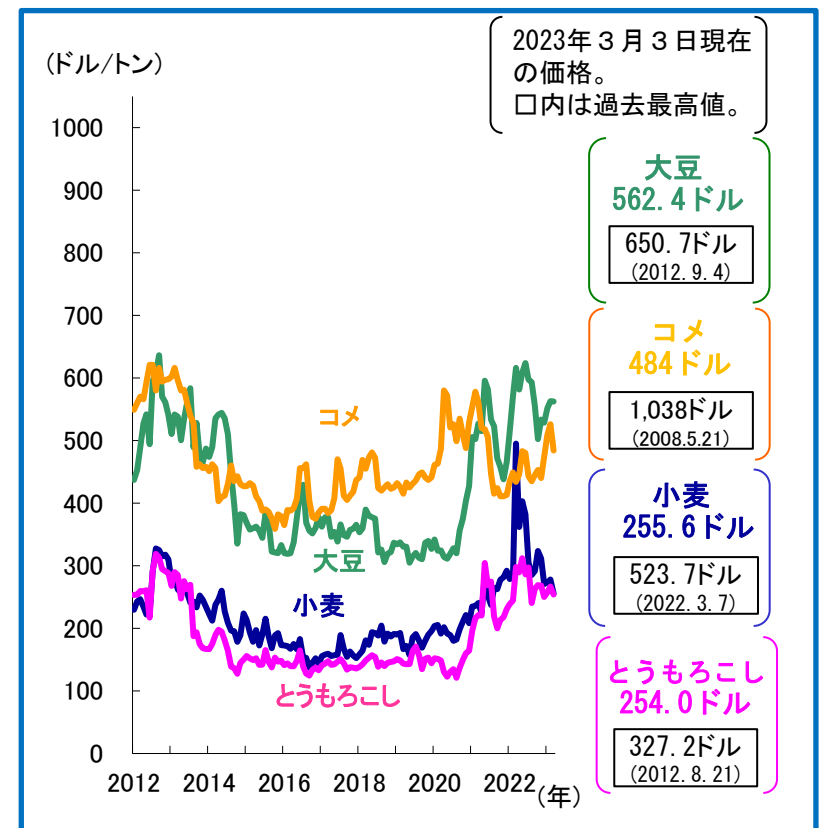
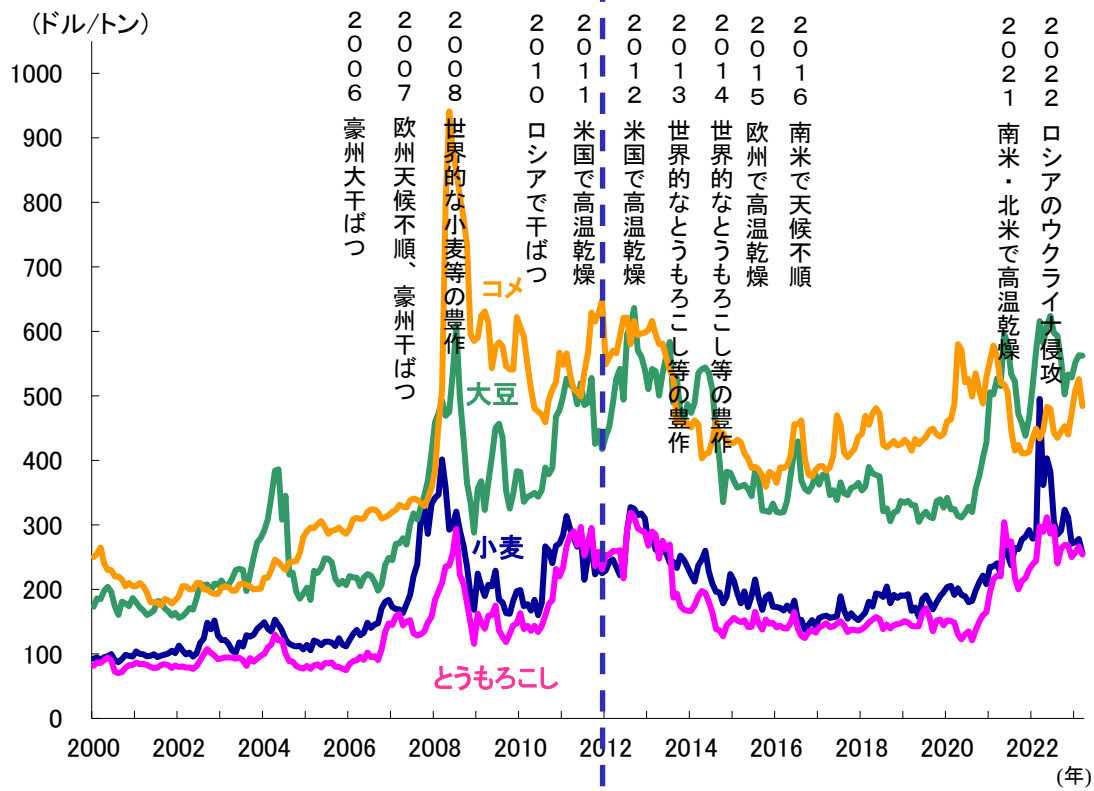
黒海穀物イニシアティブを利用した穀物輸入量が一番多いのは国別では中国であり、侵攻後 1 年経過した本年 2 月 24 日に公表したウクライナ和平案でも黒海穀物イニシアティブへの支持が明記されている。3 月 20 日から 22 日にかけて、中国の習近平国家主席が訪ロし、プーチン大統領と会談した。

また、25 日には、プーチン大統領はトルコのエルドアン大統領と電話会談した。その中で、今後、黒海穀物イニシアティブでロシアの希望が認められず、継続が難しい場合には、ロシアが無償でアフリカの貧困国向けに小麦を輸出することが可能であり、その際、ロシア産小麦をトルコで製粉し、アフリカ諸国向けに輸出したらどうかといった提案があったとみられる。関係各国の今後の動向を含め注視していく必要。

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年に入り、ウクライナ情勢が緊迫化する中、小麦は史上最高値を更新。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下も、2022年9月以降、パキスタンの洪水やインドの輸出規制を背景に徐々に値を上げ、その後横ばいで推移。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



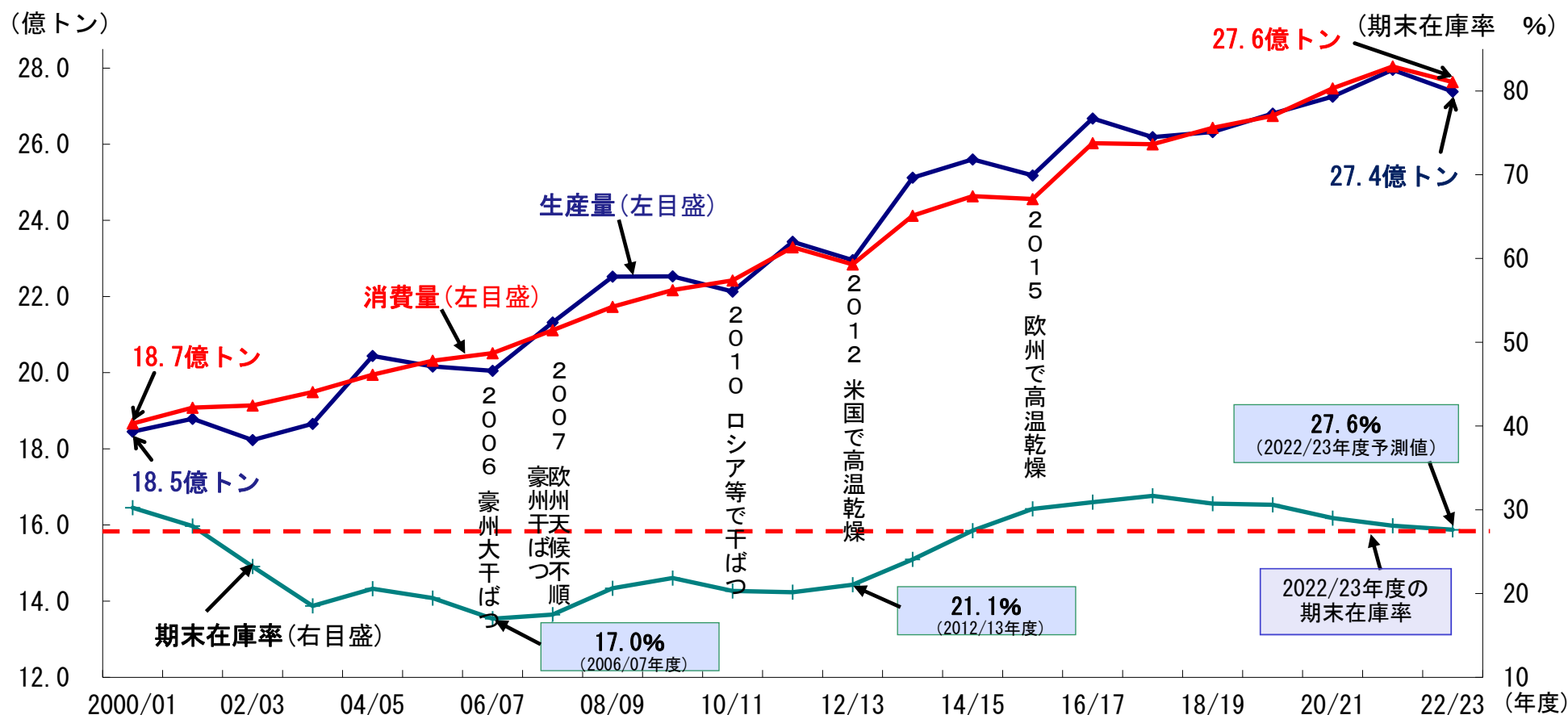
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、27.6%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.1%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

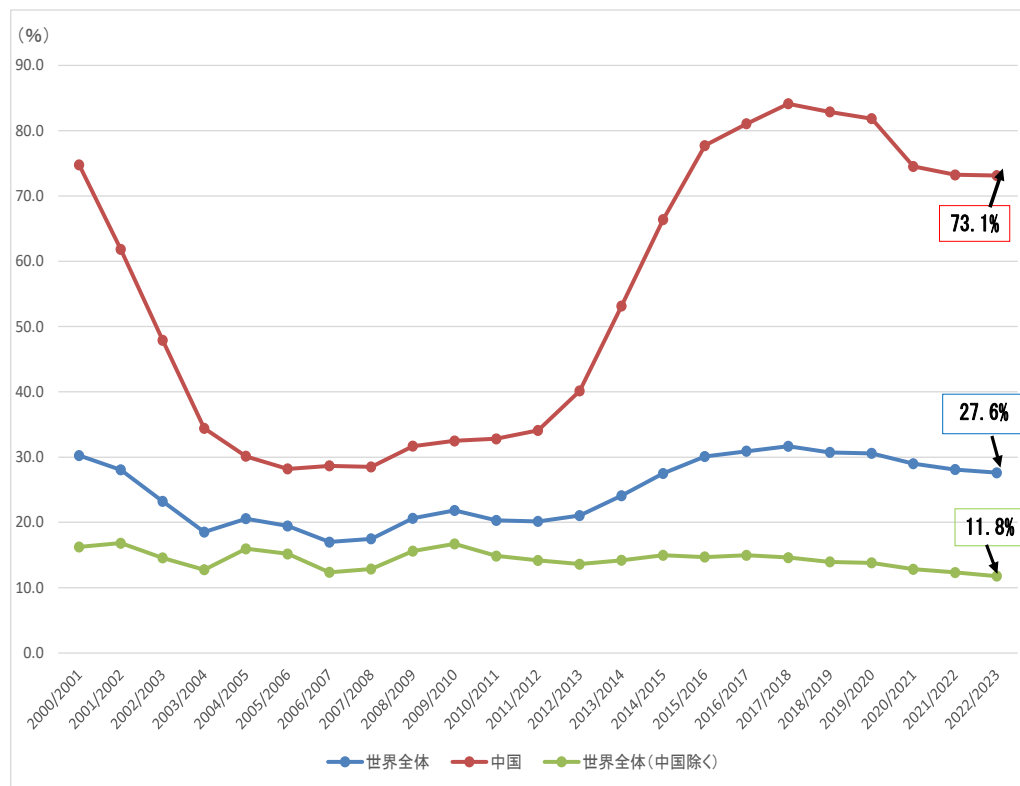


資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(March 2023)、「PS&D」

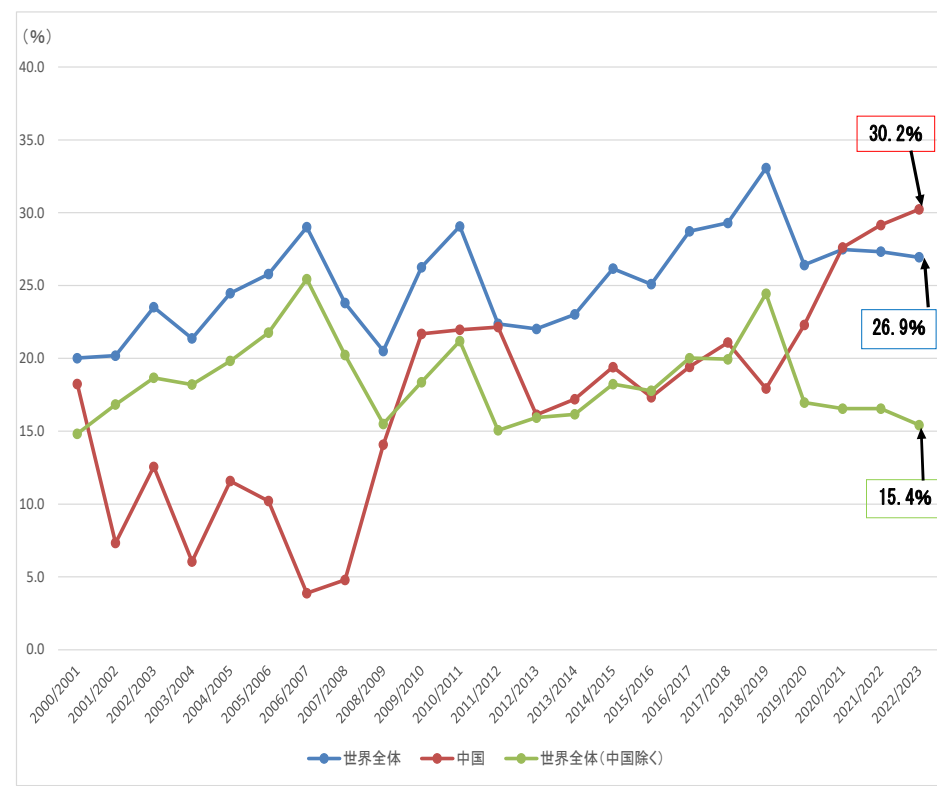
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(March 8, 2023)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

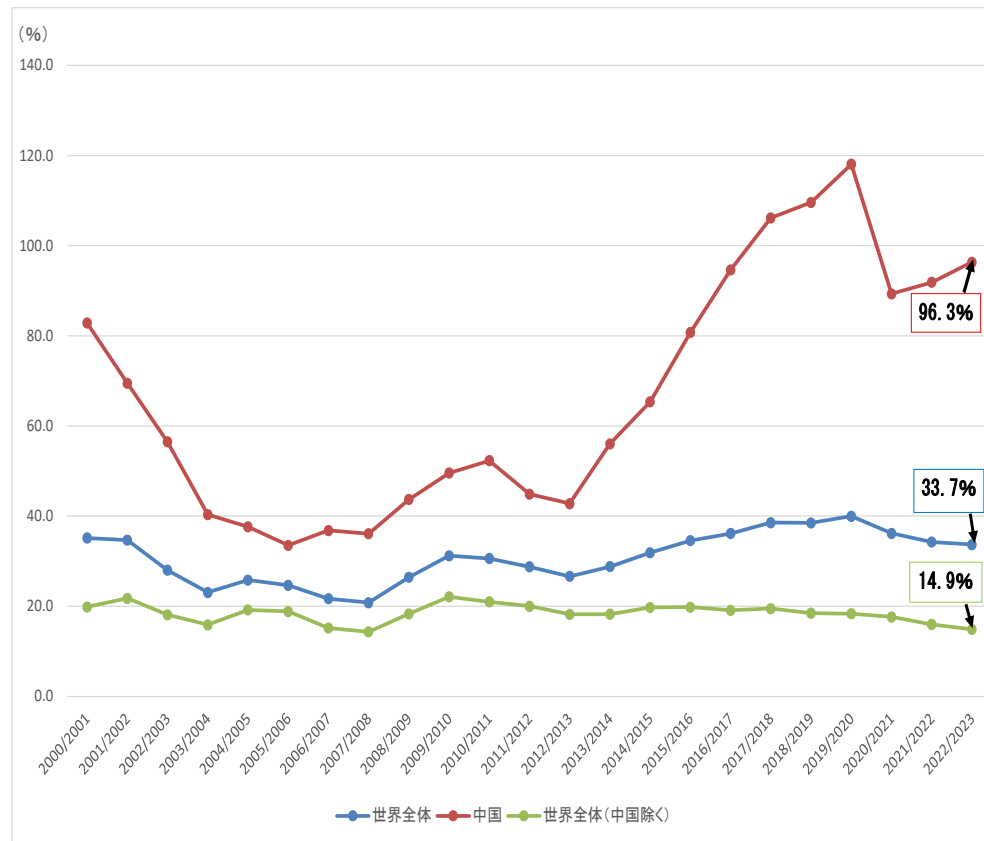
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

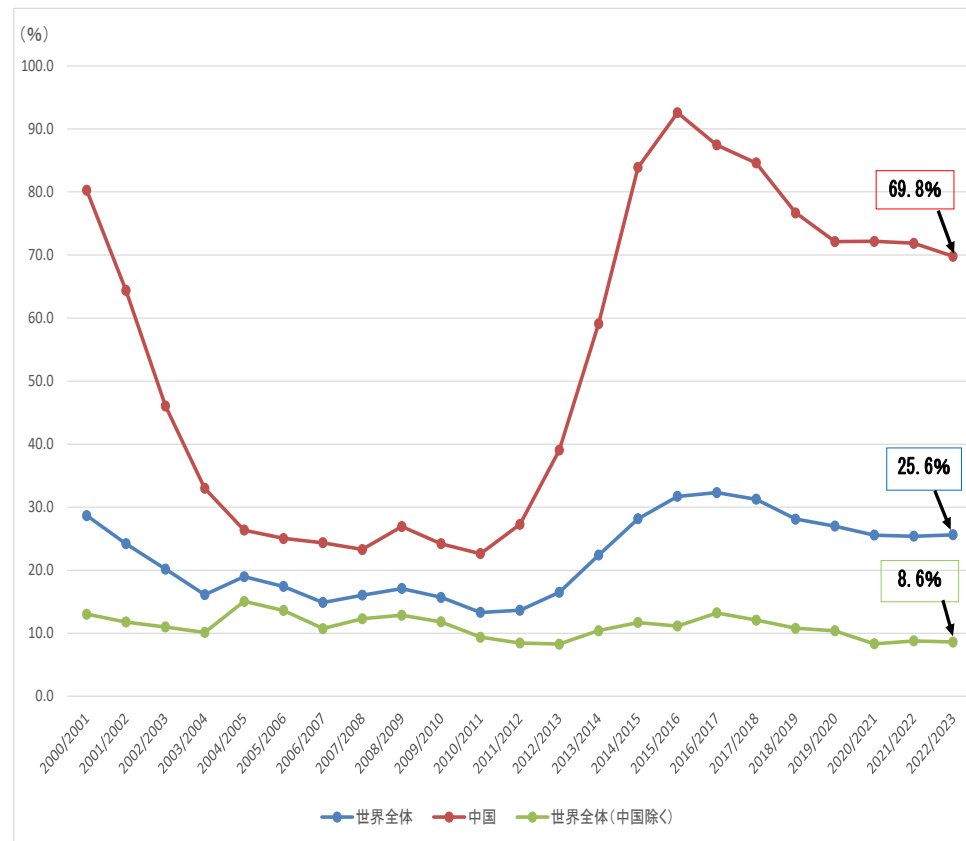
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(March 8, 2023)

注：1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

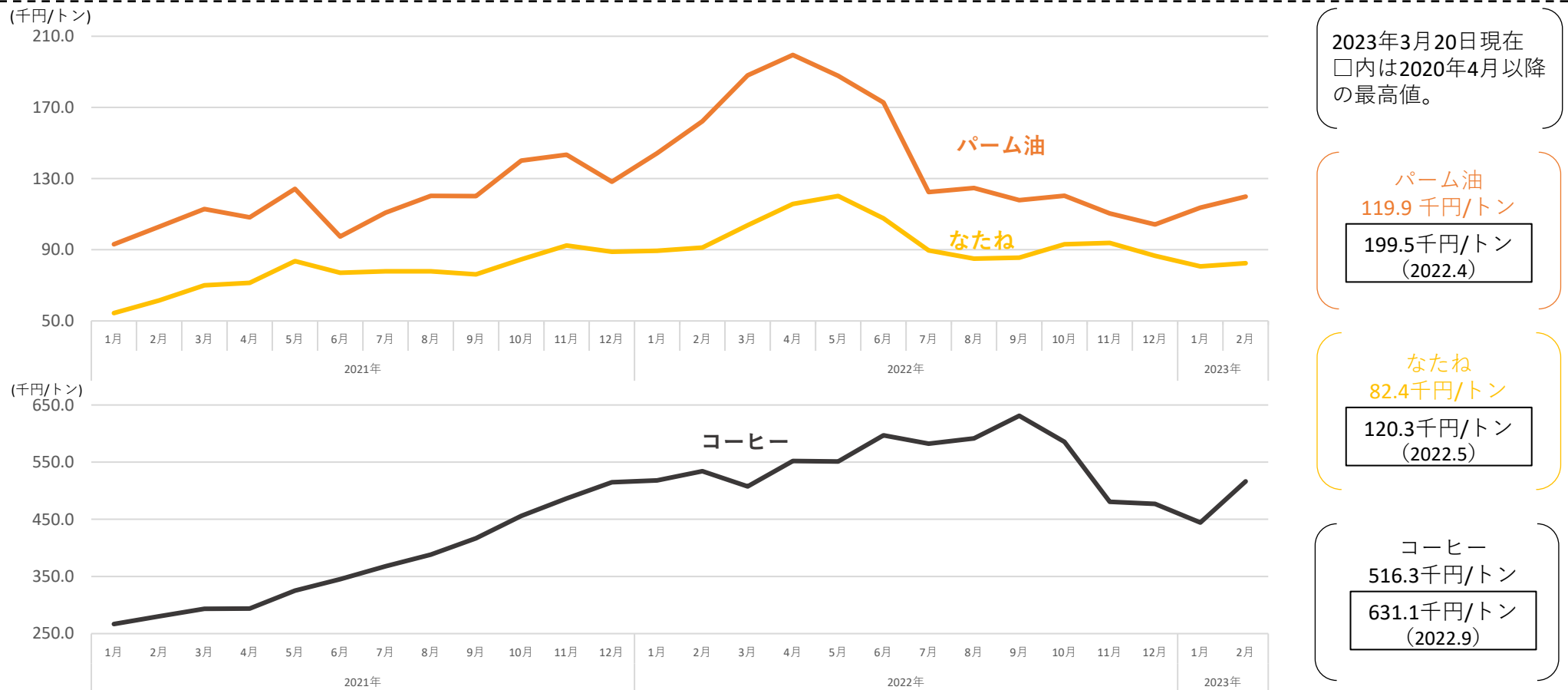
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などが市場価格上昇の要因であった。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでは**2021年**に熱波による減産があったが、**2022年**は回復基調から平年並みの収量に近づいた。また、パーム油について、インドネシアの輸出禁止措置（**2022年5月23日解除**）があったが、マレーシアの生産量の増加によって供給不足の懸念が払拭された。いずれも前年の高値からは落ち着きが見られるものの、依然高止まりしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことにより市場価格が上昇した。その後、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルでの生産の回復によって市場価格は下降したが、高値が続いている。

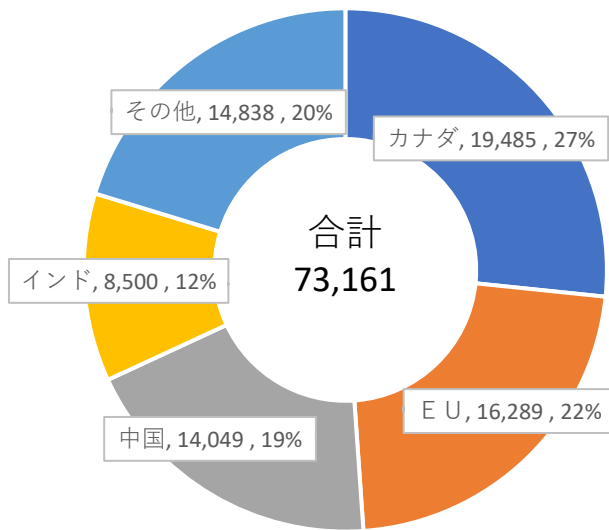


※ なたねの国際価格についてはカナダウィネベグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

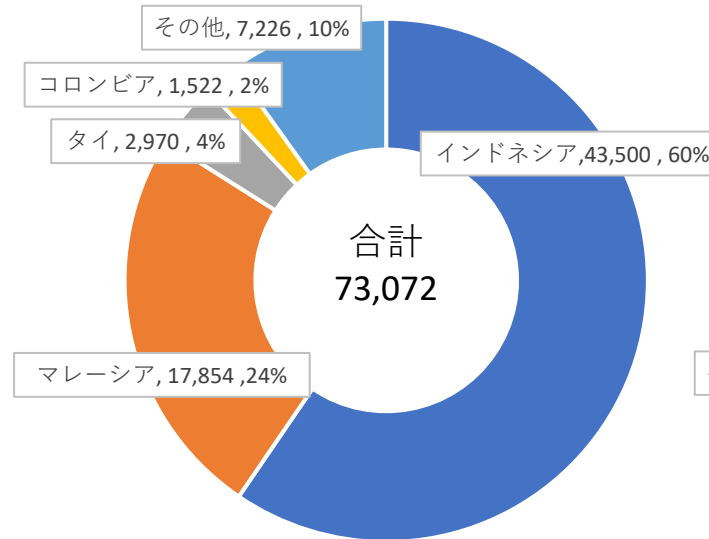
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



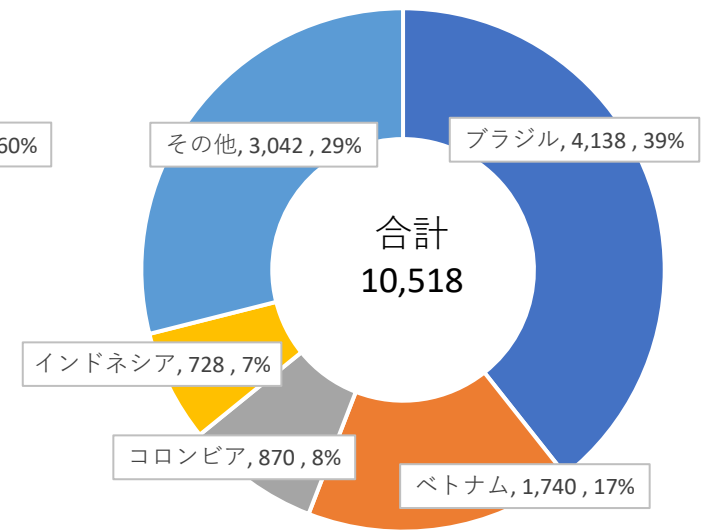
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2022年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,248	59.4%
オーストラリア	853	40.6%
その他	0	0.0%
合計	2,101	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	500	78.7%
インドネシア	135	21.3%
その他	0	0.0%
合計	635	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	112	28.7%
ベトナム	106	27.2%
コロンビア	47	12.1%
その他	125	32.1%
合計	390	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年	
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8	86.6	80.6	82.4
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8	92.3	93.1	102.2
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5	97.5	90.2	90.4

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年	
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4	104.2	113.7	119.9
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7	94.4	109.1	105.4
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0	81.3	78.8	73.9

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年										2021年												2022年												2023年	
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	
コ ー ヒ ー	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0	444.4	516.3	
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2	93.2	116.2	
前年同 月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7	85.8	96.7	

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和5年2月の国内の加工食品の消費者物価指数は98.6～163.9（前年同月比で－1.3%～27.6%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和4年9月～令和5年2月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R4					R5		
品目	平均	平均	平均	平均	平均	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.2	101.1	100.0	99.2	110.3	114.4	113.8	113.7	114.2	114.1	115.0	115.0	7.4%
即席めん	95.3	98.5	100.0	100.1	107.6	114.9	112.4	112.3	114.2	111.6	113.1	114.6	13.6%
豆腐	98.8	99.1	100.0	101.3	105.3	105.1	106.7	108.3	109.1	109.9	110.3	110.4	8.1%
食用油 (キャノーラ油)	101.5	100.9	100.0	106.9	144.4	150.4	156.8	160.2	162.7	162.5	164.0	163.9	27.6%
みそ	97.4	99.1	100.0	99.3	101.3	100.1	103.4	103.6	104.9	104.4	104.5	105.9	7.0%
マヨネーズ	100.8	100.7	100.0	105.6	125.6	126.5	127.0	133.7	136.1	137.4	137.3	137.2	21.1%
チーズ	100.9	101.3	100.0	98.7	107.5	106.6	113.2	117.1	118.6	117.5	119.2	121.4	21.1%
バター	99.5	99.9	100.0	99.9	99.2	99.4	98.7	98.8	98.5	98.7	98.6	98.6	-1.3%
生鮮食品を 除く食料	97.9	99.0	100.0	100.2	104.1	104.2	105.0	106.7	107.9	108.3	108.7	109.4	7.8%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査（農林水産省） （令和4年9月～令和5年3月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R4				R5				
品目	平均	平均	平均	平均	平均	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.9	101.3	100.0	98.6	107.8	110.7	110.9	111.3	112.2	111.5	110.7	111.3	0.5%	6.4%
即席めん	92.4	97.9	100.0	99.2	105.6	110.0	110.0	110.6	110.6	111.2	111.2	110.6	-0.5%	11.7%
豆腐	100.1	100.9	100.0	100.6	103.7	104.2	107.2	107.2	107.6	108.5	108.1	110.2	1.9%	8.0%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	103.5	100.0	104.1	140.7	156.8	160.6	161.2	161.2	162.2	162.2	161.9	-0.2%	28.1%
みそ	96.6	100.4	100.0	99.2	100.1	101.7	102.5	102.7	102.7	102.3	103.4	103.6	0.2%	5.3%
マヨネーズ	97.9	103.1	100.0	102.2	117.7	116.9	126.2	128.9	128.3	129.6	128.9	130.3	1.1%	16.2%
チーズ	98.6	100.9	100.0	98.1	105.7	108.0	114.4	115.4	110.9	116.9	118.4	117.9	-0.4%	19.6%
バター	99.0	99.5	100.0	99.8	99.1	98.6	98.6	98.6	98.6	98.6	98.6	98.4	-0.2%	-1.3%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2022年4月号（3月24日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）22年の牛肉輸出量は過去最高を記録

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002659.html

（豪州）22年のと畜頭数は低水準も、23年の牛肉輸出量は増加の兆し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002660.html

（アルゼンチン）22年の牛肉輸出量、輸出額ともに増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002661.html

◆豚肉

（米国）22年の豚肉輸出量、前年をかなりの程度下回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002662.html

（EU）豚飼養頭数の減少により豚枝肉価格が大幅上昇

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002663.html

（中国）11月中旬に下落に転じた豚肉価格、急速に値を下げる

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002664.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆鶏肉

（米国）23年1月の鶏肉生産量は増加傾向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002665.html

（ブラジル）22年の鶏肉輸出量は2年連続で増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002666.html

（中国）22年の家きん肉生産量は増加、価格は22年末以降下落

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002667.html

◆牛乳・乳製品

（EU）22年の生乳出荷量は前年並み、飼養頭数は前年割れ

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002668.html

（豪州）生乳生産量、30年ぶりの800万キロリットル台割れの懸念

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002669.html

（NZ）GDT価格、バターおよびチーズが続伸

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002670.html

◆飼料穀物

（世界）ブラジルが米国を抜いて最大の輸出国、期末在庫は前月に続き3億トンを下回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002671.html

（世界）ブラジルなどの増産で、世界の大豆期末在庫は1億トン台を維持

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002672.html

（米国）米国の輸出量は前月に引き続き前年度比22.1%減と大幅に減少する見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002673.html

（中国）国産トウモロコシ価格、需要増から高値安定での推移を予想

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002674.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2023.3)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2022/23 年度

生産量 前年度比 前月比

- ・カザフスタン、豪州、インド等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

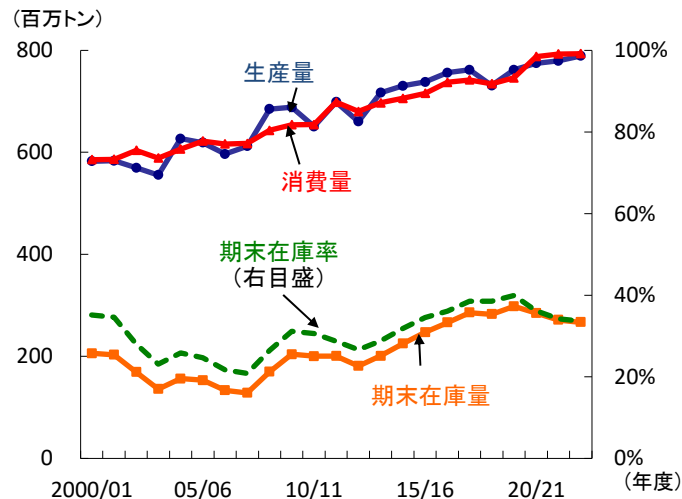
消費量 前年度比 前月比

- ・バングラデシュ、タイ等で下方修正されたものの、インド、カザフスタン等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 前月比

- ・アルゼンチン、インド等で下方修正されたものの、カザフスタン、豪州、ブラジル等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 前月比



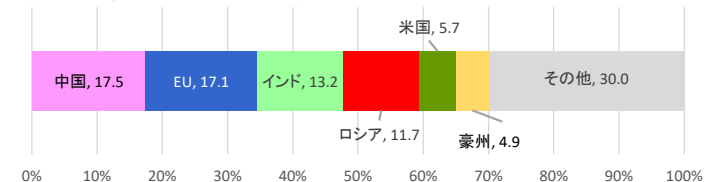
◎世界の小麦需給

(単位: 百万トン)

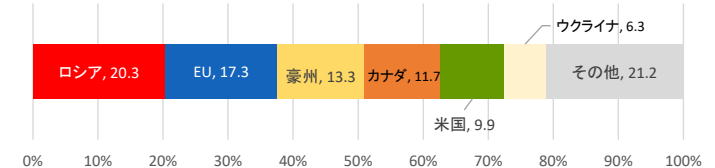
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	774.4	779.2	788.9	5.1	1.2
消 費 量	787.7	792.7	793.2	2.0	0.1
うち飼料用	162.9	160.3	158.5	0.7	▲ 1.1
輸 出 量	203.3	202.9	213.9	1.0	5.5
輸 入 量	194.8	199.2	208.4	1.3	4.6
期末在庫量	284.9	271.5	267.2	▲ 2.1	▲ 1.6
期末在庫率	36.2%	34.2%	33.7%	▲ 0.4	▲ 0.6

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (8 March 2023)

○ 2022/23年度の世界の小麦の生産量(788.9百万トン)(単位: %)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸出量(213.9百万トン)(単位: %)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸入量(208.4百万トン)(単位: %)



(2) 国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 2023/24 年度の冬小麦への干ばつの影響を懸念

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく 44.9 百万トンと前年度に比べ 0.2%増加したものの、2003/04 年度以降では 2021/22 年度に次ぐ低水準となる見込み。同「Crop Production」(2023.3.8)によれば、冬小麦、春小麦、デュラム小麦の生産量は、それぞれ、30.0 百万トン、13.1 百万トン、1.7 百万トン。

2023/24 年度の冬小麦の播種面積は、同「Winter Wheat and Canola Seedings」(2023.1.12)等によれば、高水準の小麦相場を反映して、2015/16 年度以降最高の 14.95 百万ヘクタールの見込み。

同「Wheat Outlook」(2023.3.10)によれば、前年 11 月に冬小麦生産地の約 75%を占めた干ばつ状態は、3 月 14 日現在で約 53%に縮小したものの、2023/24 年度の冬小麦にとって依然として懸念材料となっている。地域別には、プレーンズ南部のハード・レッド・ウインター (HRW) の主要生産地の大部分で干ばつ状況が続いている。一方、米国東部のソフト・レッド・ウインター (SRW) や北西部のホワイト小麦 (SW) の生産地では干ばつが概ね終息しており、生育への影響はほぼない見込み。

3 月 5 日現在、HRW 主要産地の作柄評価 (やや良い～良) は、州によって傾向は異っており、生産量が第 1 位のカンザス州では、1 月 29 日時点の 21%から悪化して 17%となり、前年同時期の 24%を下回った。一方、オクラホマ州とテキサス州の作柄評価(3 月 5 日時点)は 39%、19%と、1 月 29 日時点の 17%、14%から改善し、それぞれ前年同時期の 15%、7%を上回っている。一部の州では改善が見られるが、今後の天候が単収を決める重要な要因となる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、21.1 百万トンで 1972/73 年度以降最低の見込み。他の主要輸出国に比べ、輸出価格の競争力が弱く、2022 年 6 月～2023 年 2 月までの累計輸出量は前年度同時期を 2%下回っている。2023 年 2 月の輸出先国は、メキシコ(16.1%)、日本(14.5%)、フィリピン(10.1%)の順。

なお、輸出価格(FOB)は、他の輸出国との価格競争から、2 月 6 日時点の 391 ドル/トンから 364 ドル/トン(3 月 3 日時点)に低下したものの、小麦主要輸出 6 か国の中で一番高い。

米国の期末在庫量は、15.5 百万トンと 2008/09 年度以降最低であり、期末在庫率は 29.9%と 2014/15 年度以降最も低い。

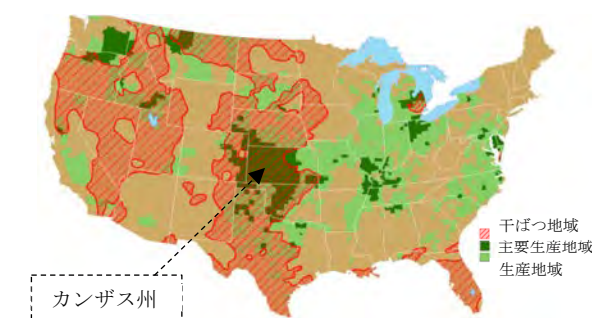
小麦一米国 (冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割)

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年6月～23年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	49.8	44.8	44.9	-	0.2
消 費 量	30.4	29.6	30.6	-	3.4
うち飼料用	2.5	1.6	2.2	-	36.3
輸 出 量	27.1	21.8	21.1	-	▲ 3.2
輸 入 量	2.7	2.6	3.3	-	26.3
期末在庫量	23.0	19.0	15.5	-	▲ 18.6
期末在庫率	40.0%	37.0%	29.9%	-	▲ 7.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	14.89	15.03	14.36	-	▲ 4.5
単収(t/ha)	3.34	2.98	3.13	-	5.0

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(8 March 2023)

図:米国冬小麦生産地帯と干ばつ地域



資料:USDA「Crop Production」(2023.3.14)

表:米国産小麦の輸出先国別輸出量

(輸出量:万トン、シェア:%)

2023年 (2023年2月)			2023年 (2023年1月5日～3月2日)			2022年 (2022年1月6日～3月3日)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
メキシコ	28.5	16.1	メキシコ	59.7	16.5	メキシコ	63.0	17.5
日本	25.6	14.5	日本	50.6	14.0	日本	53.1	14.7
フィリピン	17.9	10.1	フィリピン	38.2	10.6	フィリピン	43.7	12.1
中国	13.6	7.7	韓国	27.3	7.6	ナイジェリア	24.6	6.8
イラク	10.5	5.9	中国	27.1	7.5	韓国	22.6	6.3
台湾	10.0	5.7	イラク	21.0	5.8	台湾	19.2	5.3
インドネシア	6.8	3.8	台湾	19.0	5.3	エル・サルバドル	13.4	3.7
その他	63.9	36.1	その他	118.6	32.8	その他	120.9	33.5
計	176.8	100.0	計	361.5	100.0	計	360.5	100.0

※2023 年 2 月は、2023 年 2 月 3 日～3 月 2 日の合計値
資料:USDA「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」(2023.3.10)

＜ カナダ ＞ 2022/23 年度の春小麦・デュラム小麦の品質は良好

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2023.3.21)によれば、2022/23 年度の小麦全体の生産量は、前月予測からの変更はなく、33.8 百万トンの見込み。

なお、品種別には、普通小麦が 28.4 百万トン、デュラム小麦が 5.4 百万トンとなる見込み。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission: CGC)によれば、春小麦及びデュラム小麦の品質は良好で、春小麦(カナディアン・ウエスタン・レッド・スプリング:CWRS)の 93%、デュラム小麦の 81%が 1、2 等に格付けされた。またタンパク質含有量は、CWRS は平均以上の 13.9%、デュラム小麦は平均レベルの 14.5%に回復し、ともに輸入国の需要を満たす水準とみられる。

また、AAFC によれば、 平年並みの天候を前提とすれば、2023/24 年度の小麦全体の生産量は、前年度に比べ 1.5 %増の 34.3 百万トン。そのうち、普通小麦は播種面積が増加することから、同 1.5%増の 28.9 百万トン、デュラム小麦は、播種面積が他の作物の作付けへのシフトにより減少するものの、単収が上昇し、同 0.1%増の 5.4 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2022/23 年度の小麦全体の輸出量は、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、前年度に比べ 61.5%増加の 24.3 百万トン。そのうち、普通小麦は好調な輸出ペースが継続しているため、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、前年度に比べ 58.1%増加の 19.5 百万トンとなる見込み。また、デュラム小麦は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ 76.7%増加の 4.8 百万トンの見込み。

CGC によれば、2022 年 8 月～2023 年 1 月の輸出量は、普通小麦が 994.3 万トン、デュラム小麦が 271.1 万トンの計 1,265.4 万トン。種類別の輸出先国は、普通小麦は中国(19.0%)、インドネシア(9.4%)、日本(5.6%)の順で、アジア向けが多い。デュラム小麦は、イタリア(32.4%)、アルジェリア(16.6%)、モロッコ(12.7%)の順で、イタリアや北アフリカ向けが多い。

また、AAFC によれば、2023/24 年度の輸出量は、前年度に比べ 1.2%減の 24.0 百万トンの見込みで、普通小麦が同 0.5%増加の 19.6 百万トン、デュラム小麦は、欧州の生産量回復による輸入需要の減少が見込まれ、同 8.3%減少の 4.4 百万トンの見込み。

USDA によれば、2022/23 年度の期末在庫量は、前月予測の変更はなく、史上最低の 3.5 百万トンとなる見込み。ここ数年、カナダの期末在庫量は減少傾向となっている。

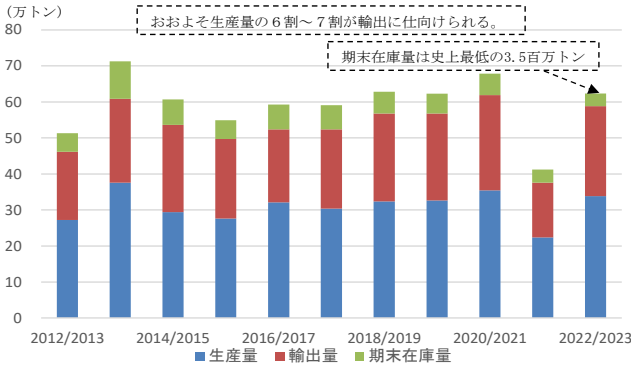
小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年8月～23年7月)		
			予測値、() はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	35.4	22.4	33.8 (33.8)	-	50.8
消費量	9.1	10.2	9.6 (8.9)	-	▲ 5.9
うち飼料用	4.2	5.2	4.5 (4.5)	-	▲ 12.6
輸出量	26.4	15.1	25.0 (24.3)	-	65.3
輸入量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	9.1
期末在庫量	6.0	3.7	3.5 (4.4)	-	▲ 3.3
期末在庫率	16.7%	14.5%	10.2% (13.2%)	-	▲ 4.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.02	9.20	10.08 (10.08)	-	9.6
単収(t/ha)	3.54	2.44	3.35 (3.35)	-	37.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2023)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(21 March 2023)

図 カナダ産小麦の生産量、輸出量、期末在庫量の推移



資料:USDA「PS&D」(2023.3.8)をもとに農林水産省で作成

表 カナダ産普通小麦、デュラム小麦の輸出先国別輸出量
(普通小麦) (デュラム小麦)

2022年12月			2022年8月から12月			2022年12月			2022年8月から12月		
国名	輸出量 (万トン)	シェア(%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア(%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア(%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア(%)
中国	37.1	23.8	中国	174.0	21.6	モロッコ	10.6	29.8	イタリア	62.3	32.4
インドネシア	28.6	18.3	インドネシア	77.5	9.6	イタリア	8.2	23.0	モロッコ	30.4	15.8
パナマ	11.7	7.5	パナマ	67.8	8.4	チュニジア	6.2	17.4	米国	22.8	11.9
日本	8.5	5.4	日本	64.3	8.0	米国	4.9	13.8	アルジェリア	17.1	8.9
コロンビア	6.9	4.4	ペルー	57.6	7.1	U.A.E	3.4	9.6	チュニジア	16.4	8.5
その他	63.2	40.5	その他	365.3	45.3	その他	2.3	6.5	その他	43.0	22.4
計	156.0	100.0	計	806.5	100.0	計	35.6	100.0	計	192.0	100.0

注1: Canadian Grain Commissionが認可したエレベーターから輸出された小麦(Licensed)のみのデータ。
注2: 普通小麦の品種はNO.1-3 Canada Western Red Spring No.1 Canada Western Red Winter
No.2 Canada Eastern Red Spring No.2 Canada Eastern OatデュラムはCanada Western Amber Durum Others
資料: Canadian Grain Commission/Export of Canadian Grain and Wheat Flour/2023.1.23をもとに作成。

＜ 豪州 ＞生産量は史上最高の 39.0 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は、単収の上昇により、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され 39.0 百万トンと前年度の 36.2 百万トンを 7.6%上回り史上最高の見込み。

豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2023.3.7)によれば、2022/23 年度の実産量は史上最高の 39.2 百万トンの見込み。

主要生産州では、西部のウェスタンオーストラリア州(WA 州)の小麦生産量は、史上最高であった前年度を 7 %上回る 13.8 百万トン(過去 5 年平均比 52.6%増)の見込み。作付け当初に良好な天候に恵まれたことや、その後も作物の生育期を通じて適時な降雨で十分な土壌水分量となったこと、霜害の発生が最小限に留まったことが生産量増加の要因。なお、春の低温により成熟がゆっくり進んだことで単収は増加したものの、タンパク質含有量が昨年より低い水準となった。

東部のニューサウスウェールズ州(NSW 州)の実産量は、10.3 百万トンと前年度を 15%下回るものの、過去 5 年平均を 53.9%上回る見込み。NSW 州では中西部と北部で例年になく降雨が多く、作付け遅延による耕作放棄が一部で生じた。その後、降雨で洪水も発生したが、夏に乾燥した天候に恵まれ、予想よりも生産量は回復した。なお、予想された洪水による品質低下に関し、同州中部及び南部で低タンパク質の飼料用グレードの小麦の実産割合が例年より多くなった一方、同州北部では高タンパク質含有量の小麦が例年と同様の割合で生産された。

豪州気象局によれば、2022 年に記録的な降雨をもたらしたラニーニャ現象は弱まる見込み。ABARES「Agricultural commodities」(2023.3.7)によれば、乾燥天候になった場合、2023/24 年度の実産量は 28.2 百万トンに減少する見込み。しかしながら、2022 年に降雨が多かった東部の州では、土壌水分が蓄積されているため、生産量は平均を上回ると見られている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、史上最高の生産量による豊富な輸出余力から、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、史上最高の 28.5 百万トンの見込み。

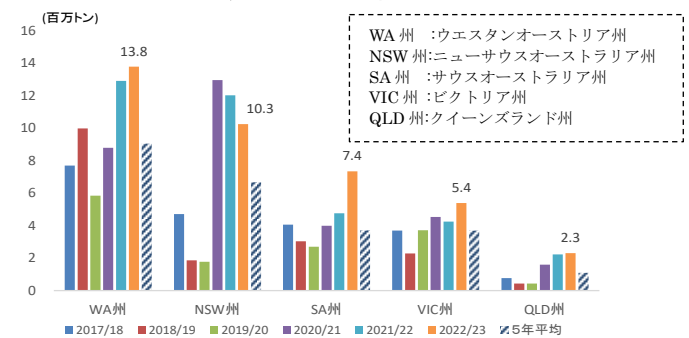
豪州統計局によれば、2022 年年間輸出量は前年(2,550.9 万トン)を 12.8%上回る 2,878.6 万トン。輸出先国は、中国(21.5%)、インドネシア (15.1%)、フィリピン(11.4%)の順。豪州の輸出先は、地理的に近く他の主要輸出国に比べ輸送コストが安価となるアジア市場が多い。2023 年 1 月の輸出量は 334.6 万トンで前年同月を 25.9%上回る。輸出先国は、中国 28.3%、インドネシア 15.7%の順。

小麦－豪州 (冬小麦を主に栽培) (単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	31.9	36.2	39.0 (38.1)	1.0	7.6	
消 費 量	8.0	8.5	8.5 (8.7)	-	▲ 0.4	
うち飼料用	4.5	5.0	5.0 (5.0)	-	-	
輸 出 量	23.8	27.5	28.5 (27.7)	0.5	3.6	
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.3)	-	▲ 4.8	
期末在庫量	3.0	3.4	5.6 (4.0)	0.5	64.1	
期末在庫率	9.5%	9.5%	15.2% (11.0%)	1.2	5.7	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	12.64	12.73	13.00 (13.0)	-	2.1	
単収(t/ha)	2.52	2.85	3.00 (2.93)	0.08	5.3	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 February 2023)

図：豪州の州別小麦生産量の推移



資料：ABARES「Australian Crop Report(2023.3.7)」をもとに農林水産省で作成

表：豪州の小麦輸出量及び輸出先国

2023年1月			2022年1月～2022年12月			2021年1月～2021年12月		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
中国	94.6	28.3	中国	619.8	21.5	インドネシア	493.6	19.4
インドネシア	52.4	15.7	インドネシア	433.3	15.1	ベトナム	301.6	11.8
韓国	35.3	10.5	フィリピン	328.3	11.4	中国	293.6	11.5
フィリピン	33.4	10.0	ベトナム	289.8	10.1	フィリピン	198.4	7.8
イエメン	18.6	5.5	韓国	211.4	7.3	日本	118.9	4.7
ベトナム	16.0	4.8	日本	125.6	4.4	マレーシア	114.5	4.5
その他	84.4	25.2	その他	870.4	30.2	その他	1030.2	40.4
計	334.6	100.0	計	2878.6	100.0	計	2550.9	100.0

資料：豪州統計局の資料をもとに農林水産省で作成

< EU27+英国 > 飼料用とうもろこしの代替としての小麦輸入量は上方修正

【生育・生産状況】欧州委員会(2023.2.23)によれば、EU27 の 2022/23 年度の生産量は、前月予測に比べ 0.4 百万トン下方修正され、前年度に比べ 2.6%減少の 134.1 百万トンの見込み。

そのうち、普通小麦の生産量は、ラトビア等で上方修正されたものの、ブルガリア、ドイツで下方修正されたことから、前月予測に比べ 0.4 百万トン下方修正され、127.0 百万トン。デュラム小麦は、スロバキア等で下方修正されたものの、ギリシャ等で上方修正されたことから、前月予測からわずかに上方修正され、7.1 百万トンの見込み。

また、USDA によれば、EU27 及び英国の生産量は、それぞれ前月予測からの変更はなく 134.7 百万トン、15.5 百万トンで、EU27 及び英国の生産量の合計は 150.2 百万トン(前年度比 1.3%減)。

2023/24 年度の冬小麦は、2 月中旬までの平年を上回る気温から、欧州西部・中部で再生長が始まったが、2 月末からの気温低下が生育の障害となった。また、2 月中旬から下旬に欧州の大部分で降雨があったものの、スペイン、フランス、イギリスでは依然として降雨不足の状況である。

なお、フランスアグリメール(2023.3.9)によれば、フランス産の生育状況を示す「とても良い」「良い」の割合は、普通小麦が 95%、デュラム小麦が 91%とそれぞれ前年度の 92%、87%を上回った。

【貿易情報・その他】USDA によれば、EU27 の 2022/ 23 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、9.0 百万トンの見込み。前年度(4.6 百万トン)に比べると、ウクライナからの輸入ペースが堅調なことから約 2 倍に増加する見込み。輸入されたウクライナ産小麦は生産減となった EU 産とうもろこし飼料の代替となる見込み。また、EU27 の輸出量は、前月からの変更はなく 37.0 百万トン。

欧州委員会によれば、2022 年 12 月の輸入先国は、普通小麦がウクライナ(74%)、カナダ(11%)、ロシア(8%)、デュラム小麦がカナダ(87%)、ウクライナ(6%)、カザフスタン(4%)の順。

EU は 2022 年 7 月に高温乾燥に見舞われたが、2022 年 7～12 月の輸出量は、普通小麦が 1,773.5 万トン(前年度同期 1,575.9 万トン、過去 5 年平均 1,355.5 万トン)、デュラム小麦も 44.2 万トン(同 35.9 万トン、同 42.8 万トン)といずれも前年度同期及び過去 5 年平均を上回った。

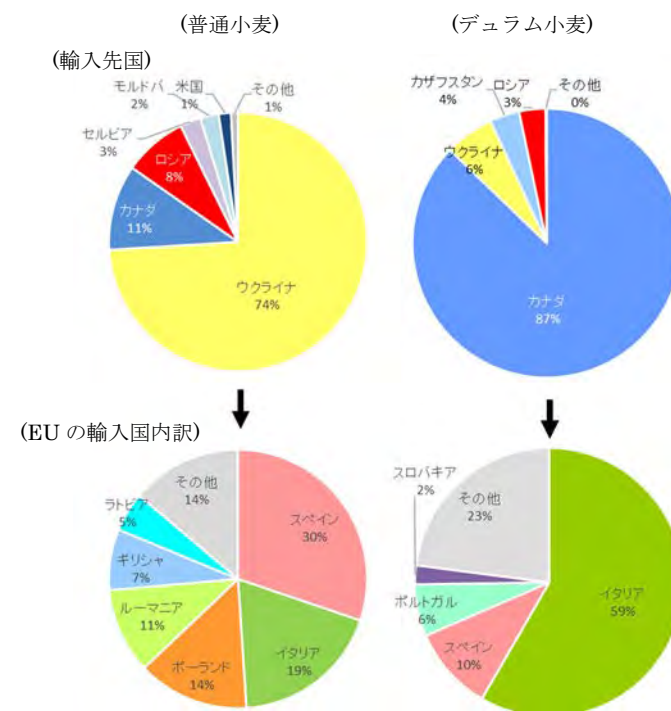
輸出先国は、普通小麦はモロッコ(14.0%)、アルジェリア(12.8%)、エジプト(9.0%)の順で、北アフリカ諸国向けが多い。また、デュラム小麦はイスラエル(14.5%)、アラブ首長国連邦(14.3%)、タンザニア(11.0%)の順であり、中東、アフリカ向けが多い。

小麦－EU27+英国 (冬小麦を主に栽培) (単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	136.3	152.2	150.2 (149.2)	-	▲ 1.3
消 費 量	118.2	123.7	124.8 (123.8)	-	0.9
うち飼料用	48.5	52.4	52.8 (51.6)	-	0.8
輸 出 量	30.2	32.8	38.3 (35.6)	-	16.9
輸 入 量	8.6	7.3	10.8 (10.7)	-	48.8
期末在庫量	12.1	15.2	13.1 (18.2)	-	▲ 13.8
期末在庫率	8.2%	9.7%	8.0% (11.4%)	-	▲ 1.7

(参考)
 収穫面積(百万ha) 24.36 26.05 26.10 (26.00)
 単収(t/ha) 5.60 5.84 5.75 (5.74)
 資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
 「World Agricultural Production」(8 March 2023)
 IGC 「Grain Market Report」(16 February 2023)
 表内及び () 内のデータはEU27+英国のデータ

図 EU27 の普通小麦及びデュラム小麦の貿易割合(2022 年 12 月)



資料：EU 委員会 Cereals export and imports(2023.2.17)

＜ 中国 ＞ 2022 年の小麦輸入は、豪州産が 57.9%を占める

【生育・生産状況】中国糧油情報センター「食用穀物市場需給状況月報」(2023.3.6)によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ 0.6%増加の 137.7 百万トンと史上最高となる見込み。作期別の生産量は、冬小麦が 132.7 百万トン(前年度比 0.8%増)、春小麦が 5.0 百万トン(同 4.2%減)の見込み。

同情報センターによれば、2 月下旬、安徽省、河北省、江蘇省、湖北省の一部では越冬期末期を迎えている。また、陝西省、山西省、安徽省の一部ではすでに再生長期に入った。中国全土の冬小麦生産地域の天候条件は良好で、土壌水分も十分となっており、再生長には適した状況となっている。

なお、河南省の一部では、例年に比べ、3～6 日早く再生長期に入っている。

【貿易情報・その他】中国糧油情報センターによれば、輸入量は前月予測からの変更はなく、前年度(9.56 百万トン)並みの 9.60 百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2017 年から 2022 年までの 6 年間では、米国、カナダ、豪州が主な輸入先国であり、カザフスタン、ロシアからも輸入をしている。また、2019 年からフランス産の輸入が継続している。

また、2022 年の年間輸入量は、前年度(971.8 百万トン)に比べ 1.6%増加の 987.3 万トン。輸入先国は、豪州、カナダ、フランスの上位 3 か国で 93.2%を占めた。2021 年と比べると、2022 年は豪州が全体の 57.9%と大きく増加した一方、カナダは減少、米国は大きく減少した。中国は、カナダ、米国から高たんぱく質小麦を、豪州から麺、饅頭用として低たんぱく質小麦をそれぞれ輸入しているとみられる。

USDA によれば、中国の期末在庫量は、前月予測から 0.5 百万トン下方修正され、139.6 百万トンとなる。世界の期末在庫量に占める中国の割合は 52.2%と半分を超えており、中国を除く世界の期末在庫量は 127.6 百万トンと 2013/14 年度以降最低となる見込み。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 1 月号」によれば、1 月の国内市場においては、春節が近づくとつれ、市場での小麦粉需要は終盤となり製粉業者の稼働率は徐々に低下したため、小麦の需要は弱まった。一方、政府の臨時備蓄小麦の競売と大量の輸入により、市場の小麦供給は十分となり、国内小麦価格は小幅下落した。十分な供給から、今後、国内小麦価格は安定すると思われる。

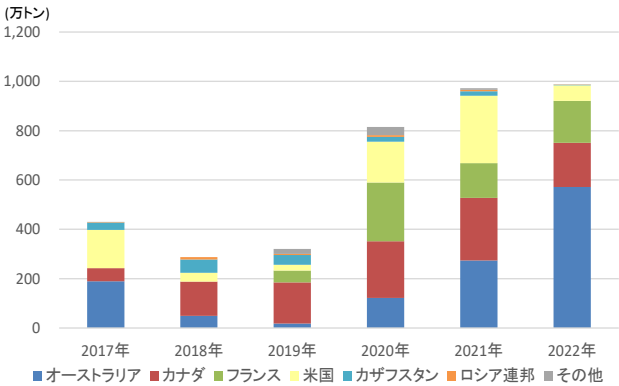
小麦－中国（冬小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	134.3	137.0	137.7 (137.7)	-	-	0.6
消費量	155.0	148.0	144.0 (139.6)	-	-	▲ 2.7
うち飼料用	45.0	35.0	30.0 (25.0)	-	-	▲ 14.3
輸 出 量	0.8	0.9	0.9 (1.1)	-	-	2.3
輸 入 量	10.6	9.6	10.0 (8.7)	-	-	4.5
期末在庫量	139.1	136.8	139.6 (138.7)	▲ 5.0	-	2.1
期末在庫率	89.3%	91.9%	96.3% (98.6%)	▲ 3.5	-	4.5
(参考)						
収穫面積(百万ha)	23.38	23.57	23.52 (23.6)	-	-	▲ 0.2
単収(t/ha)	5.74	5.81	5.86 (5.83)	-	-	0.9

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 February 2023)

図：中国の小麦輸入量と輸入先国の推移



表：中国の小麦輸入量と輸入先

(輸出量: 万トン、シェア%)

2022年12月			2022年1月～2022年12月			2021年1月～2021年12月		
国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア
豪州	55.1	51.6	豪州	572.0	57.9	豪州	273.4	28.1
カナダ	36.5	34.2	カナダ	179.0	18.1	米国	272.6	28.1
フランス	12.7	11.9	フランス	169.8	17.2	カナダ	254.0	26.1
米国	1.2	1.1	米国	62.6	6.3	フランス	141.6	14.6
カザフスタン	0.8	0.7	カザフスタン	3.1	0.3	カザフスタン	18.7	1.9
ロシア	0.6	0.5	ロシア	0.9	0.1	ロシア	6.6	0.7
-	-	-	-	-	-	ロシア	4.9	0.5
計	106.8	100.0	計	987.3	100.0	計	971.8	100.0

資料：中国海関統計(2023. 1. 20)をもとに農林水産省で作成資料

＜ ロシア ＞ 生産量、輸出量とも前月から上方修正され史上最高

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量(クリミア地域分を含まず)は、前月予測からの変更はなく、史上最高の92.0百万トン(前年度比22.4%増)となる見込み。作期別生産量は、冬小麦、春小麦とも前月予測からの変更はなく、それぞれ68.0百万トン(前年度比30.3%増)、24.0百万トン(同4.5%増、史上最高)。なお、ロシア連邦統計庁(2023.3.10)によれば、2022/23年度の生産量は前年度比37.0%増の104.2百万トン(冬小麦：74.0百万トン、春小麦：30.2百万トン)の見込み。

現地情報会社によれば、2023/24年度の冬小麦の播種面積は、前年度(29.40百万ヘクタール)に比べ1.4%減少の29.05百万ヘクタールの見込み。なお、昨年12月、パトルシェフ農相は小麦の値崩れを防ぐために、播種面積を削減する必要があると発言している。

冬小麦の生育状況は、ロシアヨーロッパ部南部の一部で再生長が始まった。一方、北部では圃場に氷層が形成されたため、その影響が懸念されている。一方、アジア部のウラル地域では越冬は順調に進んだ。なお、3月初旬時点で、ロシアの冬穀物等の越冬状況は93%以上が良好または並みであった。

また、ロシア南部では春穀物等の播種が開始された。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ31.8%増加の43.5百万トンの見込み。また、ロシア産小麦の輸出価格(FOB)は、豊富な輸出余力から、3月3日時点で295ドル/トンと前月(2月6日時点305ドル/トン)より下落し、主要小麦輸出国の中で最低となった(最高は米国の364ドル/トン)。

現地情報会社によれば、旧来の輸出先である中東、北アフリカ諸国向けの輸出量は、ウクライナ侵攻前後(注)では、国ごとで増減があるものの、全体量としては大きな変化はない。国別には、伝統的な輸出先国であるイラン向けは減少したものの、サウジアラビア向けは増加。当初減少していたトルコ向けは2022年10月から輸出が増加している。

また、2023年2月の輸出量は、前月に比べ22.1%減少したものの、同月の過去3年平均(276.3万トン)を上回る303.8万トンと高い水準にある。なお、当初の予測に比べ2月の輸出量は伸びなかったが、その要因は、悪天候による港湾の稼働が低下したことによるものとみられる。このため、一部が3月分の輸出に持ち越され、3月は同月としては最高の435万トンになると見込まれている。

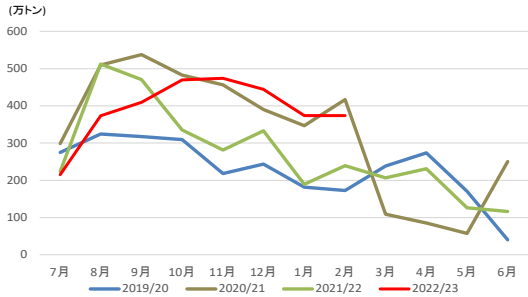
(注) (2020/21年度及び2021/22年度(7月～翌年2月)の平均と2022/23年度(7月～翌年2月)の輸出数量比較)

小麦一口シア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	85.4	75.2	92.0 (95.4)	-	22.4
消費量	42.5	42.8	45.5 (45.8)	-	6.4
うち飼料用	19.0	19.5	21.5 (20.5)	-	10.3
輸出量	39.1	33.0	43.5 (43.6)	-	31.8
輸入量	0.4	0.3	0.3 (0.2)	-	-
期末在庫量	11.4	11.1	14.4 (17.5)	-	29.8
期末在庫率	13.9%	14.6%	16.2% (19.5%)	-	1.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	28.68	27.63	29.10 (28.7)	-	5.3
単収(t/ha)	2.98	2.72	3.16 (3.32)	-	16.2

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 February 2023)

図：ロシアの月別小麦輸出量の推移



資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

表：ロシア産小麦の主なアフリカ諸国、中東諸国への輸出量と輸出先国

アフリカ諸国			増減率	中東諸国			増減率
国名	2020/21年度 2021/22年度 輸出量の平均	2022/23年度 輸出量		国名	2020/21年度 2021/22年度 輸出量の平均	2022/23年度 輸出量	
エジプト	575.8	540.4	-6.1	トルコ	555.0	514.2	-7.3
アルジェリア	171.4	135.3	-21.0	イラン	282.9	157.8	-44.2
ナイジェリア	100.0	18.2	-81.8	イエメン	46.2	62.1	34.4
スーダン	87.0	104.5	20.1	イスラエル	39.8	63.3	59.0
ケニア	46.6	89.2	91.6	UAE	20.9	39.8	90.4
タンザニア	37.9	35.1	-7.4	レバノン	18.2	15.0	-17.6
南アフリカ	25.2	36.4	44.7	オマーン	14.3	36.7	157.5
セネガル	28.0	14.3	-48.9	サウジアラビア	52.0	191.1	267.5
合計	1,071.8	973.4	-9.2	合計	1,029.2	1,080.0	4.9

(注) 各年度の期間は7月から翌年2月

資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 小麦の輸出量は前年度同期比 37.4%減の 1,133.7 万トン

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、前月予測からの変更はなく、21.0百万トンと、史上最高だった前年度(33.0百万トン)から36.4%減少、過去5年平均(27.9百万トン)に比べ24.8%減少する見込み。また、ウクライナ農業政策食料省2023年度第1回生産見通し(2023.3.21)によれば、2022/23年度の収穫量は20.5百万トンの見込み。

同省によれば、2023/24年度の冬小麦の播種済面積は、前年度に比べ16.7%減少の4.17百万ヘクタール。また、春小麦の播種面積は同30.7%増加の0.28百万ヘクタールの見込み。春小麦の播種面積の増加は、相対的に肥料等のコストがかさむとうもろこし等の作物からシフトしたとみられる。なお、2023/24年度の生産量は16.6百万トン(2022/23年度対比19.2%減)の見込み。

現地情報会社によれば、ウクライナ国立農業科学アカデミーは穀物全体の生産量減少の要因を①作付面積の減少、②資金不足、③肥料投入量の50～60%減少等としている。

冬小麦の生育状況は、2023年2月は温暖であったため、天候による作物への影響はなかった。今後、気温上昇の安定化で再生長が本格化するが、その時期は例年通り3月中旬以降とみられている。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ28.3%減少の13.5百万トンの見込み。「黒海穀物イニシアチブ」と陸上輸送等による輸出の継続から、前年度に比べ28.3%の減少に留まっている。

ウクライナ政府等によれば、2022/23年度の2022年7月～2023年2月のウクライナの小麦の輸出量は前年度同期比37.4%減の1,133.7万トン。この輸出量には、海上輸送に加え、陸路等での輸出分も含まれる。また、輸出先国は、トルコ(19.5%)、ルーマニア(16.2%)、スペイン(14.3%)の順。前年度に比べ、スペイン、ルーマニア、ポーランド等の一部のEU諸国向けが増加した。ウクライナの主要港湾の封鎖と輸出に制約がある一方、EU国境の鉄道インフラが整備されつつあることが背景にある。

また、黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」によれば、合意に基づく2022年8月から2023年2月までの黒海港湾からの小麦輸出量は671.2万トンで、輸出先国は、スペイン(24.5%)、トルコ(18.0%)、バングラデシュ(9.6%)の順。なお、国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意は、2023年3月19日以降延長された。延長期間は未決着(ウクライナは120日間延長、ロシアは60日間延長を主張)。

小麦－ウクライナ (主に冬小麦を栽培) (単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	25.4	33.0	21.0 (25.2)	-	▲ 36.4
消費量	8.7	10.0	9.2 (12.7)	-	▲ 8.0
うち飼料用	2.6	4.0	4.0 (2.6)	-	-
輸 出 量	16.9	18.8	13.5 (14.0)	-	▲ 28.3
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	-
期末在庫量	1.5	5.8	4.2 (4.5)	▲ 0.0	▲ 27.7
期末在庫率	5.9%	20.0%	18.4% (16.9%)	▲ 0.2	▲ 1.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	6.85	7.41	5.35 (6.6)	-	▲ 27.8
単収(t/ha)	3.71	4.45	3.93 (3.84)	-	▲ 11.7

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 February 2023)

写真:ウクライナの冬小麦(中央部ポルタバ州)



冬小麦の状態は並で、
子葉形成期(5枚)に入
った。
今週から施肥を行っ
ている。これまでの年は
秋、春とも施肥を行っ
てきたが、前年は価格が非
常に高かったため、秋期
には全く肥料を与えな
かった。暖かくなったら
除草処理を行う予定。
(3月1日)

表: ウクライナ産小麦の輸出量と輸出先国

2022/23年度 (2023年2月)			2022/23年度 (2022年7月～2023年2月)			2021/22年度 (2021年7月～2022年2月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
トルコ	33.0	20.5	トルコ	221.3	19.5	エジプト	273.8	15.1
ルーマニア	27.4	17.1	ルーマニア	183.6	16.2	インドネシア	265.5	14.7
スペイン	24.0	14.9	スペイン	161.7	14.3	トルコ	178.7	9.9
バングラデシュ	20.0	12.4	ポーランド	79.7	7.0	パキスタン	146.9	8.1
ポーランド	12.4	7.7	バングラデシュ	60.5	5.3	サウジアラビア	75.1	4.1
タイ	0.7	0.4	イタリア	46.4	4.1	イエメン	64.7	3.6
サウジアラビア	0.6	0.4	エジプト	39.3	3.5	バングラデシュ	63.2	3.5
その他	42.6	26.5	その他	341.2	30.1	その他	743.4	41.0
計	160.7	100.0	計	1,133.7	100.0	計	1,811.3	100.0

資料: 現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・インド等で上方修正も、アルゼンチン等で下方修正され、前月から下方修正された。

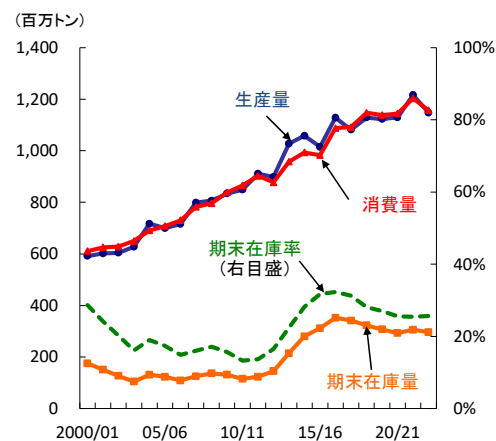
消費量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・インド等で上方修正も、イラン、マレーシア、エジプト等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・インド、ウクライナ等で上方修正も、アルゼンチン、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↑



資料：USDA「PS&D」(2023.3.8)をもとに農林水産省にて作成

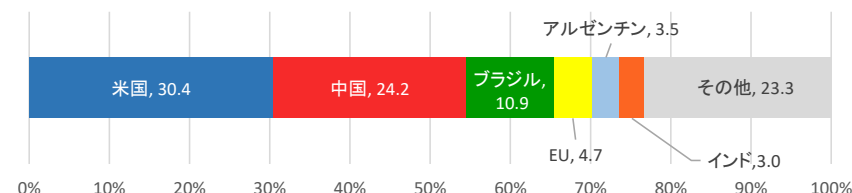
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

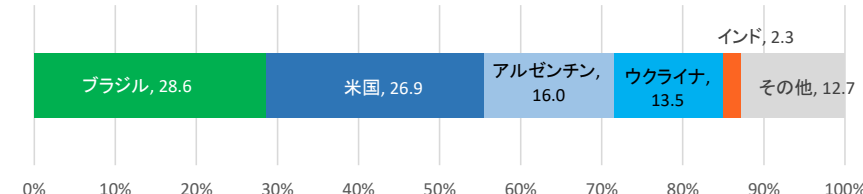
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生産量	1,129.4	1,216.0	1,147.5	▲ 3.8	▲ 5.6
消費量	1,144.0	1,203.2	1,156.8	▲ 5.6	▲ 3.9
うち飼料用	723.9	749.4	727.0	▲ 2.2	▲ 3.0
輸出量	182.7	205.7	174.7	▲ 6.4	▲ 15.1
輸入量	184.9	184.5	174.5	▲ 2.5	▲ 5.4
期末在庫量	292.8	305.7	296.5	1.2	▲ 3.0
期末在庫率	25.6%	25.4%	25.6%	0.2	0.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(8 March 2023)

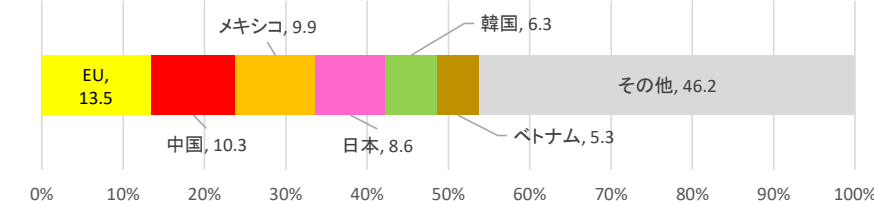
○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,147.5 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸出量(174.7 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸入量(174.5 百万トン) (単位：%)



（２）国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量は収穫面積・単収の減少により減産、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、夏季のコーンベルトの一部での高温・乾燥の影響から前年度より8.9%減の348.8百万トンの見込み。なお、収穫面積は、2008/09年度以来の低水準の見込み。

前年11月末時点で、収穫は例年より早いペースで終了した。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少に伴い、前年度より4.2%減の303.9百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、米国産の輸出価格は比較的下がっている中でも輸出ペースが低調なため、前月予測から1.9百万トン下方修正され、前年度より25.2%減の47.0百万トンの見込み。これは、2019/20年度（45.2百万トン）以来の低水準の見込み。輸出量減少の背景には、主要輸出先国である中国が輸入先の多角化を進めるため、2023年以降ブラジル産の輸入を本格化させていることも

あるとみられる。なお、2022/23年度における輸出成約は、2月23日（26週：約半年分）までで29.2百万トンと、前年度同期より39%減、過去5年平均を31%下回る水準。

USDAによれば、2023年輸出検証高(2023年1月5日～3月2日)は5.6百万トンであり、内訳はメキシコ（2.5百万トン）、日本（0.7百万トン）、中国（0.5百万トン）、コロンビア（0.4百万トン）の順である。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、輸出量の下方向修正を受け、前月予測から1.9百万トン上方修正されたものの、前年度より2.6%減の34.1百万トンの見込み。

期末在庫率は9.7%で、前年度より上昇するものの、引き続き低水準の見込み。

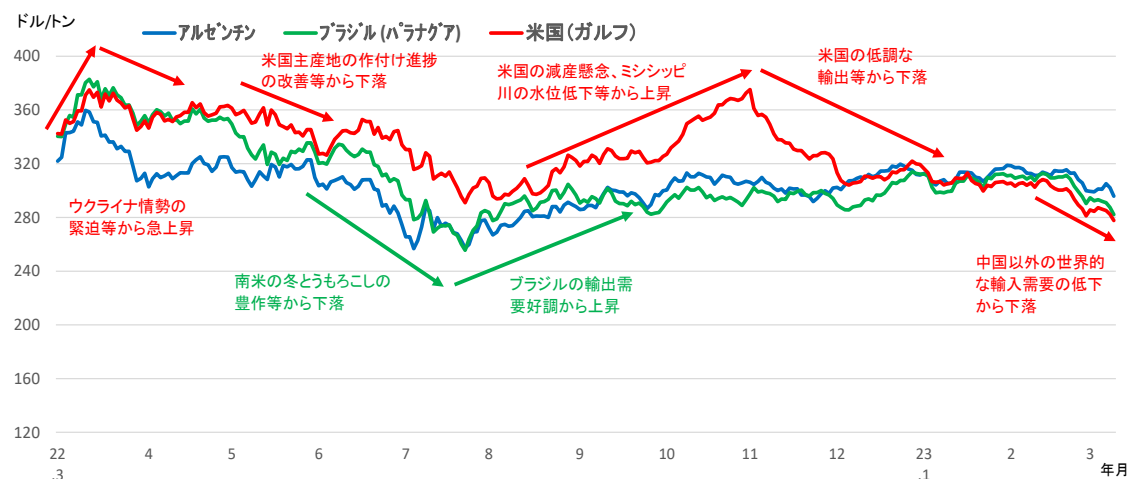
とうもろこし－米国

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年9月～23年8月)		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	358.5	382.9	348.8	-	▲ 8.9
消 費 量	306.7	317.1	303.9	-	▲ 4.2
うち飼料用	142.4	145.3	134.0	-	▲ 7.8
エタノール用等	127.7	135.3	133.4	-	▲ 1.4
輸 出 量	69.8	62.8	47.0	▲ 1.9	▲ 25.2
輸 入 量	0.6	0.6	1.3	-	104.8
期末在庫量	31.4	35.0	34.1	1.9	▲ 2.6
期末在庫率	8.3%	9.2%	9.7%	0.6	0.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	33.31	34.53	32.05	-	▲ 7.2
単収(t/ha)	10.76	11.09	10.88	-	▲ 1.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2023)

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格（FOB）の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 生産量は史上最高、輸出量は世界第1位の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加により、前年度より7.8%増の125.0百万トンで史上最高の見込み。

中西部での冬とうもろこしの作付けは、当初、降雨過多による大豆の収穫遅れを受けて遅れていたが、3月当初には平年並みのペースとなった。3月上旬から中旬にかけて南部リオ・グランデ・ド・スール州等の一部地域では高温・乾燥傾向が続いているものの、中西部やその他の地域では降雨により、冬とうもろこしの生育に恩恵となっている。

ブラジル食料供給公社（CONAB）月例報告（2023.3.9）によれば、収穫中の2022/23年度の夏とうもろこしの生産量は、前年度比6.9%増の26.8百万トンの見込み。一方、大豆収穫後の2月以降に作付けされる冬とうもろこしの生産量は、前年度比11.1%増の97.9百万トンの見込み。夏作・冬作の合計では前年度比10.2%増の124.7百万トンで史上最高の見込み。（P.23 大豆ーブラジルのクロップカレンダー参照）。

夏とうもろこしの収穫進捗率は、南部のリオ・グランデ・ド・スール州で3月16日現在、68%で過去5年平均（54%）より進んでいる。冬とうもろこしの作付進捗率は、中西部のマット・グロソ州で3月17日現在98%、南部のパラナ州で3月13日現在61%となっている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より3.5%増の73.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より3.1%増の50.0百万トンで史上最高となり、世界第1位の輸出国となる見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2023年1～2月の輸出量は844.7万トンで、前年同期（349.9万トン）と比べ2.4倍となっている。内訳は、1位が日本151.8万トン、2位が中国105.4万トン、3位が韓国90.4万トンの順。前年11月末以降、中国向け輸出が開始され、今後、輸出が本格化するとみられる。2月の輸出量は、227.6万トンで、前年同月（76.7万トン）と比べ、3.0倍となっている。

とうもろこしーブラジル

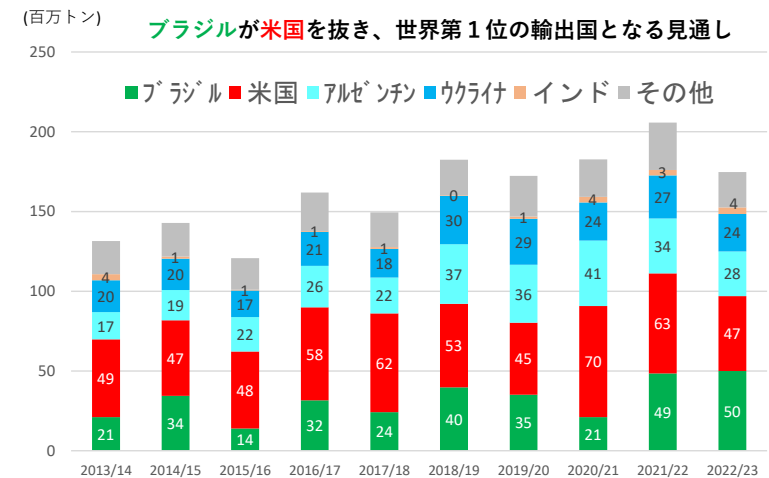
（大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが約8割、夏とうもろこしは約2割）

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（23年3月～24年2月）		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	87.0	116.0	125.0 (123.1)	－	7.8
消 費 量	70.0	70.5	73.0 (74.4)	－	3.5
うち飼料用	59.5	59.5	61.5 (52.5)	－	3.4
輸 出 量	21.0	48.5	50.0 (48.0)	－	3.1
輸 入 量	2.9	2.6	1.3 (0.5)	－	▲ 50.0
期末在庫量	4.2	3.8	7.1 (5.9)	▲ 0.5	88.0
期末在庫率	4.6%	3.2%	5.7% (4.8%)	▲ 0.4	2.6
（参考）					
収穫面積(百万ha)	19.90	21.80	22.70 (21.80)	－	4.1
単収(t/ha)	4.37	5.32	5.51 (5.65)	－	3.6

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2023)
IGC「Grain Market Report」(16 February 2023)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」（2023.3.8）のデータをもとに農林水産省にて作成

＜ アルゼンチン ＞ 干ばつにより大幅減産見込み（輸出税継続）

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、2 月から 3 月上旬の高温・乾燥により、作付面積の約 2/3 を占める出穂期の遅植えとうもろこしがコルドバ州やサンタフェ州など主産地で被害を受け、単収が下方修正され、前月予測から 7.0 百万トン下方修正となり、前年度より 19.2%減の 40.0 百万トンの見込み。生産量は、2017/18 年度（32.0 百万トン）以来の低水準となる見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2023.3.16）によれば、作柄は、平年並みから良が 40%と前年度同期（80%）を大きく下回る。生産量は、長引く乾燥の影響で 36.0 百万トンと前年度（52.0 百万トン）から大幅に減少し、21 年ぶりの低水準の見通し。過去 60 年間で最悪の干ばつとも言われている。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 18.9%減の 12.0 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、生産量の下方修正に伴い、前月予測から 7.0 百万トン下方修正され、前年度より 18.6%減の 28.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2023 年 1 月の輸出量は 100.7 万トンで、前年同月（184.9 万トン）より 45.5%減。内訳は、1 位がペルー 16.0 万トン、2 位がマレーシア 14.5 万トン、3 位がコロンビア 11.0 万トンの順。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7%から 12%へ引き上げ、継続している。

2021 年 12 月 17 日、アルゼンチン農牧水産大臣は、とうもろこしと小麦の輸出に関し、国内向け穀物供給不足の回避と食料品価格の上昇を抑制するため、輸出上限数量を設定することを表明。3 月中旬現在、とうもろこしの輸出上限数量は 2021/22 年度 36 百万トン、2022/23 年度 20 百万トンに設定されている。

なお、アルゼンチン政府は、今般の干ばつ対策として、農業関係者に対し、融資や減税、割引手形を発行するなどの救済施策を公表した。

とうもろこしーアルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（23年3月～24年2月）			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	52.0	49.5	40.0 (53.5)	▲ 7.0	▲ 19.2	
消 費 量	13.5	14.8	12.0 (20.3)	－	▲ 18.9	
うち飼料用	9.5	10.9	8.0 (15.5)	－	▲ 26.6	
輸 出 量	40.9	34.4	28.0 (34.9)	▲ 7.0	▲ 18.6	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.4)	－	－	
期末在庫量	1.2	1.5	1.5 (2.2)	－	－	
期末在庫率	2.2%	3.0%	3.7% (4.0%)	0.6	0.7	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	6.55	7.10	6.70 (8.00)	－	▲ 5.6	
単収(t/ha)	7.94	6.97	5.97 (6.69)	▲ 1.04	▲ 14.3	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 February 2023)

写真：北部サンタフェ州の早植えとうもろこしの圃場風景 （2月26日撮影）

前年9月上旬に作付け。生育期間を通して干ばつの影響を受け続けている。先端部分は成長していない。収穫は3月下旬の予定。



< 中国 > 生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、主産地の黒竜江省等東北地区及び華北平原で生育期を通じて良好な天候に恵まれたことから、単収の増加により、前年度より1.7%増の277.2百万トンで史上最高の見込み。

前年11月上旬時点で、春とうもろこし、夏とうもろこしの収穫は既に終了。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、旺盛な飼料用消費から前年度より2.1%増の297.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内産の豊作等を受け、前年度より17.7%減の18.0百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022年1～12月の輸入量は20.6百万トンで、前年同期比で27.3%減。内訳は、米国産14.9百万トン（72%）、ウクライナ産5.3百万トン（26%）。前年5月以降、2021年同月に比べウクライナ産の輸入が大幅に減少している。ただし、前年12月のウクライナ産の輸入量は28.6万トンと、2021年同月（92.0万トン）には及ばないものの、前年8月以降の黒海経由の輸出再開を受けて、回復傾向にある。（右図、P.14 ウクライナ参照）

なお、前年11月末にCOFCO（中糧集団）が買い付けた6.8万トンのブラジル産とうもろこしを積んだばら積船が、1月上旬に広東省の港に到着した。今後、ブラジル産の輸入を増加させ、米国産への輸入依存を減らす意向とみられる。他の穀物も含めた今後の中国の輸入動向に注視が必要。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023年1月号」によると、1月の国内流通価格は、新型コロナ防疫政策の緩和後、春節を受け、多くの買付業者が次々と買付を中止し、市場の売買が低迷したこと、3,040元/トンと前月（3,020元/トン）から概ね安定した。今後は、とうもろこし産業の消費が回復すると予想され、飼料の消費も高止まりしている一方、農家の販売進捗は遅く、短期的には国内価格は高値を維持しながら推移するとみられる。また、1月の輸入価格は、2,820元/トンと前月（2,900元/トン）から下落した。

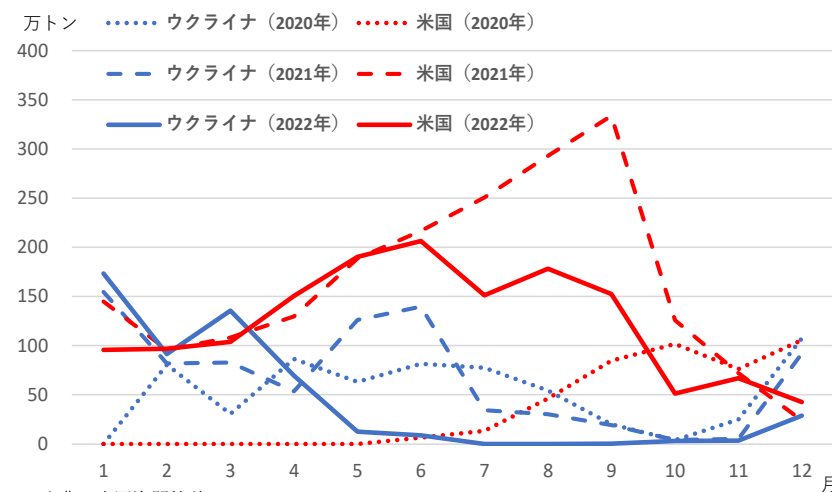
とうもろこし—中国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	260.7	272.6	277.2 (277.2)	-	1.7	
消 費 量	285.0	291.0	297.0 (308.4)	-	2.1	
うち飼料用	203.0	209.0	216.0 (207.0)	-	3.3	
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (0.1)	-	-	
輸 入 量	29.5	21.9	18.0 (19.0)	-	▲ 17.7	
期末在庫量	205.7	209.1	207.3 (176.0)	-	▲ 0.9	
期末在庫率	72.2%	71.9%	69.8% (57.0%)	-	▲ 2.1	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	41.26	43.32	43.07 (43.00)	-	▲ 0.6	
単収(t/ha)	6.32	6.29	6.44 (6.45)	-	2.4	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 February 2023)

図：中国におけるウクライナ、米国産とうもろこしの輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

＜ ウクライナ ＞ ロシアによる侵攻により、輸出量は前年度より 13%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫期の前年 10 月～11 月の記録的な降雨に加え、労働力不足、燃料費の高騰、輸送や貯蔵の問題といったロシアによる侵攻の影響を受け、主産地の収穫が著しく遅れたこと、一部のとうもろこしが刈り残され、圃場に放置されていることなどから、収穫面積及び単収が減少し、史上最高の生産量となった前年度より 35.9%減の 27.0 百万トンの見込み。

ウクライナ農業政策食料省によれば、3 月 9 日時点で、収穫済面積は 4.0 百万ヘクタール、収穫進捗率は 96%となっている。

また、ウクライナ農業政策食料省 2023 年度第 1 回生産見通し（2023.3.21）によれば、2023/24 年度の作付面積は 3.6 百万ヘクタール（2022/23 年度比 11.1%減）、生産量は 21.7 百万トン（2022/23 年度 25.6 百万トンから 15.2%減）と更なる減産の見通し。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 43.1%減の 6.2 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、EU 及び中国向けの輸出増加を受けて前月予測から 1.0 百万トン上方修正されたものの、前年度より 12.9%減の 23.5 百万トンの見込み。

ウクライナ政府等によれば、2022/23 年度（2022 年 10 月～2023 年 9 月）のうち、2022 年 10 月～2023 年 2 月の輸出量は 1,379 万トンで、前年度同期（1,790 万トン）に比べ 22.9%減。輸出先国は、中国、ルーマニア、スペイン、ハンガリー、イタリア、ポーランドの順となっている。なお、この輸出量には、海上輸送に加え、陸路等での輸出分も含まれる。

黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」によれば、輸出が再開された前年 8 月 1 日～2 月 28 日の黒海港湾からのとうもろこし輸出量は 1,102 万トンであり、輸出先国は、中国（297 万トン）、スペイン（203 万トン）、イタリア（117 万トン）、オランダ（92 万トン）の順となっている。

なお、国連、ウクライナ、ロシア、トルコの 4 者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意は、2023 年 3 月 19 日以降延長された。延長期間は未決着（ウクライナは 120 日間延長、ロシアは 60 日間延長を主張）。

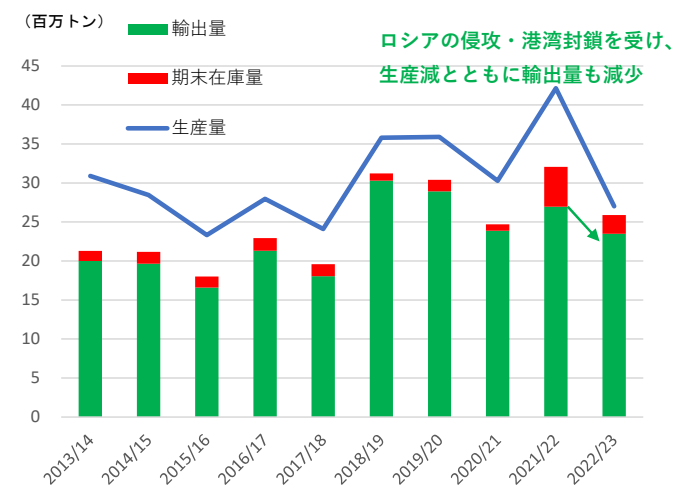
とうもろこしーウクライナ

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	30.3	42.1	27.0 (25.5)	-	▲ 35.9	
消費量	7.1	10.9	6.2 (8.9)	-	▲ 43.1	
うち飼料用	5.9	9.7	5.0 (5.5)	-	▲ 48.5	
輸出量	23.9	27.0	23.5 (19.0)	1.0	▲ 12.9	
輸入量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	▲ 100.0	
期末在庫量	0.8	5.1	2.4 (4.5)	▲ 1.0	▲ 53.0	
期末在庫率	2.7%	13.4%	8.0% (16.3%)	▲ 3.8	▲ 5.4	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	5.40	5.49	4.00 (4.00)	-	▲ 27.1	
単収(t/ha)	5.62	7.68	6.75 (6.38)	-	▲ 12.1	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 February 2023)

図：とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移



資料：USDA 「PS&D」 (2023. 3. 8) をもとに農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2022/23 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

- ・ブラジル等で下方修正も、インド等で上方修正され、前月から上方修正された。

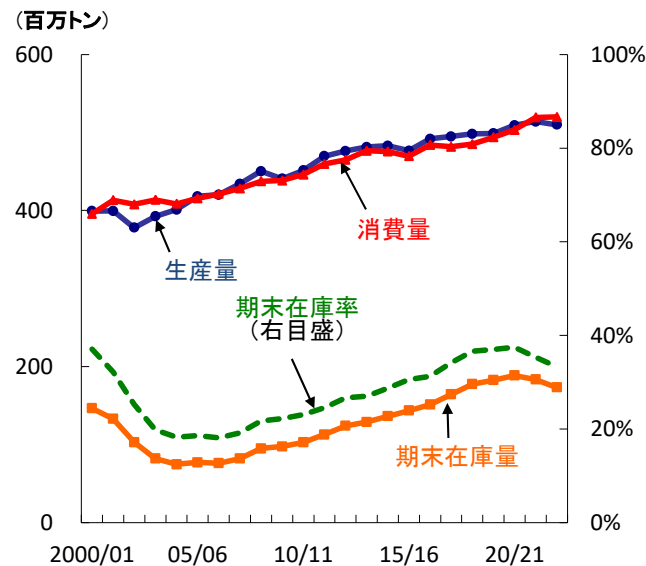
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

- ・ブラジル等で下方修正も、インド、ベトナム等で上方修正され、前月から上方修正され、史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

- ・米国等で下方修正も、インド等で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↑



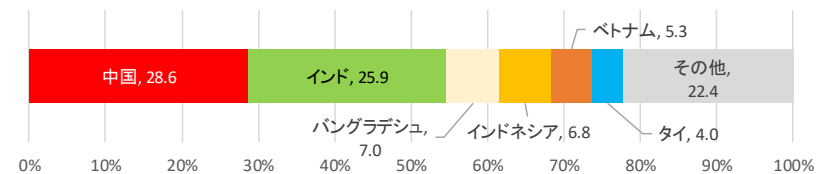
◎世界のコメ需給

（単位：百万精米トン）

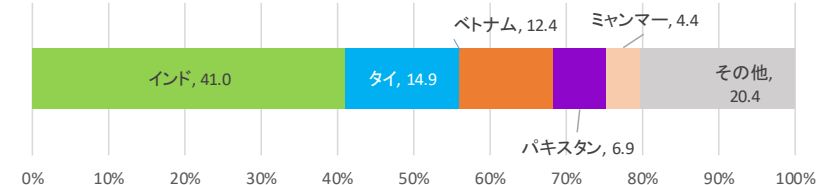
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	509.3	514.0	509.8	6.9	▲ 0.8
消 費 量	503.4	519.2	520.0	2.8	0.1
輸 出 量	51.2	56.8	54.9	0.9	▲ 3.3
輸 入 量	46.5	54.6	53.7	0.6	▲ 1.7
期末在庫量	188.7	183.4	173.3	4.2	▲ 5.5
期末在庫率	37.5%	35.3%	33.3%	0.6	▲ 2.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（8 March, 2023）

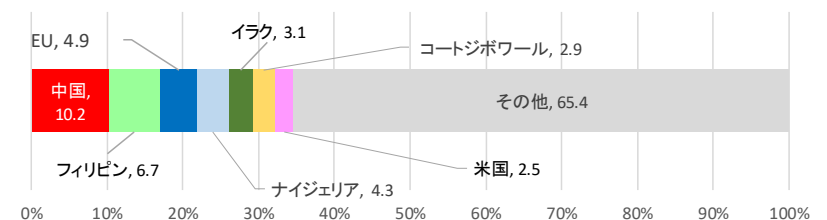
○ 2022/23年度 世界のコメの生産量(509.8百万トン)（単位：%）



○ 2022/23年度 世界のコメの輸出量(54.9百万トン)（単位：%）



○ 2022/23年度 世界のコメの輸入量(53.7百万トン)（単位：%）



(2) 国別のコメの需給動向

< 米国 > カリフォルニア州の豪雨・豪雪で灌漑用水の貯水水準が上昇

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、長粒種、中・短粒種とも収穫面積及び単収の減少により、対前年度比 16.3%減の 5.1 百万トンと、1993/94 年度以来の低水準となる見込み。収穫面積は、作付けが長粒種から収益性がよい大豆等へシフトしたことや、厳しい干ばつの長期化による中・短粒種の灌漑用水不足等で、対前年度比で 12.9%減少し、1983/84 年度以来の低水準となる見込み。

なお、USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2023.3.14, 21)等によると、灌漑用水不足や取水制限が続いていたカリフォルニア州(中・短粒種の主産地)では、前年 12 月末から本年 1 月中旬に加え、2 月下旬にも豪雨・豪雪があり、カリフォルニア州の灌漑用水の供給源となるシエラネバダ山脈の積雪量や河川の流水量が、3 月上旬時点で 1991~2020 年の平均を大きく上回る水準(150%以上)となっている(右図参照)。今後の作付けに向けて一定量の灌漑用水が供給されるとみられる。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少による供給量減少から、対前年度比 2.7%減の 4.7 百万トンの見込み。

2022/23 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 10.8%増の 1.3 百万トンと、史上最高の見込み。特に、中・短粒種の減産に伴い、同種の輸入量が 27%増と大幅に増加している。

2022/23 年度の輸出量は、輸出価格高騰により、長粒種は南米諸国に比べ輸出競争力が劣ること、及び中・短粒種は輸出需要が減少していることから、前月予測から 0.1 百万トン下方修正され、対前年度比 28.4%減の 1.9 百万トンと、1985/86 年度以来の低水準の見込み。

USDA「Grain: World Markets and Trade」(2023.3.8)によれば、長粒種の価格は供給量の減少によりここ数か月間高止まりしており、3 月 7 日までの週のイラク向け長粒種(2 等、碎米 4%混入)は 760 ドル/トンと、前月に引き続き、2008 年 10 月初旬(772 ドル/トン)以来の高値となっている。なお中粒種(地中海向けカリフォルニア米(1 等、碎米 4%混入)の価格情報の公表は、今月はなかった。(右図参照)

コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは 1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約 2 割

(単位:百万精米トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年 8 月~23年 7 月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	7.2	6.1	5.1	-	▲ 16.3
消費量	4.9	4.8	4.7	-	▲ 2.7
輸出量	3.0	2.6	1.9	▲ 0.1	▲ 28.4
輸入量	1.1	1.2	1.3	-	10.8
期末在庫量	1.4	1.3	1.2	0.1	▲ 8.7
期末在庫率	17.8%	17.0%	17.6%	1.8	0.6

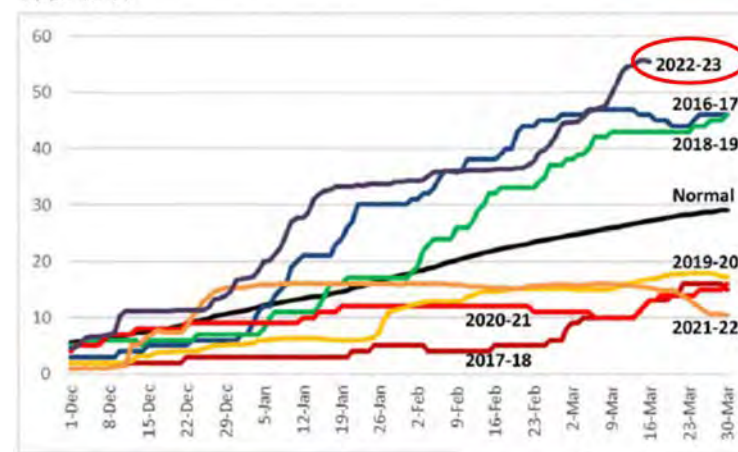
(参考)

収穫面積(百万ha)	1.21	1.01	0.88	-	▲ 12.9
単収(もみt/ha)	8.54	8.64	8.28	-	▲ 4.2

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March, 2023)

図:カリフォルニア州シエラネバダ山脈の年度別降雪量

(単位:インチ)



資料: USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2023.3.21)より。

< インド > 2022/23 年度の生産量・消費量とも史上最高の見込み

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23 年度の実生産量は、収穫面積と単収が上方修正されたことから、前月予測から 7.0 百万トン上方修正され、対前年度比 2.0%増の 132.0 百万トンと史上最高の見込み。インドのコメ生産量の 30%を占めるラビ米の作付けが前年度より 25%増加し、モンスーン期の降雨の遅れによるカリフ米の減産分が相殺される見通し。

ラビ米の生産地域の大部分は、土壌水分が良好で肥料も十分であったことから、前年 10 月に例年通り作付けが行われた。ラビ米は主に灌漑栽培されており、本年 2 月末時点の灌漑用水の貯水率は 8 割程度となっている。ラビ米は平年以上の作柄とみられる。収穫は 3 月に始まり、4 月末には終了する予定。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23 年度の消費量は、史上最高となった生産量の上方修正を受け、前月予測から 2.5 百万トン上方修正され、前年度に引き続き政府の低所得世帯向け食料配給プログラム（約 8 億人が対象）向けにコメを供給していることもあり、前年度より 0.5%増の 111.0 百万トンと、史上最高となる見込み。

2022/23 年度の輸出量は、輸出規制は行われているものの、引き続き他のアジア諸国より価格競争力があること等から、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、対前年度比 2.1%増の 22.5 百万トンの見込み。

なお、インドは、カリフ米の生産減少による国内価格高騰を防止する観点から、前年 9 月 9 日に輸出規制を発動（碎米（100%）の輸出禁止及びバスマティ米・パーボイルド米以外のコメへの輸出税課税（20%））。ただし、依然として世界の輸出量の 40%を占め、世界第 1 位の輸出国となる見込み。

同「Grain: World Markets and Trade」（2023.3.8）によれば、インド産米（碎米 5%混入）の 3 月 7 日までの週の輸出価格は 435 ドル/トンと、前月から横ばいで、依然アジア主要輸出国の中で最低価格水準となっている（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。

2022/23 年度の期末在庫量は、生産量の上方修正に伴い前月予測から 3.5 百万トン上方修正されたものの、対前年度比 4.4%減の 32.5 百万トンの見込み。

コメ・インド

雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ（小麦）の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

（単位：百万精米トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年 9 月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	124.4	129.5	132.0 (123.8)	7.0	2.0	
消 費 量	101.1	110.5	111.0 (107.3)	2.5	0.5	
輸 出 量	20.2	22.0	22.5 (19.7)	1.0	2.1	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-	
期末在庫量	37.0	34.0	32.5 (29.7)	3.5	▲ 4.4	
期末在庫率	30.5%	25.7%	24.3% (23.4%)	2.0	▲ 1.3	

(参考)

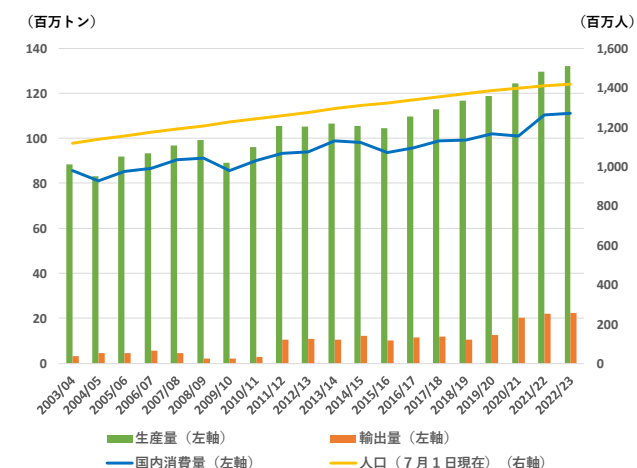
収穫面積(百万ha)	45.77	46.28	47.00 (45.00)	1.50	1.6
単収(もみt/ha)	4.08	4.20	4.21 (2.75)	0.09	0.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、

「World Agricultural Production」(8 March, 2023)

IGC「Grain Market Report」(16 February 2023) (単収は精米t/ha)

図：インドのコメ生産量・消費量・輸出量と人口の推移



資料：USDA「PS&D」（2023.3.8）及び国連「World Population Prospects 2022」
をもとに農林水産省にて作成。なお 2022 年の人口は推計値。

< 中国 > 2022/23 年度の輸入量は史上最高となった前年度より減少の見込み

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 2.0%減の 146.0 百万トンと、2013/14 年度以来の低水準の見込み。

例年どおりであれば、黒竜江省で 4 月から育苗作業が開始される見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用米の消費量の減少から、対前年度比 0.9%減の 155.0 百万トンとなる見込み。なお、中国国家糧食及び物資備蓄局の推計では、ここ 3 年ほど、毎年 30 百万トン（もみベース）程度 of 古米が飼料用として仕向けられているとのこと。

2022/23 年度の輸入量は、輸入ペースの予想以上の増加により、前月予測から 0.3 百万トン上方修正されたものの、碎米の主要輸入先国であるパキスタンの洪水による生産減少見通しやインドのコメ輸出規制により、史上最高となった対前年度比 7.6%減の 5.5 百万トンの見込み。中国はこれまで、とうもろこし等飼料用穀物の価格高騰を背景に、飼料用等として低価格の碎米をインド等から輸入してきた。

中国海関統計によれば、2022 年の年間輸入量は、前年の 492.6 万トンから 25.0%増加し、615.6 万トンとなった。輸入先はインドが 218.0 万トンと最も多く、対前年同期比で 99.9%の増加。次いでパキスタンが 119.7 万トン（対前年同期比 24.5%の増加）となっている。なお、11 月以降、インドの輸出規制やパキスタンの洪水による減産の影響から、輸入量は 2020 年及び 2021 年を下回った。

USDAによれば、2022 年に、コメの関税割当て制度が設けられてから初めて、割当数量（5.32 百万トン）を超える輸入となった。

コメー中国

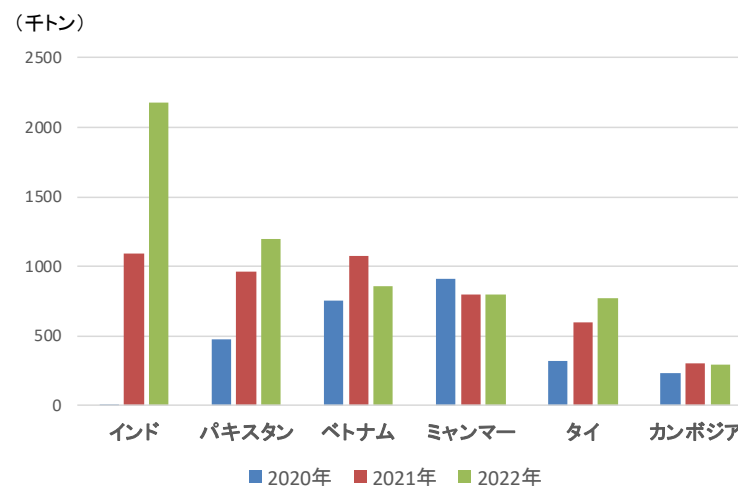
北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

(単位：百万精米トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	148.3	149.0	146.0 (146.0)	-	▲ 2.0
消 費 量	150.3	156.4	155.0 (151.1)	-	▲ 0.9
輸 出 量	2.2	2.1	2.2 (2.2)	-	5.8
輸 入 量	4.2	6.0	5.5 (4.3)	0.3	▲ 7.6
期末在庫量	116.5	113.0	107.3 (104.9)	0.3	▲ 5.0
期末在庫率	76.4%	71.3%	68.3% (68.4%)	0.2	▲ 3.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	30.08	29.92	29.45 (30.03)	-	▲ 1.6
単収(もみt/ha)	7.04	7.11	7.08 (4.86)	-	▲ 0.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March, 2023)
IGC「Grain Market Report」(16 February 2023) (単収は精米t/ha)

図： 中国のコメ輸入先国の変化



出典：中国海関統計

< タイ > 乾季米（全作付面積の約 2 割）は 43%が収穫済み

【生育・生産動向】USDA によれば、2021/22 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、良好な天候と十分な降雨により、2020/21 年度比 5.3%増の 19.9 百万トンの見込み。

2022/23 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、作付面積・単収ともに増加することが見込まれることから、対前年度比 1.6%増の 20.2 百万トンの見込み。なお、単収の増加は乾季にもかかわらず、十分な降雨による潤沢な灌漑用水が供給されたことによる。また、作付面積の増加の背景には、農家出荷価格の上昇が農家の作付け意欲を刺激していることもあるとみられる。

アセアン食料安全保障情報システム（2023.3）によると、乾季米は登熟期および収穫期にあり、作付面積の 43%がすでに収穫された。前年度同時期より灌漑用水が潤沢なことから、乾季米の作付面積は予定面積より 35%増加している。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 6.8%増の 8.2 百万トンとなる見込み。インドに次ぐ世界第 2 位のコメ輸出国となる見通し。

2021/22 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、2020/21 年度比 22.1%増の 7.7 百万トンの見込み。

タイ米輸出業者協会によれば、2023 年 1 月の輸出量は、前年同月の 46.0 万トンから 75.2%増加し、80.6 万トンとなった。主な輸出先はインドネシアが 17.0 万トン（前年同月比 932 倍）、バングラデシュが 10.7 万トン（前年同月は輸入なし）、イラクが 77.6 万トン（同 1.8 倍）、南アフリカが 6.0 万トン（同 2.4 倍）、日本が 5.9 万トン（同 1.2 倍）。背景として、インドネシアが政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大していること、イラクが検疫問題で 7 年間停止していたタイ産米の輸入を 2022 年に再開したことなどがあるとみられる。なお、タイ政府は 3 月 22 日、世界経済が回復途上にあること、タイ国内の収穫量増加から、2023 年の輸出目標値を従来の 7.5 百万トンから 8.0 百万トンに引き上げた。ただし、不安定な為替相場が懸案材料とのこと。

USDA 「Grain: World Markets and Trade」（2023.3.8）によれば、3 月 7 日までの週のタイ産米（長粒、2 等精米）の輸出価格は、パーツ安や需要の軟化により前月から 34 ドル下落し、473 ドル/トンとなった（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。

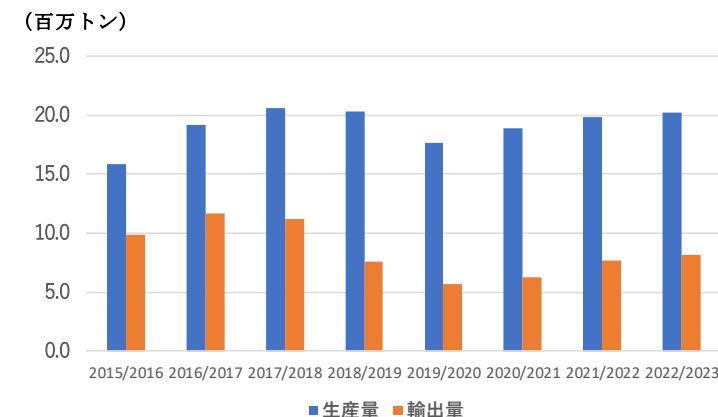
コメ・タイ

夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23 年 1 月～23 年 12 月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率 (%)
生 産 量	18.9	19.9	20.2 (20.2)	-	1.6
消 費 量	12.7	12.8	13.0 (12.4)	-	1.6
輸 出 量	6.3	7.7	8.2 (8.1)	-	6.8
輸 入 量	0.2	0.1	0.2 (0.3)	-	15.4
期末在庫量	4.0	3.5	2.7 (6.7)	-	▲ 24.3
期末在庫率	21.0%	17.1%	12.5% (32.7%)	-	▲ 4.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.51	10.70	10.85 (10.85)	-	1.4
単収(もみt/ha)	2.72	2.81	2.82 (1.86)	-	0.4

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March, 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 February 2023)（単収は精米t/ha）

図：タイの生産量・輸出量の推移



資料：USDA 「PS&D」(2023.3.8)をもとに農林水産省にて作成

< ベトナム > 冬春作の生育・収穫が進展

【生育・生産動向】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度比 0.9%増の 27.0 百万トンの見込み。

2021/22 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、2020/21 年度比 2.2%減の 26.8 百万トンの見込み。なお、2021/22 年度は、全ての作期で、主として肥料高騰や高収益作物（果物・野菜・養殖）への転換等により、収穫面積が減少した。

なお、アセアン食料安全保障情報システム（2023.3）によると、北部では乾季米（冬春作）が生育期にある。作付済み面積は 82.0 万ヘクタールで、灌漑用水が十分なことから生育状況は良好である。南部では、乾季米（冬春作）は収穫期にある。作付済み面積（187.0 万ヘクタール）に対し、収穫済み面積は現時点で 29.0 万ヘクタール（進捗率 15.5%）となっている。霧が多く、また一部地域で洪水の水が引かず病害虫が発生したことから、単収は 1 ヘクタール当たり 6.5 トンと、前年度より低くなるとみられる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2021/22 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、2020/21 年度比 12.7%増の 7.1 百万トンの見込み。

2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度比 4.2%減の 6.8 百万トンの見込み。

ベトナム税関総局によれば、2023 年 1 月の輸出量は 35.9 万トンで、上位からフィリピン（13.0 万トン）、インドネシア（8.6 万トン）、中国（4.7 万トン）、コートジボワール（3.1 万トン）となっている。うち、ジャポニカ米は 0.6 万トンと 1.7%を占める。

USDA 「Grain: World Markets and Trade」(2023.3.8) によれば、ベトナム産米（長粒種、5%碎米混入）の 3 月 7 日までの週の価格は、新穀の供給が十分なことから、前月の価格から 49 ドル/トン下落して 460 ドル/トンとなった。

コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年1月～23年12月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	27.4	26.8	27.0 (28.3)	-	0.9	
消費量	21.5	21.5	21.6 (22.5)	0.1	0.2	
輸出量	6.3	7.1	6.8 (7.2)	-	▲ 4.2	
輸入量	1.8	1.5	1.1 (1.1)	0.1	▲ 26.7	
期末在庫量	2.6	2.3	2.1 (3.1)	0.1	▲ 10.8	
期末在庫率	9.5%	8.1%	7.3% (10.4%)	0.2	▲ 0.8	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.31	7.19	7.17 (7.22)	-	▲ 0.3	
単収(もみt/ha)	6.00	5.96	6.03 (3.92)	-	1.2	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March, 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 February 2023) (単収は精米t/ha)

図：長粒種の FOB 価格の推移



資料：USDA 「Grain : World Markets and Trade」(2023.3.8) より。

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比  前月比 

・アルゼンチン等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

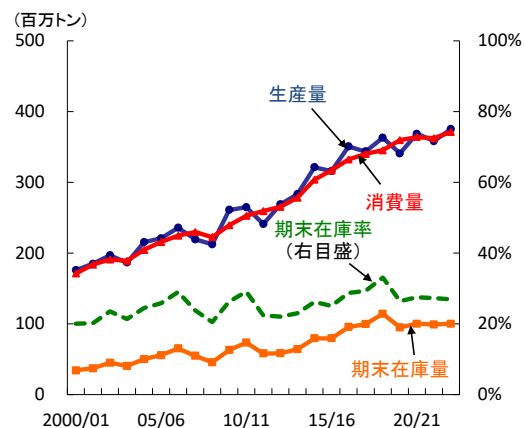
消費量 前年度比  前月比 

・アルゼンチン、中国等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比  前月比 

・アルゼンチン等で下方修正も、ブラジル、米国等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比  前月比 



資料：USDA「PS&D」（2023.3.8）をもとに農林水産省で作成

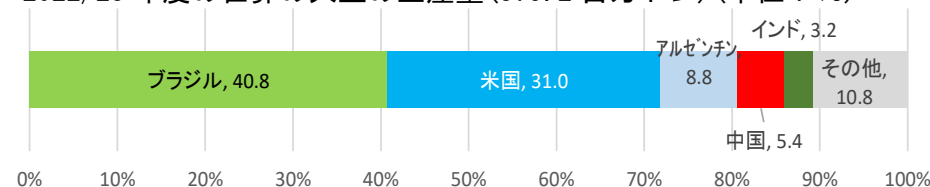
◎世界の大豆需給

（単位：百万トン）

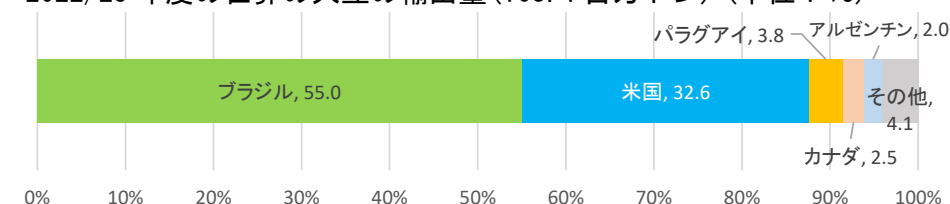
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	368.5	358.1	375.2	▲ 7.9	4.7
消 費 量	364.0	362.3	371.1	▲ 5.3	2.4
うち搾油用	316.0	313.0	320.0	▲ 3.9	2.3
輸 出 量	165.0	154.0	168.4	0.9	9.4
輸 入 量	165.6	157.1	165.4	1.3	5.3
期末在庫量	100.0	99.0	100.0	▲ 2.0	1.0
期末在庫率	27.5%	27.3%	26.9%	▲ 0.2	▲ 0.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（8 March 2023）

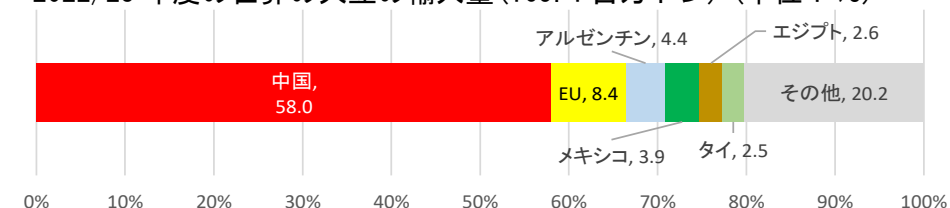
○ 2022/23 年度の世界の大豆の生産量 (375.2 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸出量 (168.4 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸入量 (165.4 百万トン) (単位：%)



（２）国別の大豆の需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量は減産、輸出も減少の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、夏季のコーンベルトの一部での高温・乾燥の影響から主に単収の減少により、前年度より4.2%減の116.4百万トンの見通し。

前年11月中旬時点で、収穫は例年より早いペースで終了した。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の実消費量は、国内大豆粕需要減少を受けた搾油量の減少から、前月予測から0.3百万トン下方修正されたものの、前年度より1.5%増の63.7百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の実輸出量は、ブラジルの降雨による大豆の収穫遅れを受け、2月の輸出量が予想以上のペースであったことから前月予測から0.7百万トン上方修正されたものの、生産量の減少、ブラジルの輸出拡大等を背景に、米国の輸出競争力が弱くなっており、前年度より6.6%減の54.8百万トンの見込み。

USDAによれば、2023年輸出検証高（2023年1月5日～3月2日）は、13.4百万トンであり、内訳は中国（8.6百万トン）、メキシコ（1.0百万トン）、ドイツ（0.6百万トン）、イタリア（0.5百万トン）、インドネシア（0.4百万トン）、日本（0.4百万トン）の順。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、輸出量の上方修正等を受け、前月予測から0.4百万トン下方修正され、前年度より23.4%減の5.7百万トンの見込み。

なお、期末在庫率は4.8%で、前年度を下回っており、2013/14年度（2.6%）以来の低水準の見込み。

米国の輸出価格は、前年12月以降、収穫期を迎えている豊作のブラジル産に比べ割高で推移している。（右図参照）

大豆－米国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（22年9月～23年8月）		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	114.8	121.5	116.4	－	▲ 4.2
消 費 量	60.9	62.8	63.7	▲ 0.3	1.5
うち搾油用	58.3	60.0	60.4	▲ 0.3	0.7
輸 出 量	61.7	58.7	54.8	0.7	▲ 6.6
輸 入 量	0.5	0.4	0.4	－	▲ 4.7
期末在庫量	7.0	7.5	5.7	▲ 0.4	▲ 23.4
期末在庫率	5.7%	6.1%	4.8%	▲ 0.4	▲ 1.3
（参考）					
収穫面積(百万ha)	33.43	34.93	34.94	－	0.0
単収(t/ha)	3.43	3.48	3.33	－	▲ 4.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（8 March 2023）

図：米国、ブラジル、アルゼンチン大豆輸出価格（FOB）の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 生産量、輸出量ともに史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、前年度より18.1%増の153.0百万トンと史上最高の見込み。なお、収穫面積は、特に中西部のマト・グロッソ州（最大生産州）、ゴイアス州等で増加見込み。

また、ブラジル食料供給公社(CONAB)月例報告（2023.3.9）によれば、2022/23年度の実産量は、中西部の主産地の天候に恵まれ、南部の州を中心に深刻な高温・乾燥の影響を受けた前年度より20.6%増の151.4百万トンで史上最高の見込み。

3月上旬から中旬にかけて、南部リオ・グランデ・ド・スール州等の一部地域では高温・乾燥傾向が続いている一方、中西部の大豆産地では過度な降雨によって遅れていた収穫作業が降雨量の減少により改善している。収穫進捗率は、中西部のマト・グロッソ州で3月17日現在、97%で、過去5年平均（96%）と同水準となっている。南部のパラナ州で3月13日現在、収穫進捗率は48%。南部のリオ・グランデ・ド・スール州では3月16日現在、74%が生殖生長期から充実期、収穫進捗率は1%で過去5年平均（14%）より遅れている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の実消費量は、飼料・その他需要が前月予測からわずかに上方修正され、前年度より5.4%増の56.4百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の実輸出量は、干ばつの影響を受けた隣国アルゼンチン向け輸出の拡大見通しを受け、前月予測から0.7百万トン上方修正され、前年度より17.3%増の92.7百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2023年1～2月の輸出量は603.9万トンで、前年同期（872.3万トン）に比べ30.8%減となっている。輸出先の内訳は、1位が中国410.0万トン、2位がスペイン48.4万トン、3位がタイ30.6万トンとなっている。

大豆ーブラジル

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（22年10月～23年9月）			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	139.5	129.5	153.0 (149.5)	-	18.1	
消 費 量	49.9	53.5	56.4 (55.1)	0.0	5.4	
うち搾油用	46.7	50.3	52.8 (52.3)	-	5.0	
輸 出 量	81.7	79.1	92.7 (92.8)	0.7	17.3	
輸 入 量	1.0	0.5	0.8 (0.6)	-	38.9	
期末在庫量	29.4	26.9	31.5 (4.2)	▲ 0.7	17.3	
期末在庫率	22.4%	20.3%	21.2% (2.8%)	▲ 0.6	0.9	

(参考)

収穫面積(百万ha)	39.50	41.50	43.40 (43.46)	-	4.6
単収(t/ha)	3.53	3.12	3.53 (3.44)	-	13.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2023)
IGC「Grain Market Report」(16 February 2023)

ブラジルのクロープカレンダー(中部から南部)

2022/23年度の実作付けは、2022年9月以降、順次開始。

2023年2月以降、大豆の収穫が行われ、その後、一部の圃場で冬とうもろこしを栽培。

2022/23年度	2022年												2023年								
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
夏とうもろこし																					
冬とうもろこし																					
大豆																					

資料：CONAB穀物レポート（2023.3.9）

＜ アルゼンチン ＞ 干ばつにより大幅減産見込み（輸出税継続）

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、2月を通じての高温・乾燥の継続が、開花期を迎えていた遅植え大豆の単収に影響したことで、収穫面積、単収が下方修正され、前月予測から8.0百万トン下方修正された。高温・乾燥の影響を大きく受けた前年度より、単収見通しが更に減少することを受け、前年度より24.8%減の33.0百万トンの見込み。2008/09年度（32.0百万トン）以来の低水準の見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2023.3.16）によれば、2022/23年度の生産量は、2月中旬の高温・乾燥に加え、霜害により、25.0百万トンと前年度（43.3百万トン）から大幅に減少する見通し。過去60年間で最悪の干ばつとも言われている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、生産量の下方修正に伴い、前月予測から3.6百万トン下方修正され、前年度より11.1%減の41.0百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、生産量の下方修正に伴い、前月予測から0.8百万トン下方修正されたものの、前年度より18.9%増の3.4百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2023年1月の輸出量は15.2万トンで、前年同月（42.6万トン）より64.3%減。全量がチリ向けとなっている。2022年後半の大豆の優遇為替レートの終了以降、月間輸出量は弱含んでいる。アルゼンチンは、丸大豆の搾油後に発生する大豆加工品の輸出が多く、大豆油及び大豆粕については、世界第1位の輸出国である。

USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、生産量の下方修正を一部補うため、近隣国であるブラジル及びパラグアイからの輸入増により、前月予測から1.0百万トン上方修正され、前年度より88.8%増の7.3百万トンと史上最高の見込み。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021年1月以降、輸出税を大豆最大33%、大豆油及び大豆粕31%と設定。2022年3月に、大豆油及び大豆粕の輸出税について2022年末まで2%引き上げたが、2023年1月からは31%に戻っている。

なお、アルゼンチン政府は、今般の干ばつ対策として、農業関係者に対し救済施策を公表した。

大豆ーアルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（22年10月～23年9月）			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	46.2	43.9	33.0 (37.5)	▲ 8.0	▲ 24.8	
消 費 量	47.4	46.0	41.0 (42.3)	▲ 3.6	▲ 11.1	
うち搾油用	40.2	38.8	35.3 (37.3)	▲ 2.1	▲ 9.2	
輸 出 量	5.2	2.9	3.4 (2.5)	▲ 0.8	18.9	
輸 入 量	4.8	3.8	7.3 (6.6)	1.0	88.8	
期末在庫量	25.1	23.9	19.8 (2.2)	▲ 2.6	▲ 17.2	
期末在庫率	47.6%	48.9%	44.6% (4.8%)	▲ 1.3	▲ 4.2	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	16.47	15.90	15.50 (16.00)	▲ 0.40	▲ 2.5	
単収(t/ha)	2.81	2.76	2.13 (2.35)	▲ 0.45	▲ 22.8	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

「World Agricultural Production」(8 March 2023)

IGC「Grain Market Report」(16 February 2023)

写真：北部サンタフェ州の早植え大豆の圃場風景 （2月26日撮影）

収穫は4月の予定。

高温・乾燥の影響で、粒が小さく、単収低下が見込まれる。



＜ 中国 ＞ 生産量、消費量は史上最高、輸入量も増加見通し

【生産・生育状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、収穫面積の下方修正により前月予測からわずかに下方修正されたものの、主産地の黒竜江省等東北地区で生育期を通じて良好な天候に恵まれたことに加え、政府の補助金による大豆生産奨励策等により収穫面積が大幅に増加したことから、前年度より 23.7%増の 20.3 百万トンで史上最高の見込み。前年 11 月上旬時点で、収穫はすでに終了。

2 月 13 日に公表された中国共産党・国务院（内閣に相当）の中央 1 号文件には、引き続き大豆の作付け拡大の取組等について記載された。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、養豚・養鶏向け飼料用需要の低下により 2 月までの搾油が予想以上に低調であったことから、前月予測から 2.0 百万トン下方修正されたものの、畜産向け国内大豆粕需要が前年度（景気減速により豚肉を中心に食肉需要が低調）と比べれば回復することにより、前年度より 5.3%増の 113.3 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 4.8%増の 96.0 百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022 年 1～12 月の輸入量は 91.1 百万トンと、前年同期比で 5.6%減。内訳は、ブラジル産 54.4 百万トン（60%）、米国産 29.5 百万トン（32%）。なお、前年 12 月の輸入量は 10.6 百万トンで、米国の収穫の終了に伴い、米国産が 6.0 百万トンとブラジル産（2.6 百万トン）の 2.3 倍となった。

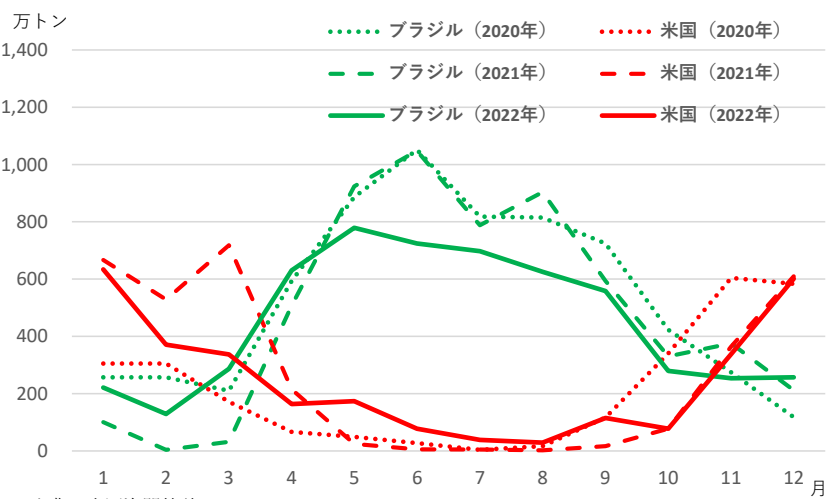
農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 1 月号」によると、1 月の国内価格（山東省の国産大豆工場渡し価格）は、前月（6,240 元/トン）から下落し、6,060 元/トンとなった。主な要因としては、新穀大豆の買付価格が農家の予想を下回り、農家が販売に消極的で農家在庫が多く、春節とも重なり、業者も買い付けに消極的であったことによる。また、1 月の輸入価格（山東省の輸入大豆価格）は、5,400 元/トンと前月（5,500 元/トン）から下落した。今後も中国の輸入動向に注視が必要である。

大豆－中国

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	19.6	16.4	20.3 (20.3)	▲ 0.0	23.7	
消 費 量	112.7	107.6	113.3 (114.8)	▲ 2.0	5.3	
うち搾油用	93.0	87.5	92.0 (95.8)	▲ 2.0	5.1	
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	－	－	
輸 入 量	99.7	91.6	96.0 (95.3)	－	4.8	
期末在庫量	31.2	31.4	34.3 (29.2)	2.0	9.2	
期末在庫率	27.6%	29.2%	30.2% (25.4%)	2.2	1.1	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	9.88	8.42	10.24 (9.90)	▲ 0.03	21.6	
単収(t/ha)	1.98	1.95	1.98 (2.05)	－	1.5	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2023)
IGC「Grain Market Report」(16 February 2023)

図：中国におけるブラジル、米国産大豆の輸入状況



出典：中国海関統計
注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

< カナダ > 収穫面積及び単収の増加により増産

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加を受け、前年度より5.1%増の6.5百万トンの見込み。前年11月中旬時点で、収穫は終了。

なお、カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2023.3.21)によれば、2022/23年度の収穫面積は前年度より0.7%減少した。一方、単収は、西部カナダで生育期の降雨と温暖な天候に恵まれたことから、カナダ全体の単収は前年度より5.8%増となった。前年度において高温・乾燥で減産となった生産量第2位のマニトバ州で前年度より58.7%増と史上最高の単収となり、生産量1位のカナダ東部のオンタリオ州の単収の減少をカバーしたことが要因。この結果、生産量は前年度より5.1%増の6.5百万トンの見込み。

また、この春に作付けされる2023/24年度の実産量は、現在の市場状況と過去の傾向に基づけば、収穫面積が2022/23年度より7.3%増と予想されることから、2022/23年度より3.5%増の6.8百万トンの見込み。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より11.3%増の2.6百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より1.8%減の4.2百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、2022/23年度(2022年8月～2023年7月)のうち、2022年8月～2023年1月の輸出量は293.4万トンとなり、国別では、中国(123.0万トン)向けが42%を占め、続いて、イラン(44.8万トン)、アルジェリア(32.1万トン)、イタリア(25.1万トン)の順となっている。2023年1月の輸出量は35.9万トンで、中国向けが20.2万トン、イラン向けが9.7万トンである。

大豆ーカナダ

(単位:百万トン)

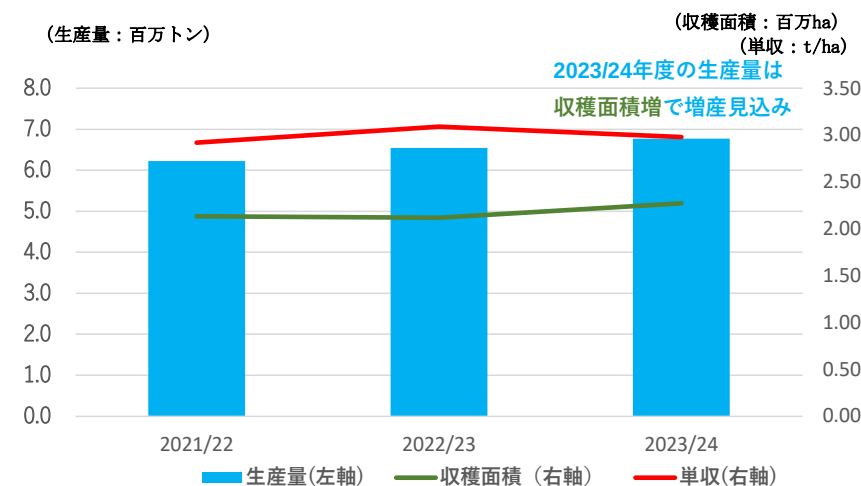
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	6.4	6.2	6.5 (6.5)	-	5.1
消 費 量	2.5	2.4	2.6 (2.5)	-	11.3
うち搾油用	1.6	1.8	1.9 (1.9)	-	0.3
輸 出 量	4.7	4.3	4.2 (4.4)	-	▲ 1.8
輸 入 量	0.5	0.5	0.5 (0.4)	-	▲ 7.6
期末在庫量	0.3	0.4	0.7 (0.4)	-	52.1
期末在庫率	4.1%	6.5%	9.5% (5.1%)	-	3.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	2.04	2.08	2.12 (2.12)	-	1.9
単収(t/ha)	3.12	2.99	3.09 (3.09)	-	3.3

資料:USDA「PS&D」

「World Agricultural Production」(8 March 2023)

AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(21 March 2023)

図:カナダの直近3か年の生産量等の推移



資料:AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(2023.3.21)をもとに農林水産省にて作成。

(参考1)本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2022/23年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	22年6月～23年5月	22年9月～23年8月	22年8月～23年7月	22年9月～23年8月
カナダ	22年8月～23年7月			22年8月～23年7月
豪州	22年10月～23年9月		23年3月～24年2月	
EU	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
中国	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月
ロシア	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		22年9月～23年8月
ウクライナ	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
ブラジル		23年3月～24年2月	23年4月～24年3月	22年10月～23年9月
アルゼンチン	22年12月～23年11月	23年3月～24年2月		22年10月～23年9月
タイ			23年1月～12月	
インド	22年4月～23年3月		22年10月～23年9月	
ベトナム			23年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
 例えば、2022/23年度は、米国の小麦では2022年6月～2023年5月、ブラジルのとうもろこしでは2023年3月～2024年2月です。
 なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリクトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリクトン	大麦	
	0.025401	メトリクトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリクトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリクトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.40469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラック)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏 : $^{\circ}\text{C} = (^{\circ}\text{F} - 32) \div 1.8$			

第21号特別分析トピック:南米の穀物等生産が世界の需給に与える影響

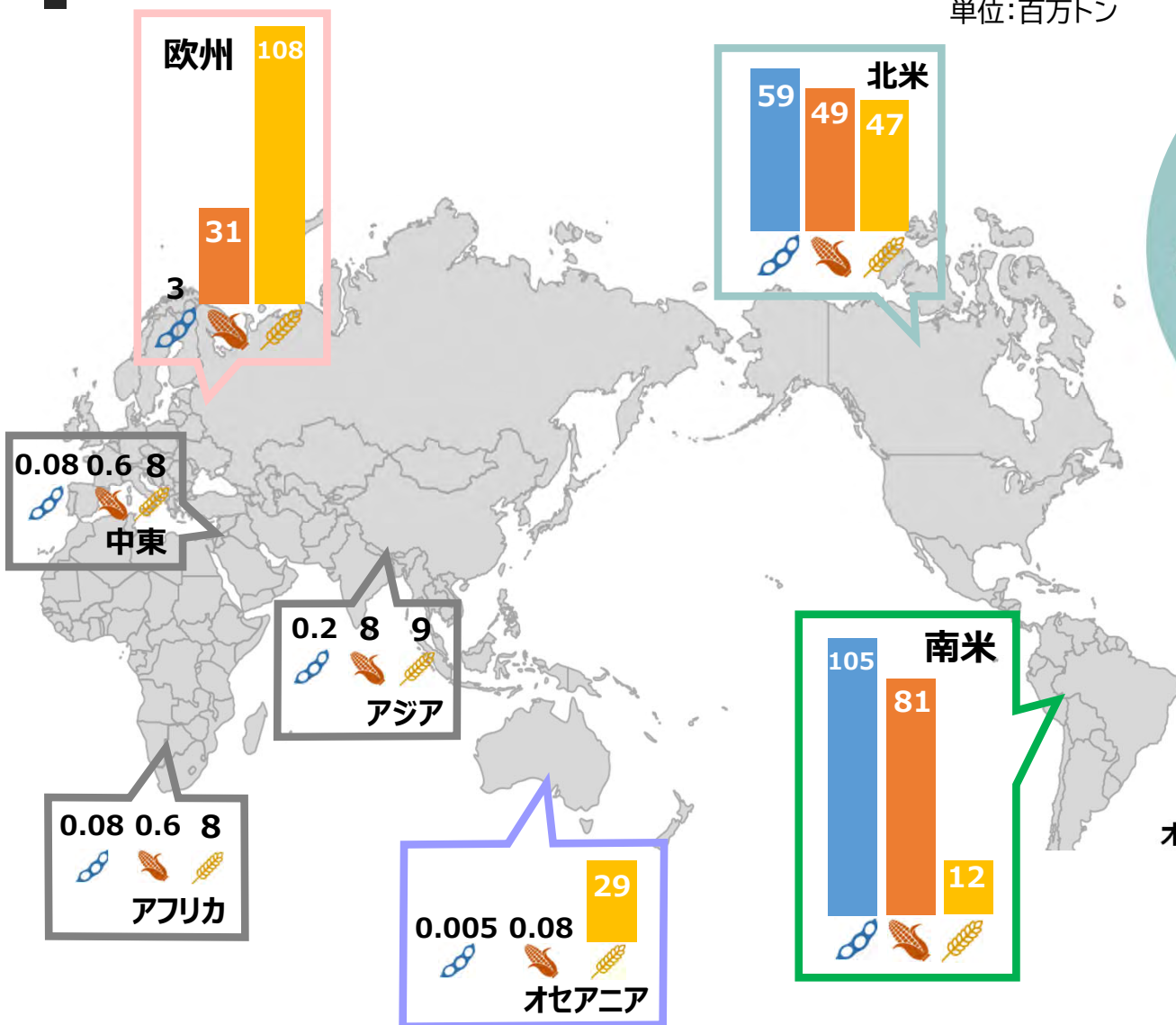
南米の位置付け

穀物等輸出における南米の位置付け

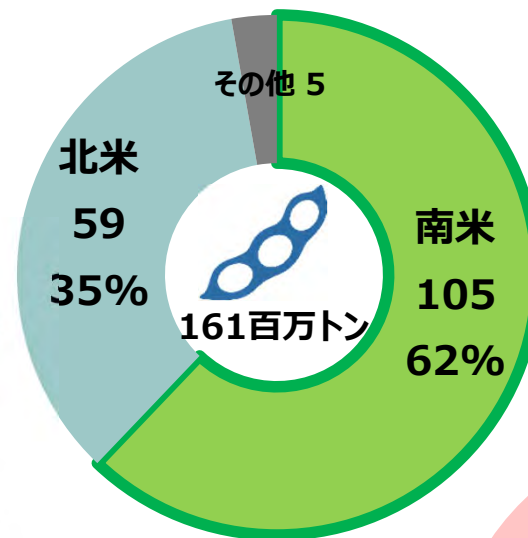
○ 南米は、大豆、とうもろこしにおいて、それぞれ世界一位の輸出地域(2022/23年度)。

地域別の輸出数量 (2022/23年度)

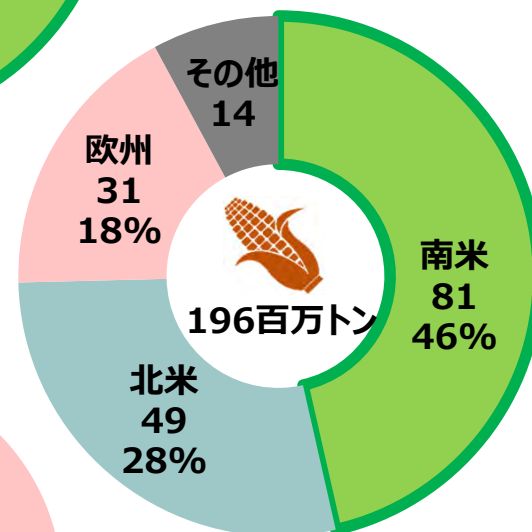
単位:百万トン



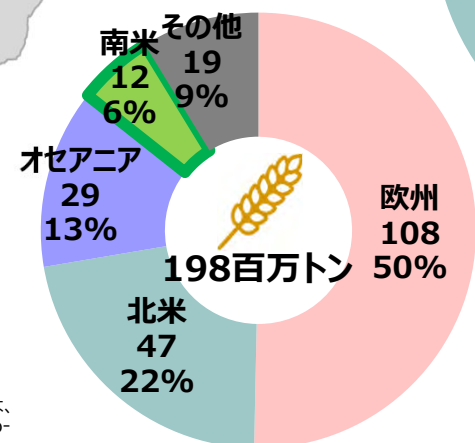
大豆



とうもろこし



小麦



資料: USDA (2022/23)

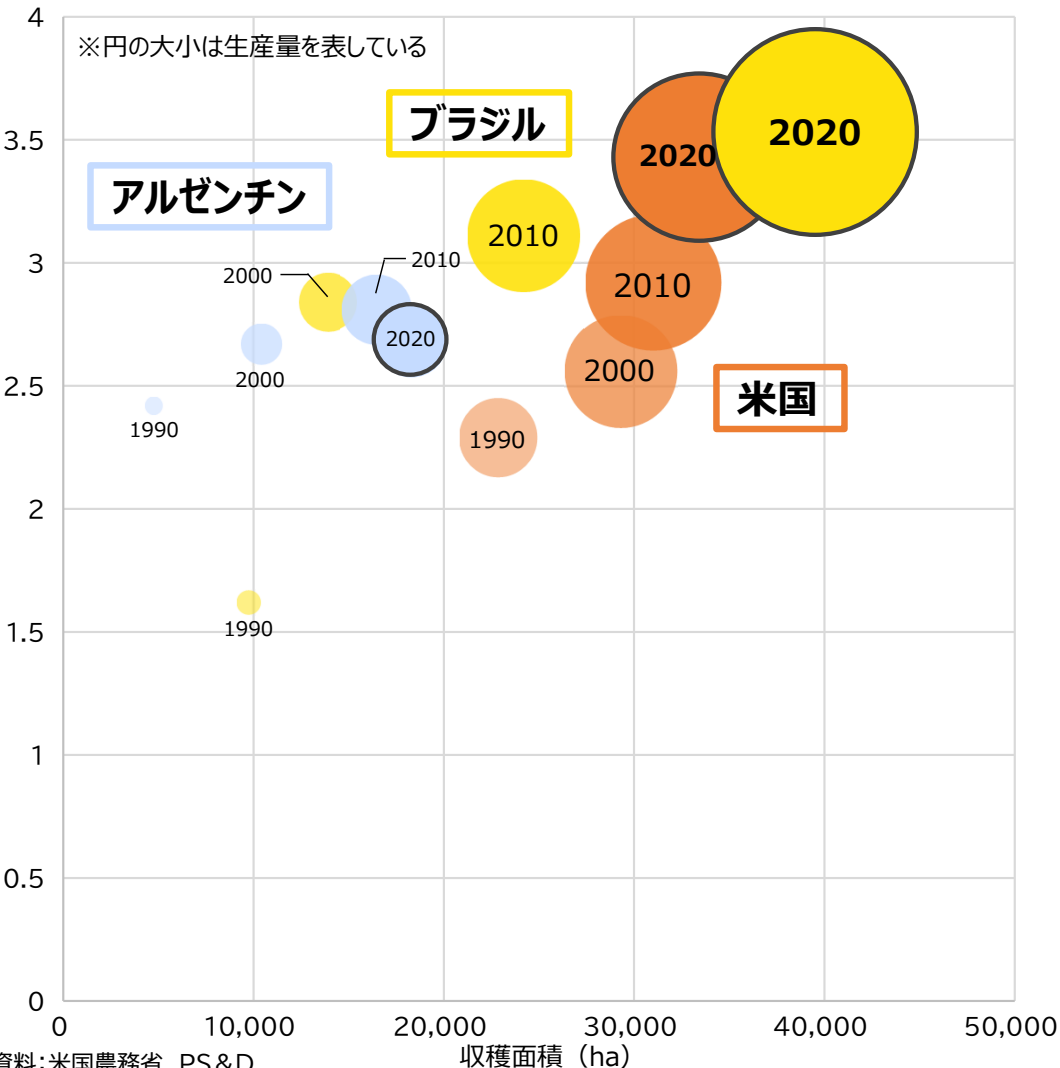
注: レイアウト上、実際の位置とは異なる。

注: 欧州は、「European Union」、「Former Soviet Union - 12」、「Other Europe」の合計、南米は、「South America」、「Caribbean」、「Central America」の合計、アフリカは「North Africa」、「Sub-Saharan Africa」の合計、アジアは、「East Asia」、「South Asia」、「Southeast Asia」の合計とした。

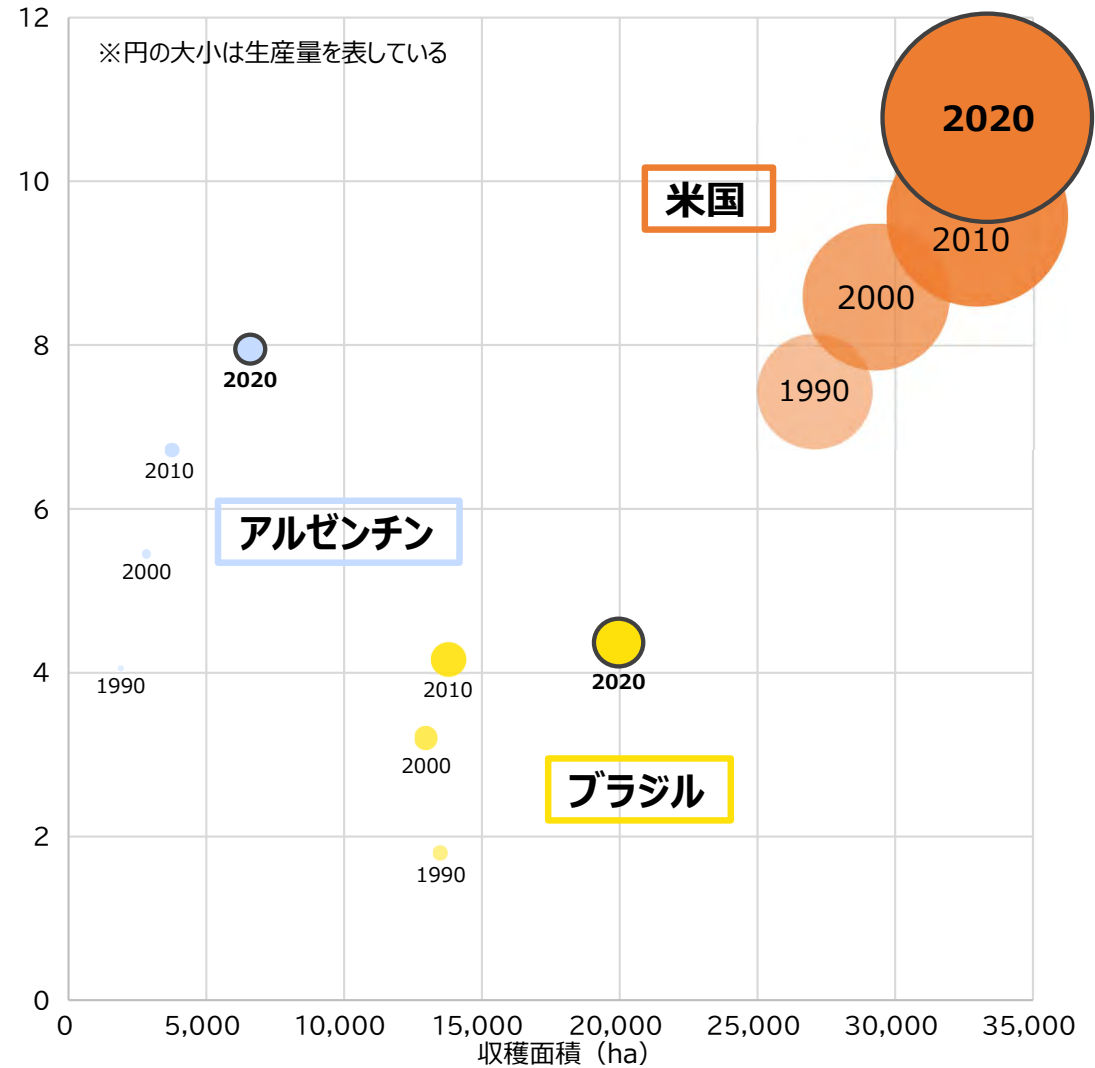
生産量・単収・農地面積の推移

- 大豆は、米国は単収、ブラジル、アルゼンチンは収穫面積の増加が生産拡大に大きく寄与。2010年代後半にはブラジルの生産量がアメリカを抜き、世界1位となっている。
- とうもろこしは、主に単収の伸びが生産拡大に寄与。一方、未だにブラジルの単収はアメリカの半分以下であり、生産余力はまだ十分にあるといえる。

単収 (t/ha) ■大豆の生産量・単収・収穫面積の推移



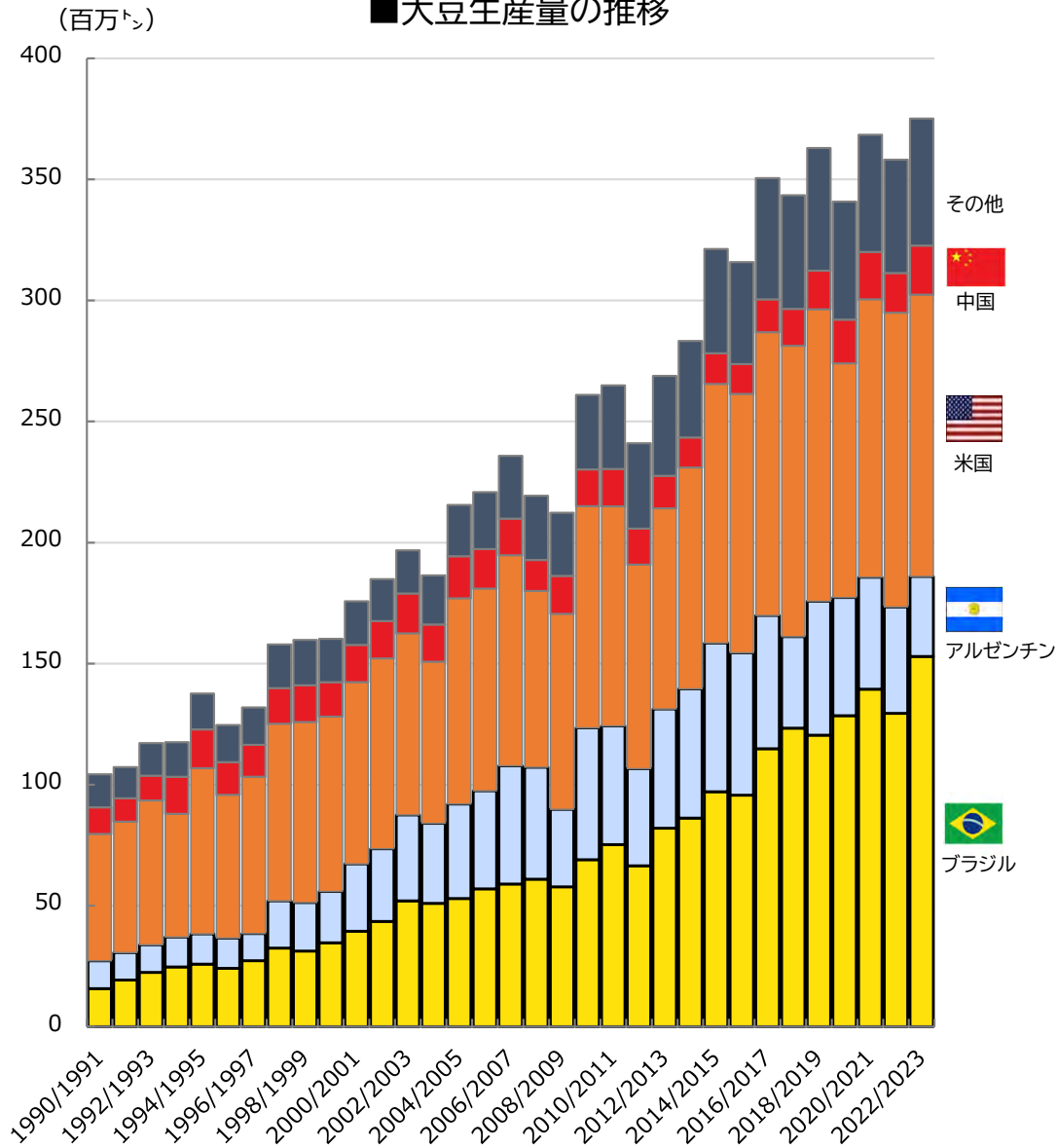
単収 (t/ha) ■とうもろこしの生産量・単収・収穫面積の推移



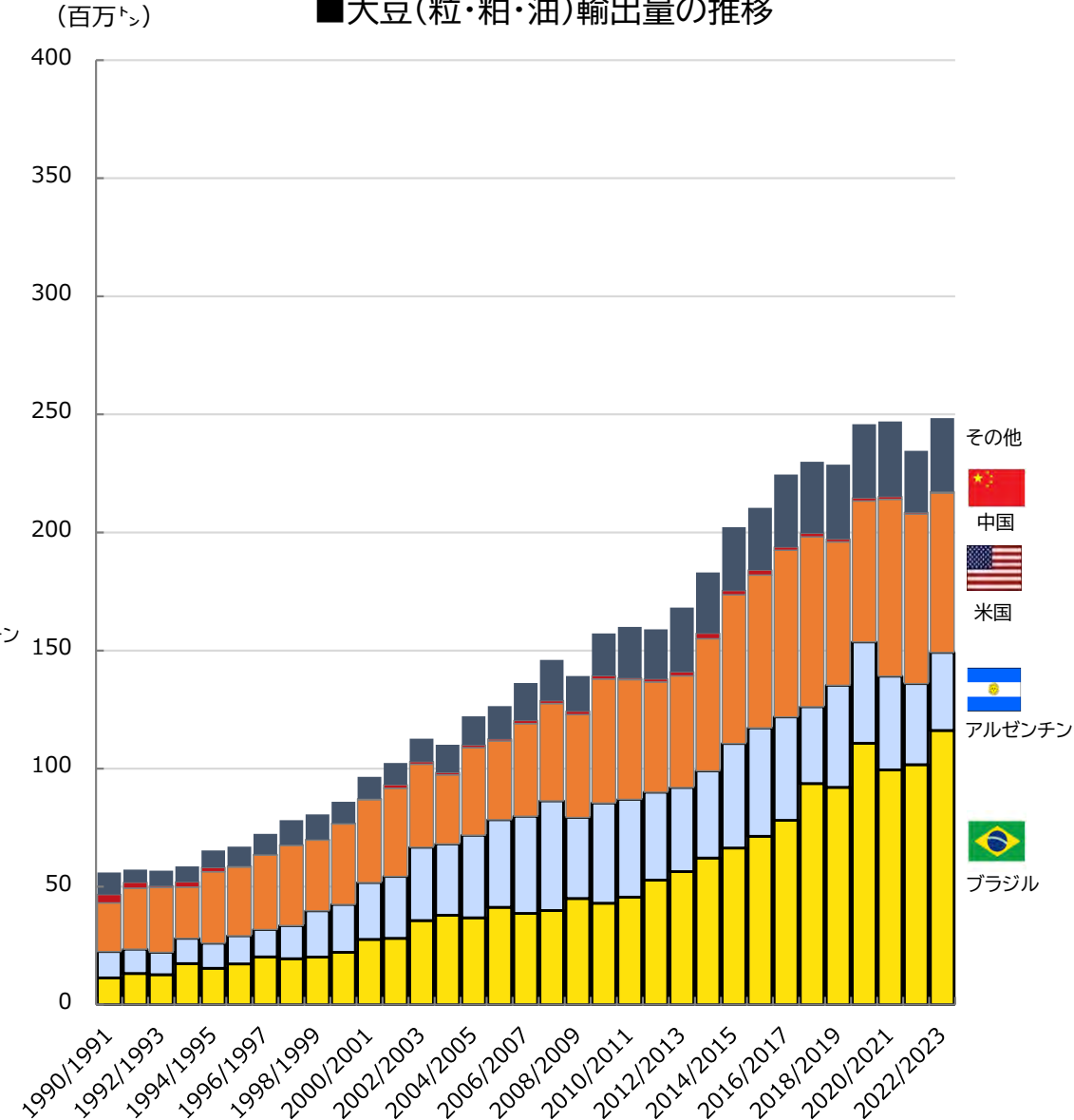
大豆の生産・輸出量の長期推移

○ 2000年代に入り、南米地域における大豆の生産量・輸出量は大きく増加。ブラジル、アルゼンチンともに、世界有数の大豆輸出国となっており、世界の大豆市場に与える影響は大きい。

■大豆生産量の推移

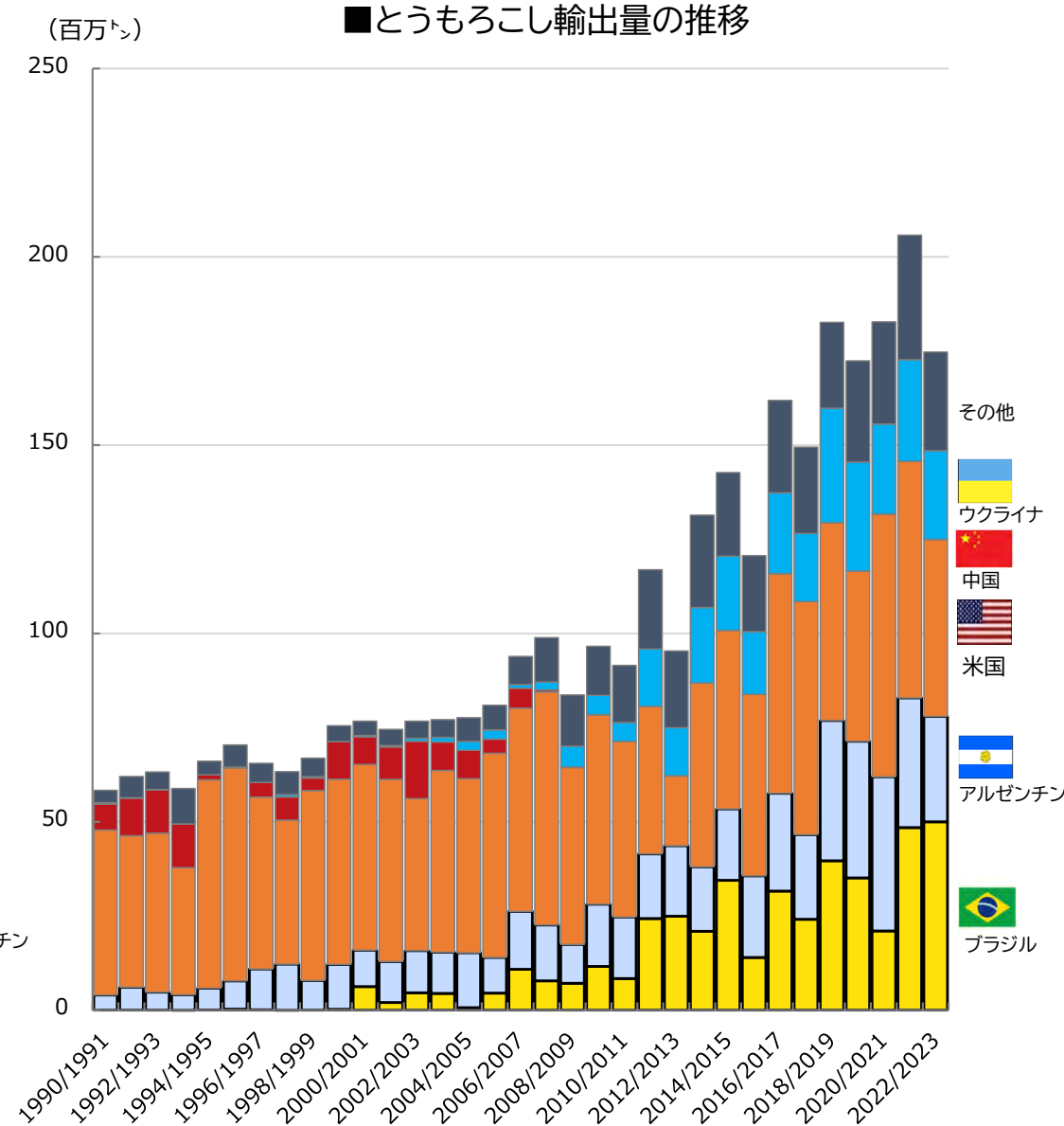
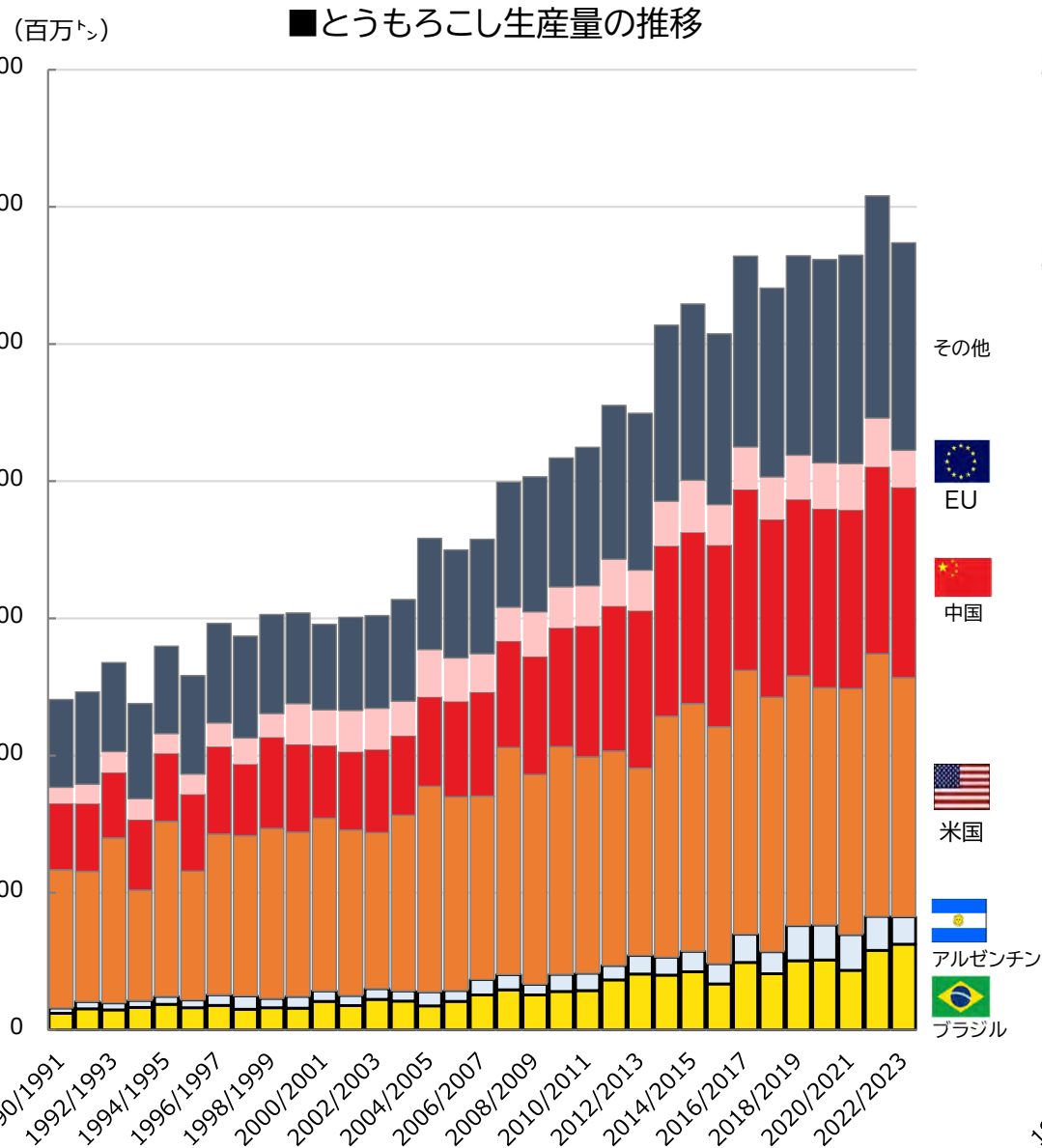


■大豆(粒・粕・油)輸出量の推移



とうもろこしの生産・輸出量の長期推移

○ 南米地域におけるとうもろこしの生産量・輸出量は増加傾向で推移。大豆ほど生産・輸出国が偏在している訳ではないが、ブラジル・アルゼンチンの生産動向が世界のとうもろこし市場に与える影響は大きい。



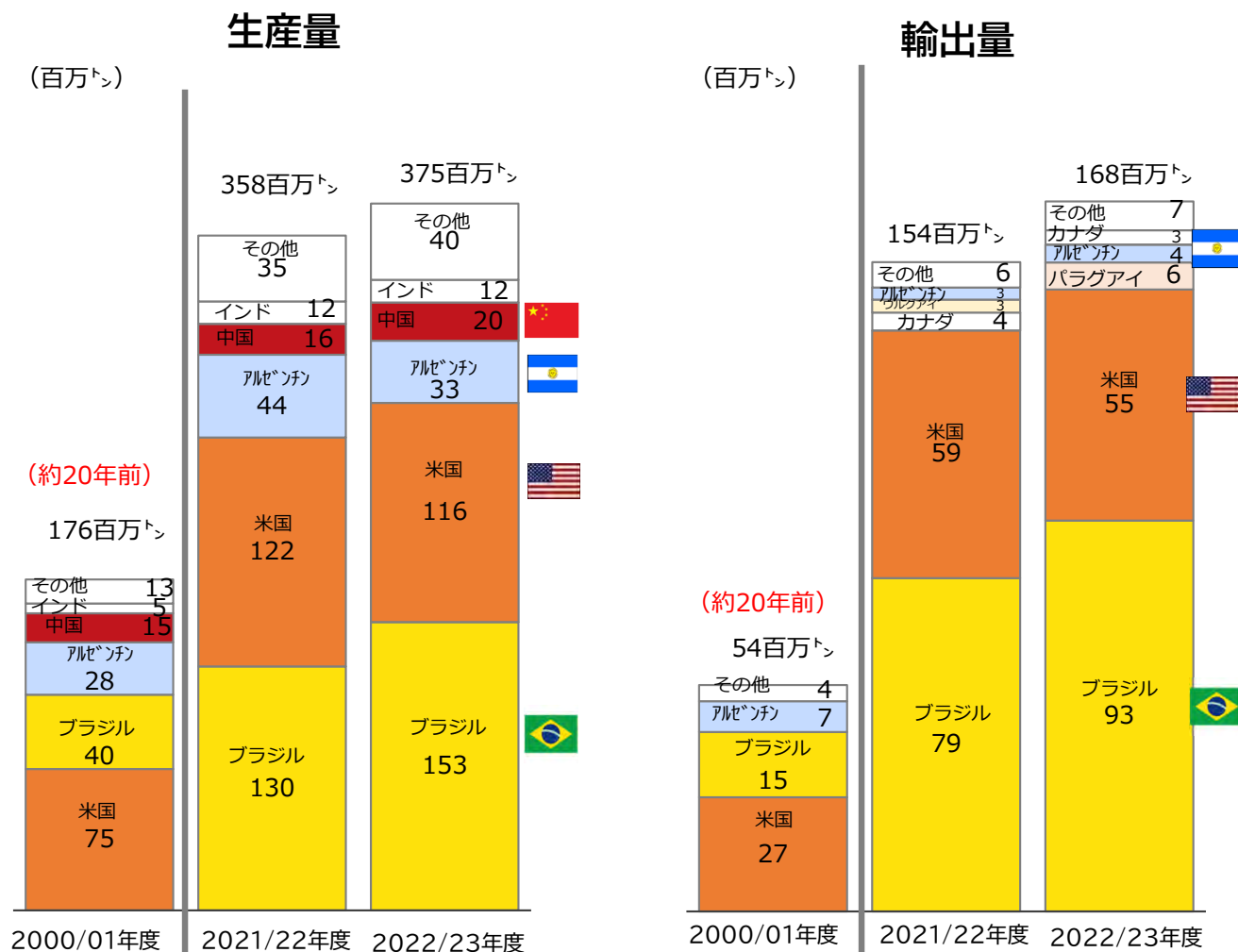
資料: 米国農務省 PS & D
注: 大豆の輸出量は大豆粒、大豆粕、大豆油の合計。

大豆の動向

世界の大豆の生産・輸出

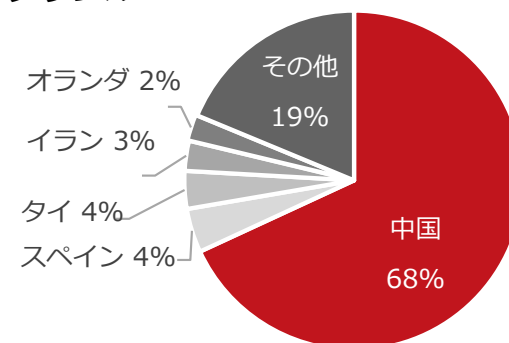
- 2021/22年度及び2022/23年度において、ブラジルは世界1位の大豆輸出国。
- 大豆の主な輸入国は中国であり、ブラジルや米国等から調達。

■大豆の生産・輸出(世界)

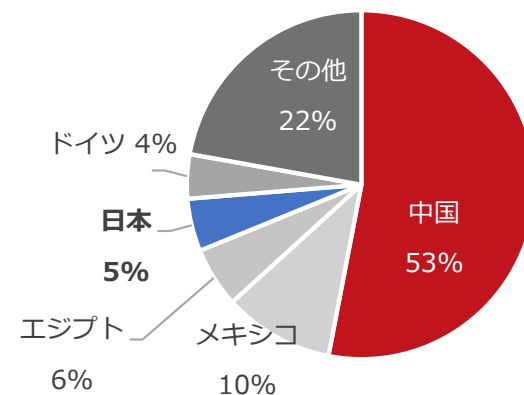


■大豆の輸出先(2022年)

ブラジル



米国



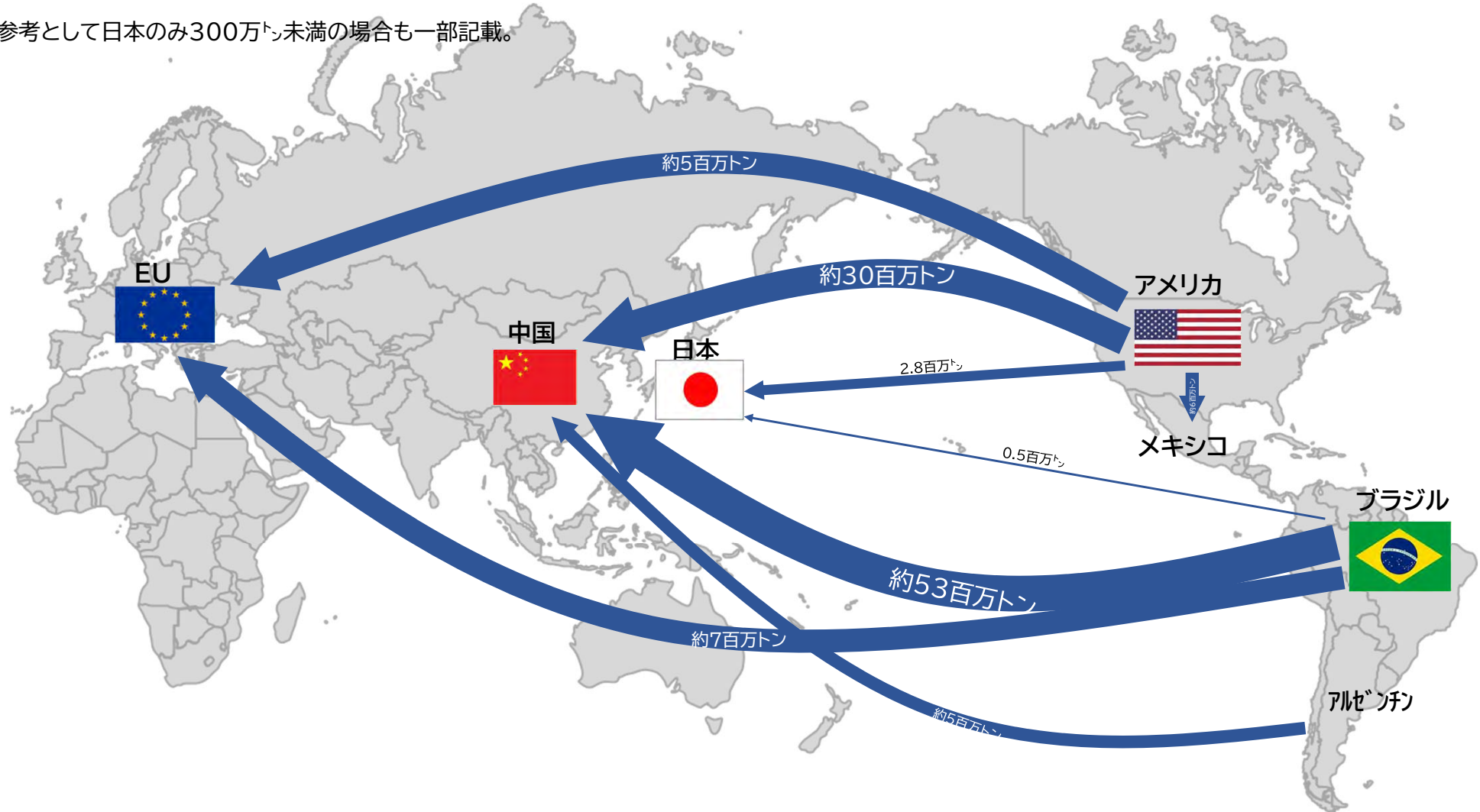
資料:Global Trade Atlas

大豆の貿易フロー(2022年)

○ 大豆の国際貿易については、2大生産国である、アメリカ、ブラジルを始めとしたアメリカ大陸から、主に中国やEUに輸出されている。

※ 300万トン以上輸出している貿易フローを作図

※参考として日本のみ300万トン未満の場合も一部記載。



資料:S&P Global Trade Atlasを基に農林水産省が作成。HSコード:1201で抽出した数値。

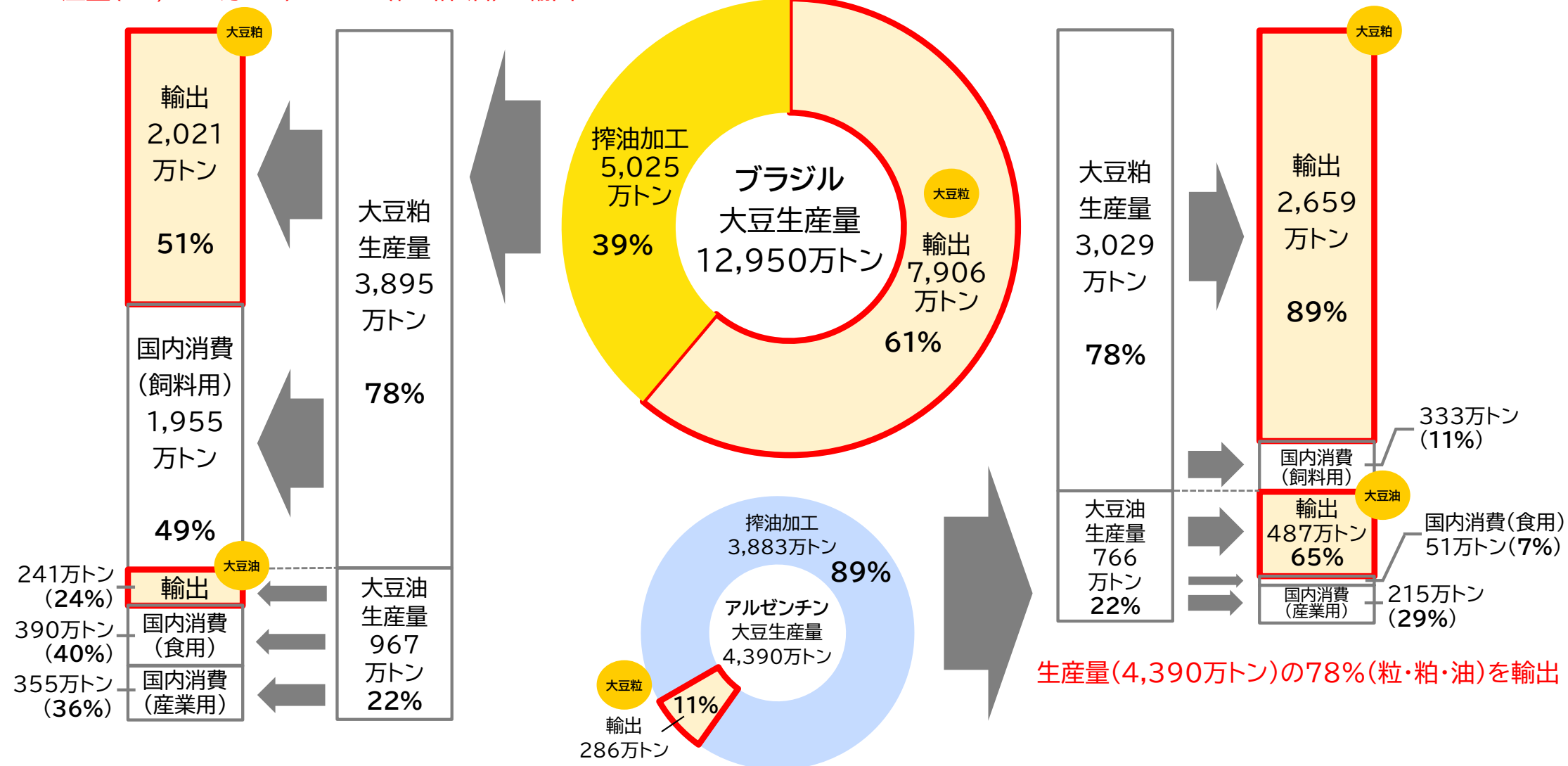
ただし、EUは輸入量から逆算した数値。

注:レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある

ブラジル・アルゼンチン大豆の利用状況(粒・粕・油)

○ ブラジル、アルゼンチンともに生産した大豆の約8割を輸出しているが、ブラジルは、加工されていない農産物の輸出は免税されることから、約6割を大豆粒で輸出している。アルゼンチンは、加工品の輸出税が低く設定されていることから、約9割が搾油加工に回される。

生産量(12,950万トン)の79%(粒・粕・油)を輸出

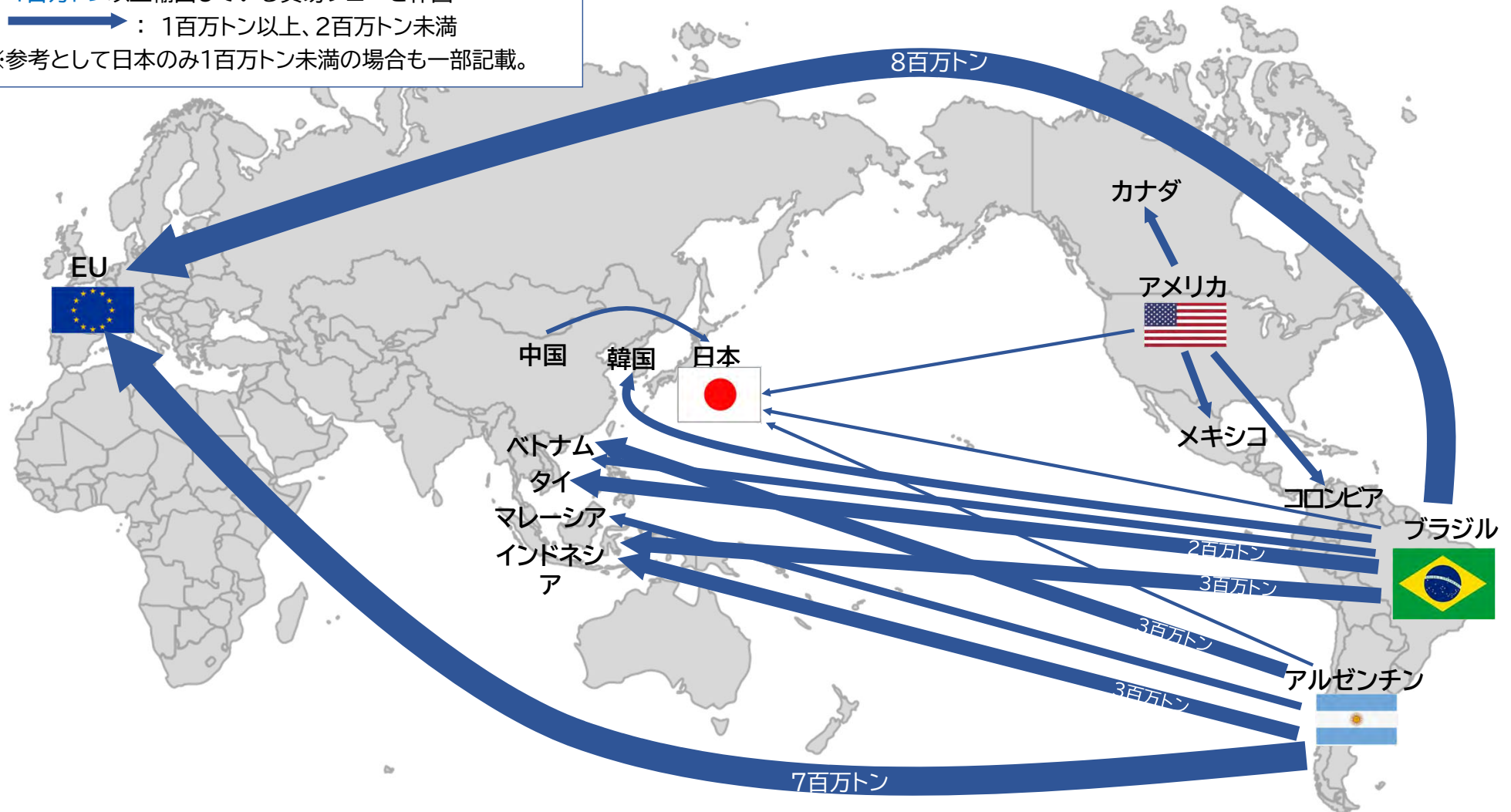


生産量(4,390万トン)の78%(粒・粕・油)を輸出

大豆ミールの貿易フロー(2022年)

- 大豆ミールの輸出について、ブラジルやアルゼンチンからEUやアジア向けの輸出が多い。
- 日本は中国、ブラジル、米国、アルゼンチンなどから輸入しているが、数量は比較的小さい。

● 1百万トン以上輸出している貿易フローを作図
→ : 1百万トン以上、2百万トン未満
※参考として日本のみ1百万トン未満の場合も一部記載。



資料:S&P Global Trade Atlasを基に農林水産省が作成。

HSコード:230400で抽出した数値。

EUは輸入量から逆算した数値。

注:レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある

2022/23年度の大豆の生産・輸出動向

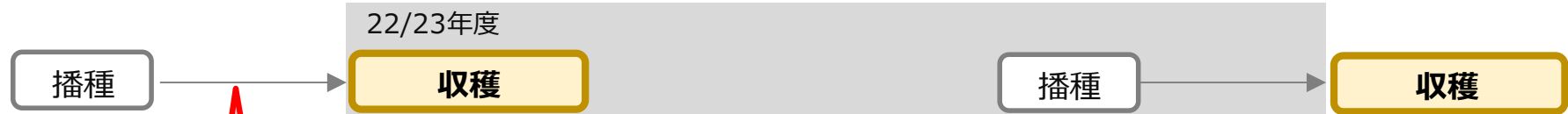
2022年

2023年

5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月



米国



ブラジル



米国で不作
(干ばつ)

→ 伯の播種面積増加 →

伯で豊作見込み
(過去最高)

主な動向（2022/23年度）



米国

22/23年度は、夏季のコーンベルトの高温から大幅な生産・輸出減少



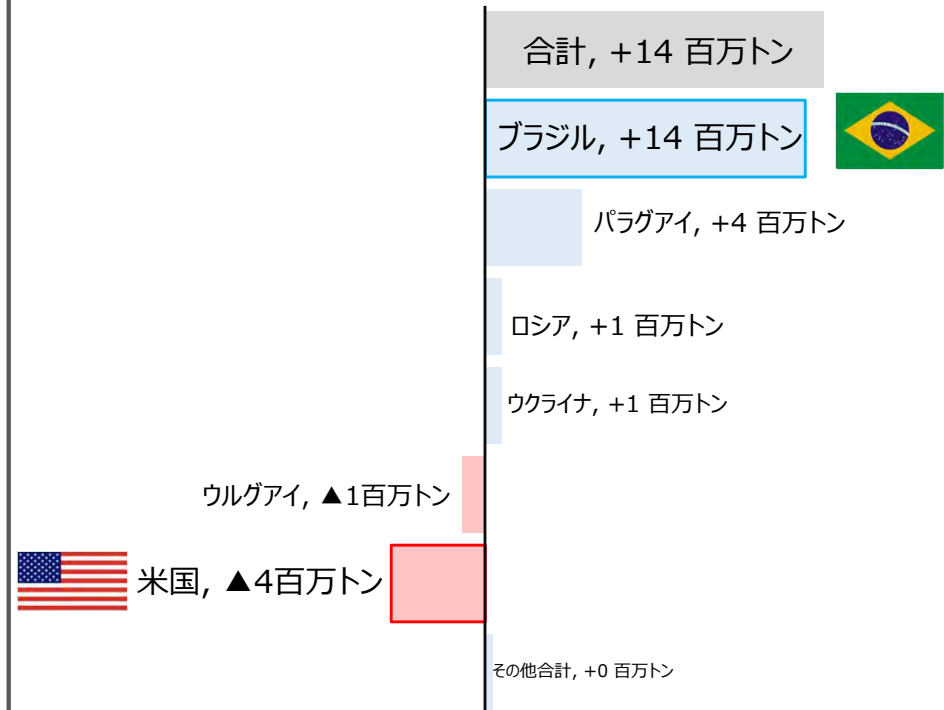
ブラジル

22/23年度は、播種面積増加等により過去最高の生産量・輸出量見込み。主要産地マト Grosso 州の大豆収穫進捗率99%で、過去5年平均（90%）より進展。

■ 2022/23年度の通期見通し

22/23年度の輸出量は、米国の干ばつ影響はあるものの、ブラジル等の豊作により前年度比で+14百万トン

2022/23年度 輸出量の対前年度比

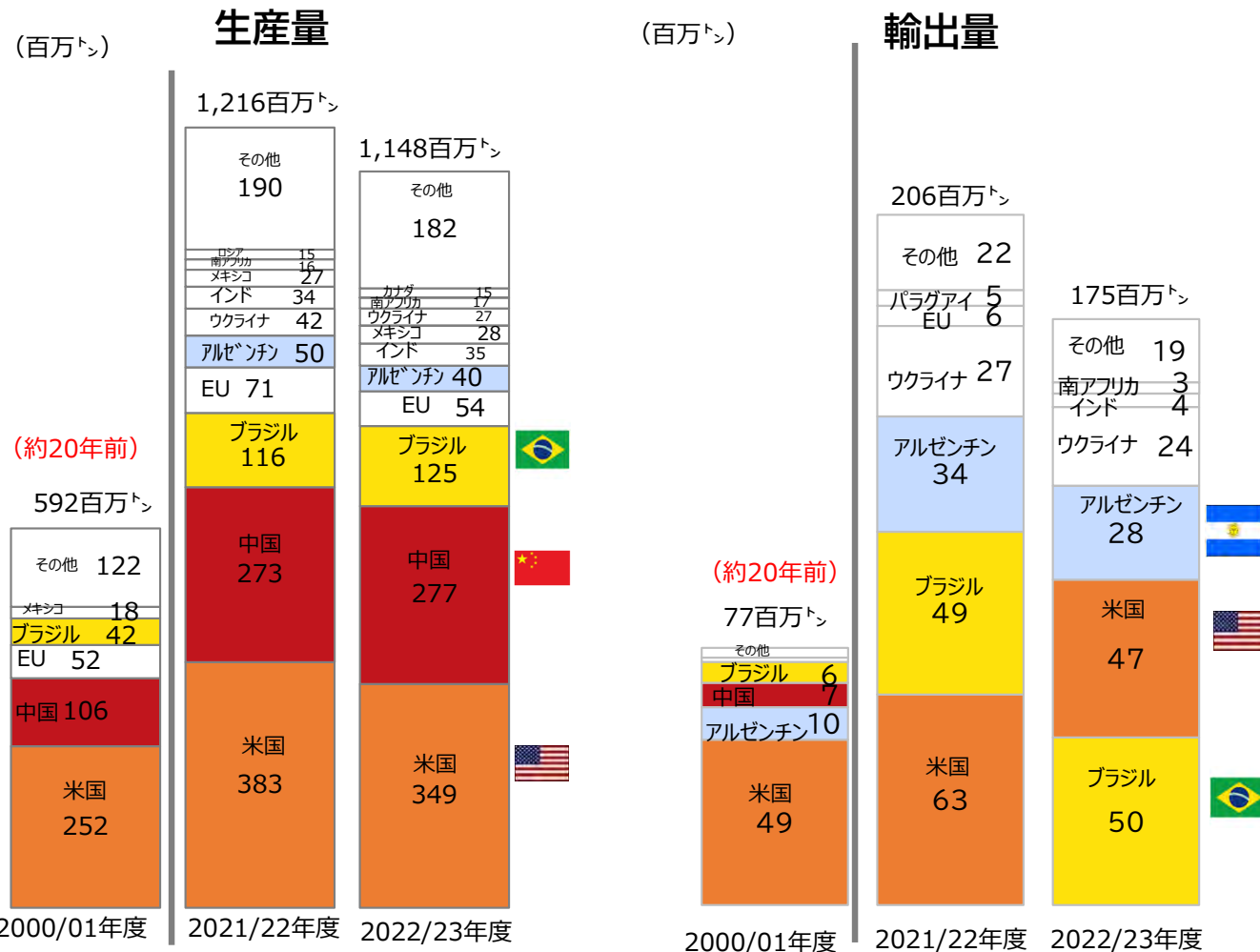


とうもろこしの動向

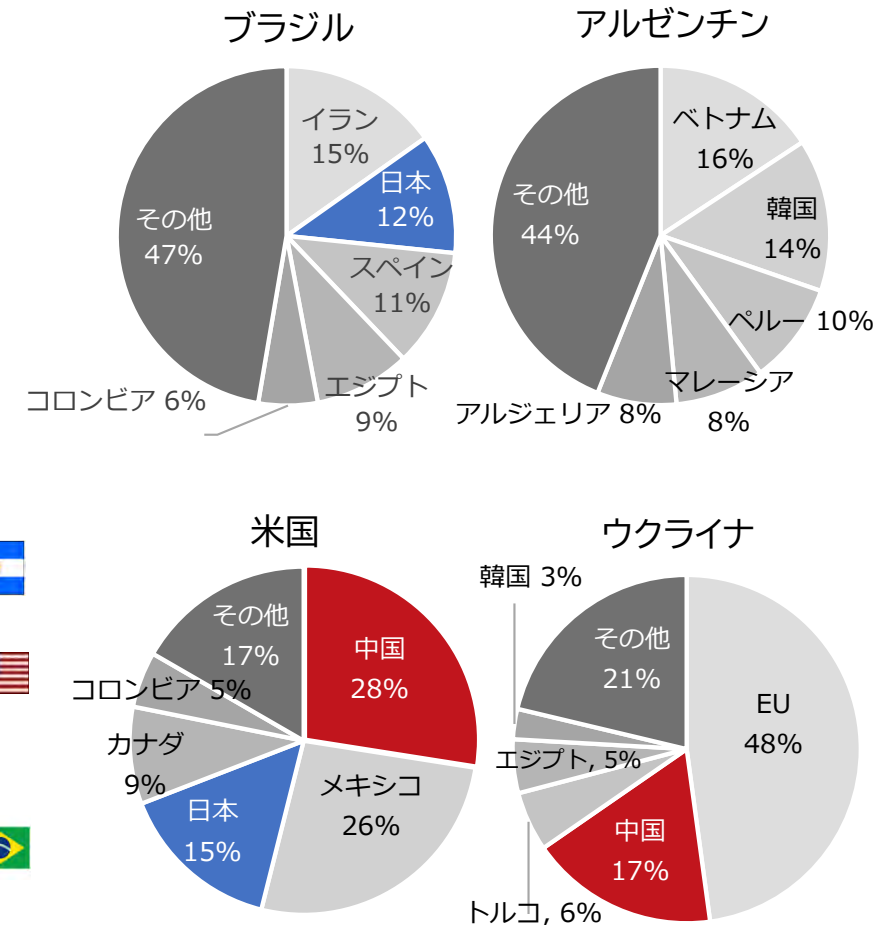
世界のとうもろこしの生産・輸出

○ 2022/23年度については、米国の高温・干ばつによる生産減少等もあり、ブラジルが世界1位、アルゼンチンが世界3位の輸出国となる見込み。ウクライナの減産分はブラジルの増産等で一定程度カバーされた。

■とうもろこしの生産・輸出(世界)



■とうもろこしの輸出先(2022)



資料: Global Trade Atlas

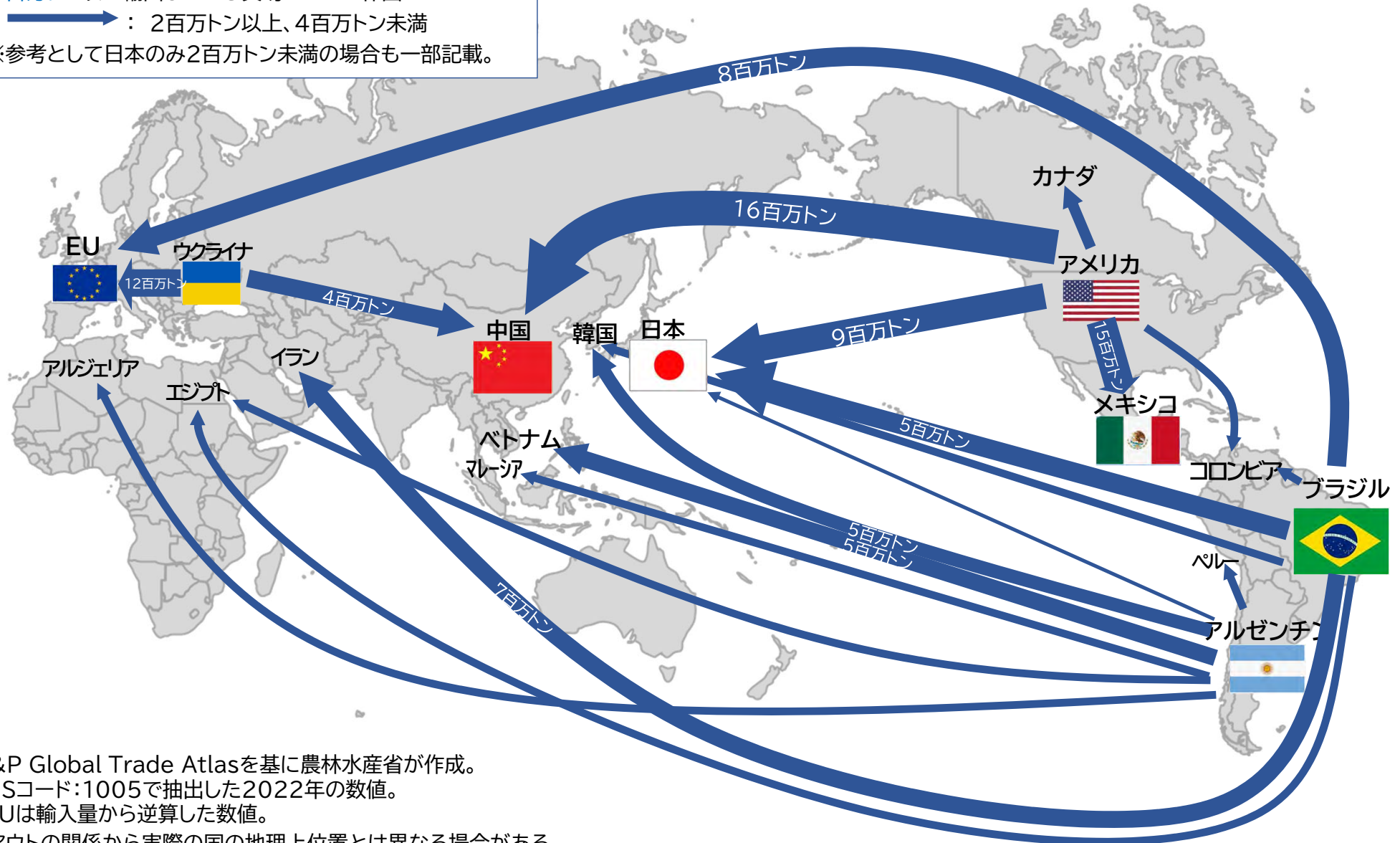
とうもろこしの貿易フロー(2022年)

○ とうもろこしの輸出について、米国から、中国、日本、中米などに輸出され、ブラジルやアルゼンチンから、アジア、中近東、EUなどに輸出されている。ウクライナからは、EU、中国などに輸出されている。

● 2百万トン以上輸出している貿易フローを作図

→ : 2百万トン以上、4百万トン未満

※参考として日本のみ2百万トン未満の場合も一部記載。



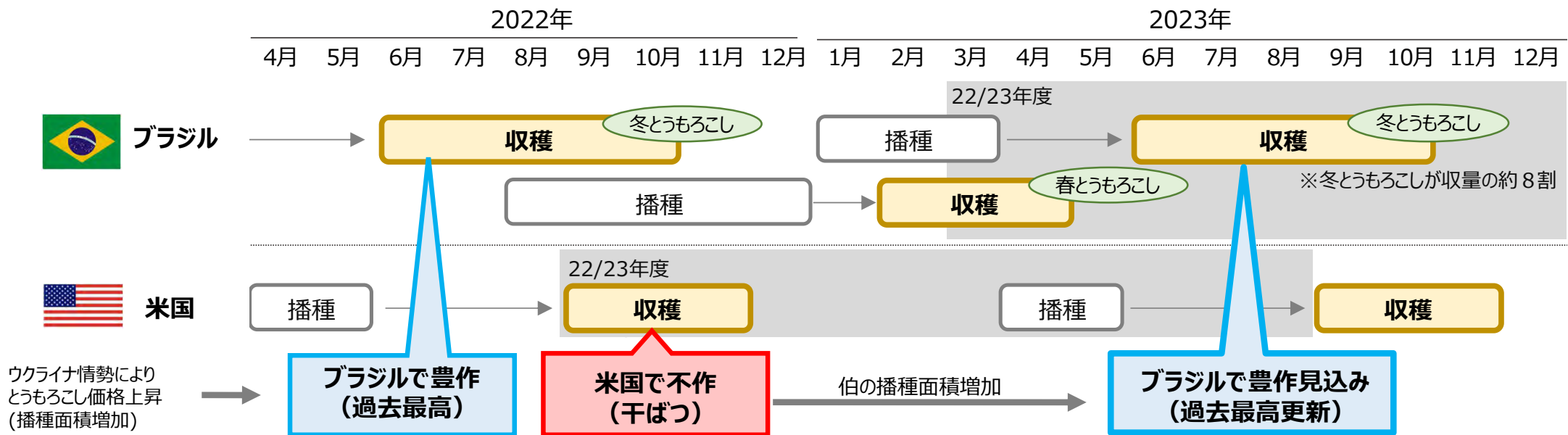
資料:S&P Global Trade Atlasを基に農林水産省が作成。

HSコード:1005で抽出した2022年の数値。

EUは輸入量から逆算した数値。

注:レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある

2022/23年度のとうもろこしの生産・輸出動向



主な動向 (2022/23年度)



米国

夏季のコーンベルトの高温から大幅減産



ブラジル

2年連続で生産量が過去最高更新見込み。冬とうもろこしの作付進捗は主産地のマト Grosso 州では99%とほぼ完了

■ 2022/23年度の通期見通し

輸出量は米国等の干ばつ影響等により減少するものの、2年連続のブラジル豊作により在庫水準はウクライナ戦争前以上を維持

2022/23年度 輸出量の対前年度比

合計, ▲31百万トン

ブラジル, +2 百万トン

インド, +1 百万トン

ウクライナ, ▲3百万トン

EU, ▲4百万トン

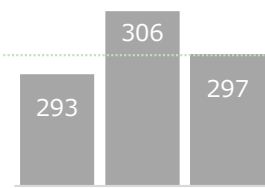
アルゼンチン, ▲6百万トン



米国, ▲16百万トン

その他合計, ▲4百万トン

(参考) 期末在庫の推移
(百万トン)

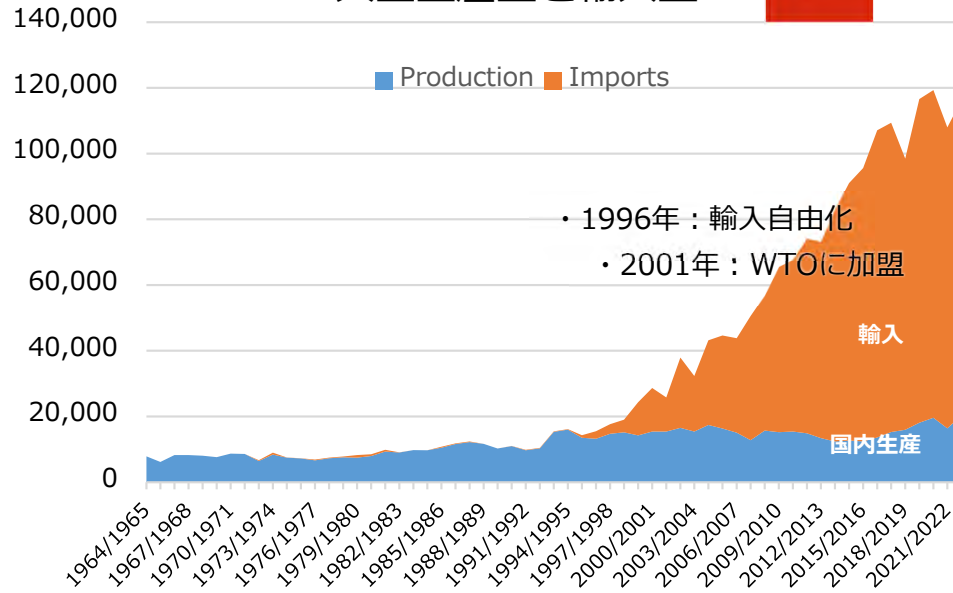


中国の大豆・とうもろこし需要

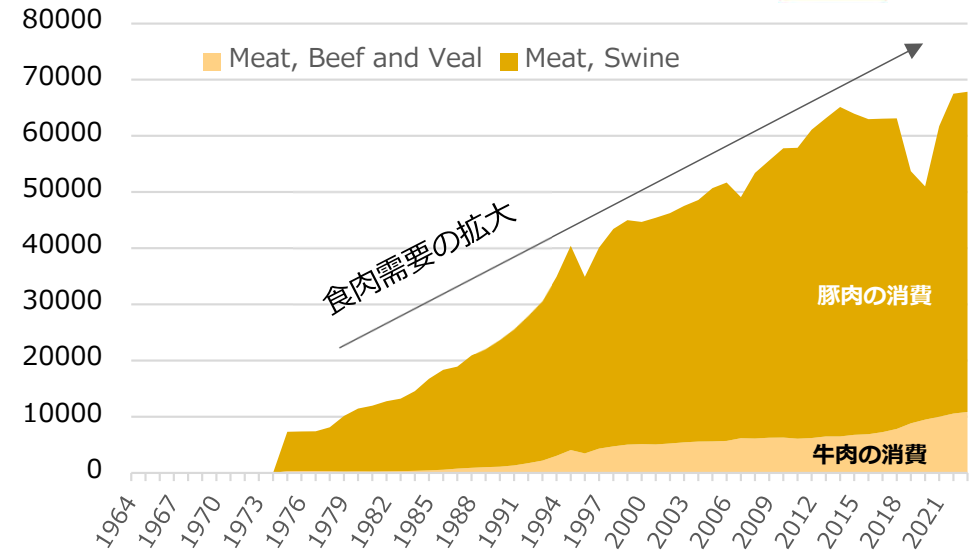


○ 穀物やとうもろこしはほぼ自給。大豆は、2000年頃以降、食肉や油脂需要拡大に伴い輸入が大幅増加。

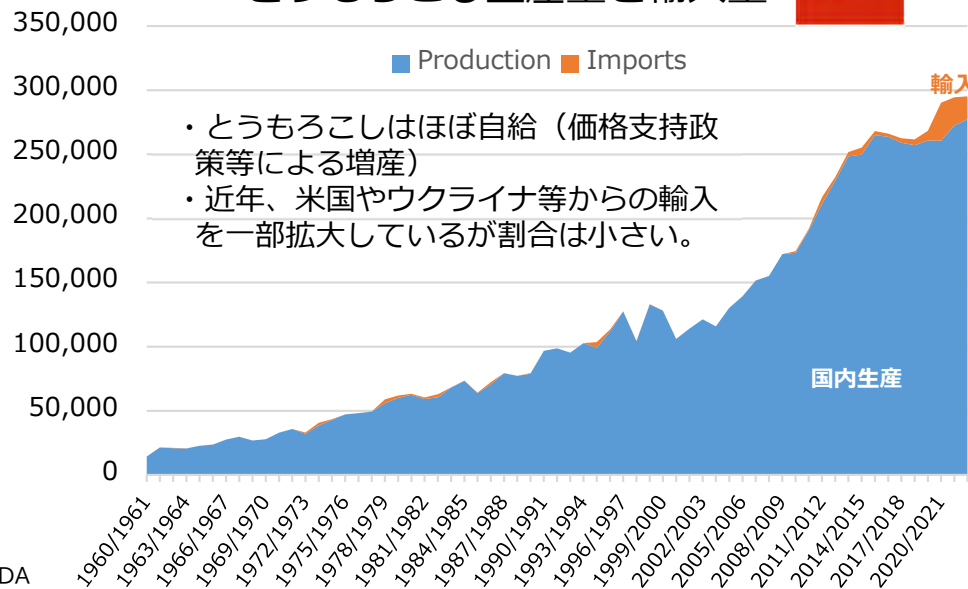
大豆生産量と輸入量



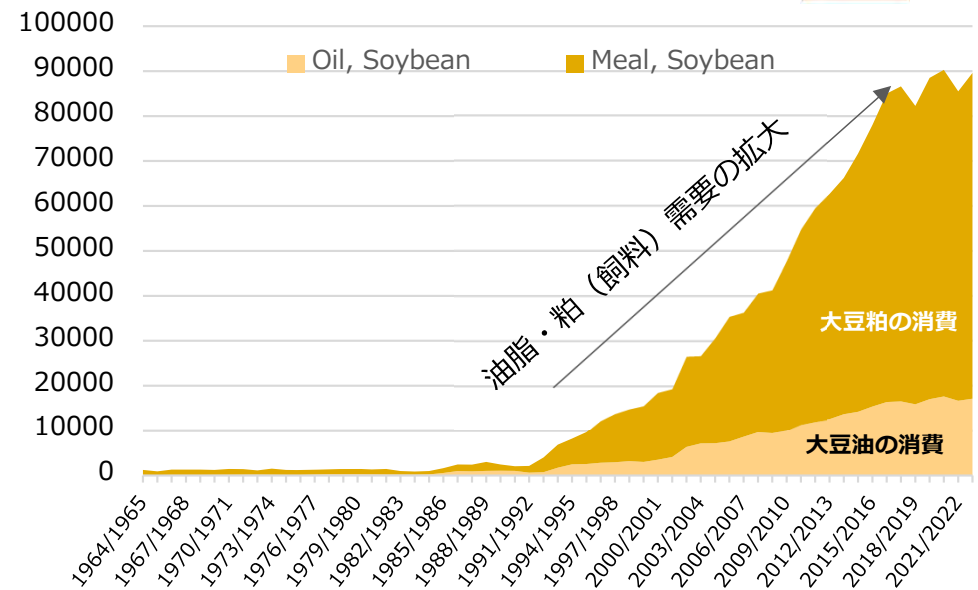
牛肉と豚肉の消費量



とうもろこし生産量と輸入量



大豆油・粕の消費量



参考

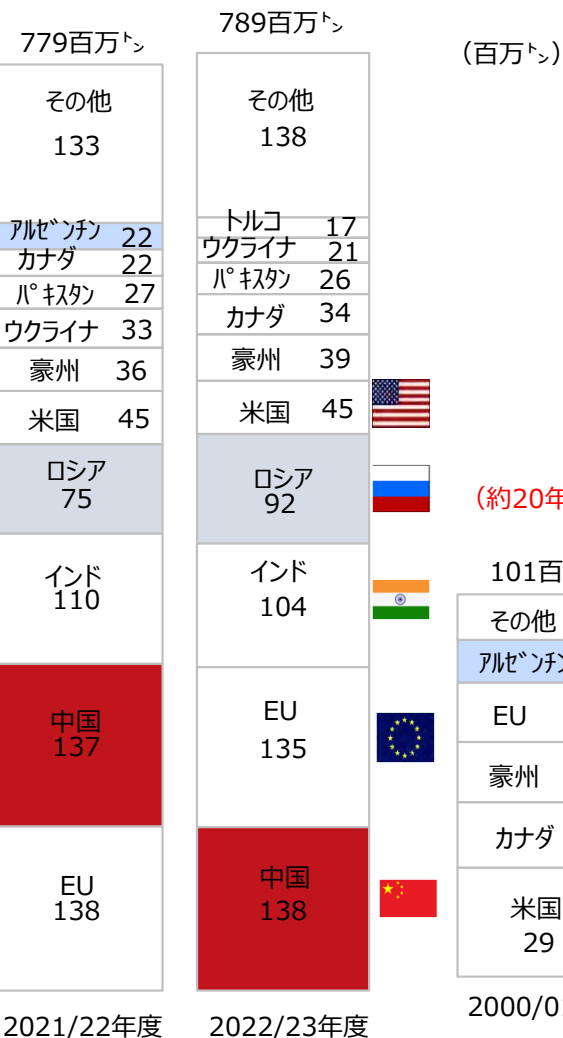
(小麦の動向)

(参考)世界の小麦の生産・輸出

- 近年、小麦の輸出国は一定程度分散しており、南米の規模は小さい。中国は小麦を自給。
- アルゼンチンでは、乾燥気候でも生育可能な遺伝子組み換え小麦を開発しており、今後の南米等での栽培状況等に留意。

■小麦の生産・輸出(世界)

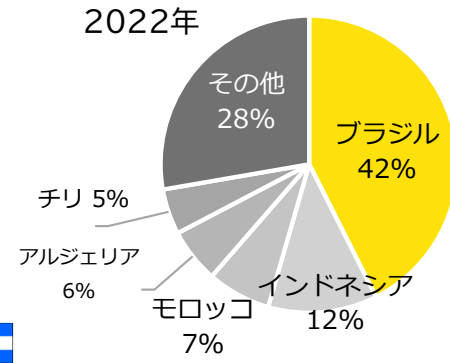
生産量



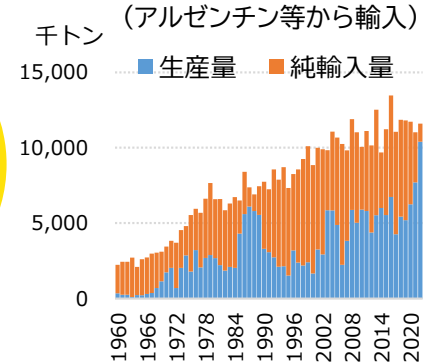
輸出量



アルゼンチンの輸出先



ブラジルは純輸入国



ブラジルでは主に南部で栽培されているが、干ばつに強い品種で北部に作付けができれば収穫量を大幅に増やす可能性がある。

GM小麦をめぐる動向

HB4小麦とは・・・

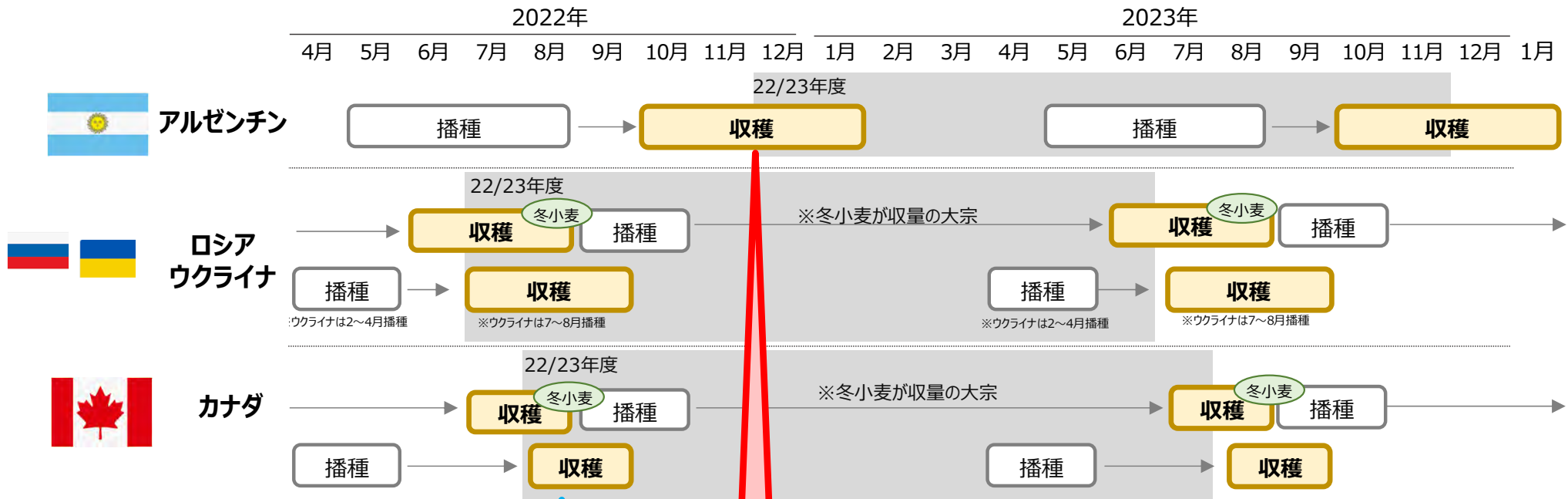
アルゼンチン企業バイオセレス社が開発した、干ばつ耐性と除草剤グルホシネートアンモニウムに対する耐性を有する遺伝子組み換え小麦

HB4小麦の動向

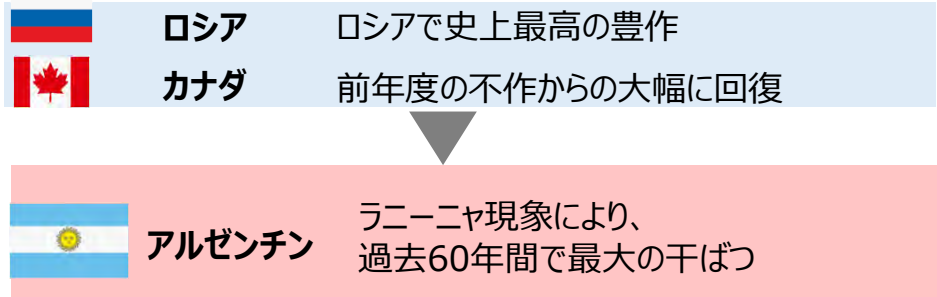
2021年7月	アルゼンチン当局が栽培承認 (世界初のGM小麦承認)
2021年11月	ブラジル当局がHB4小麦の輸入を承認
2022年	コロンビア、ニュージーランド、オーストラリアが販売を承認
2023年3月	ブラジル当局がHB4小麦の栽培を承認

出所: JETRO、新聞報道等

(参考)2022/23年度の小麦の生産・輸出動向



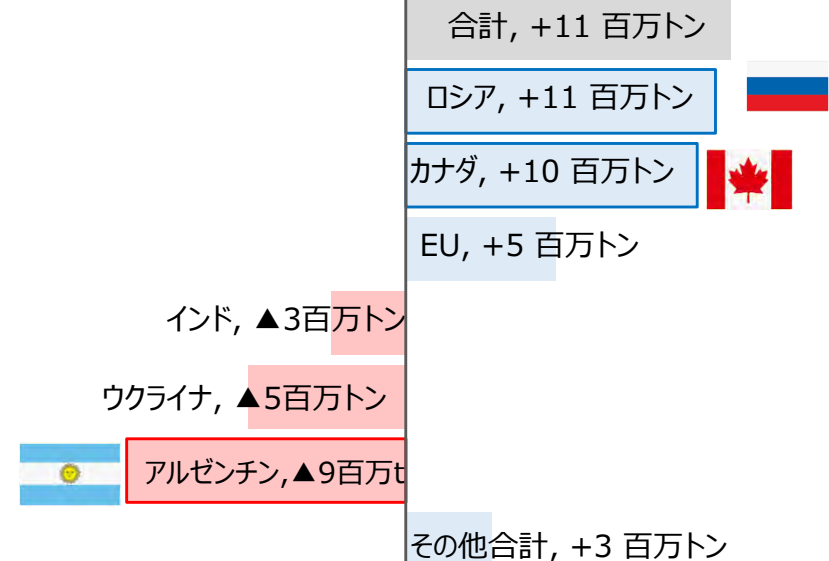
主な動向 (2022/23年度)



■ 2022/23年度の通期見通し

アルゼンチンの干ばつ影響等があるものの、ロシア・カナダ等の豊作により輸出量は前期比+11百万トン見込み

2022/23年度 輸出量の対前年度比



参考

(ブラジル)

(参考)ブラジルの農林水産業概況①

- 人口は、2億1433万人。広大な国土、温暖な気候、多くの水資源を有する世界有数の農業生産国。また耕地面積拡大の余地が大きく、海外から投資対象としても注目。
- 農産物の輸出大国であり、農産物輸出額は約9兆円(2020年)。



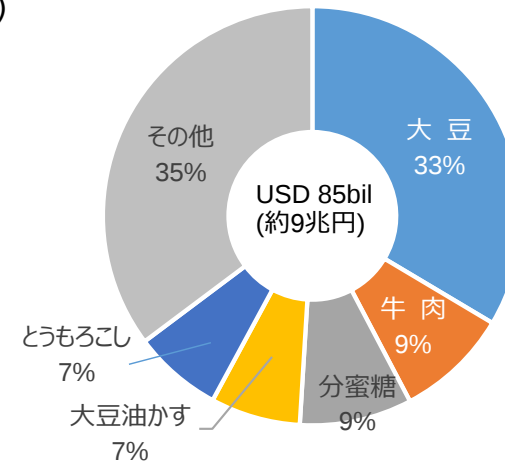
・農林水産物貿易の概況 (2020年)

・主要農産物の生産状況

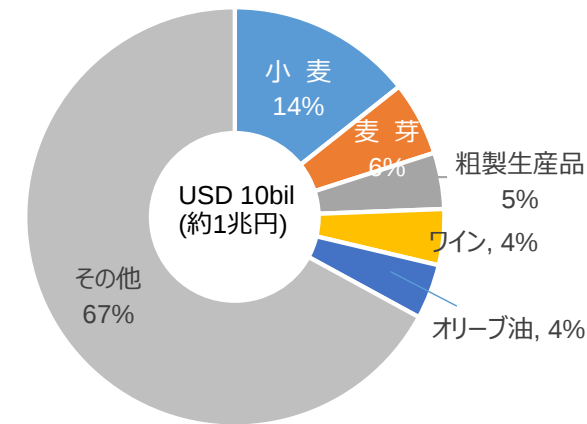
(単位:万トン)

	2017	2018	2019	2020	2021
さとうきび	75,865	74,706	75,347	75,712	71,566
大豆	11,473	11,791	11,432	12,180	13,494
とうもろこし	9,791	8,237	10,113	10,396	8,846
キャッサバ	1,850	1,788	1,759	1,821	1,810
オレンジ	1,749	1,684	1,709	1,671	1,621
コメ(粳)	1,246	1,181	1,037	1,109	1,166
コーヒー(生豆)	268	355	301	370	299
生乳(牛)	3,431	3,493	3,597	3,651	3,636
鶏肉	1,361	1,351	1,352	1,379	1,464
牛肉	955	990	1,020	998	975

輸出(伯→世界)

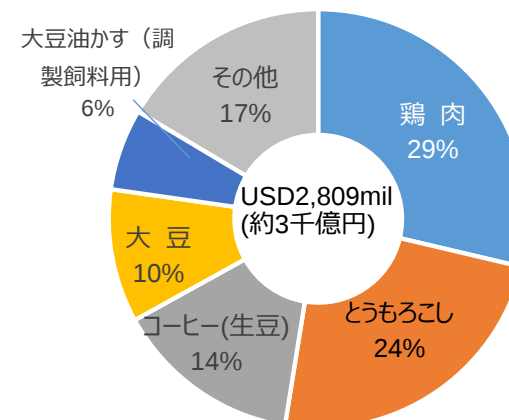


輸入(世界→伯)

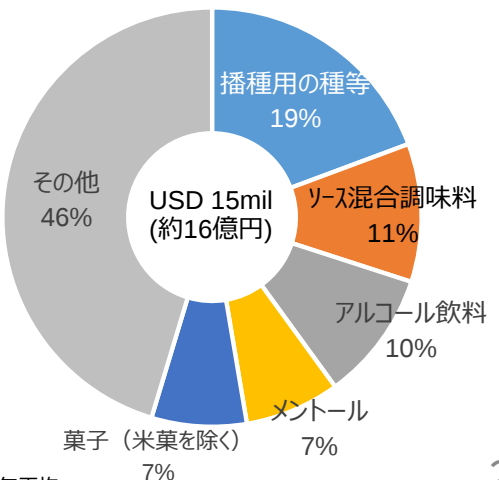


・我が国との農林水産物貿易 (2020年)

輸入(伯→日本)



輸出(日本→伯)



資料:農林水産省「農林水産業概況」

注:為替は2020年のTTM年平均。

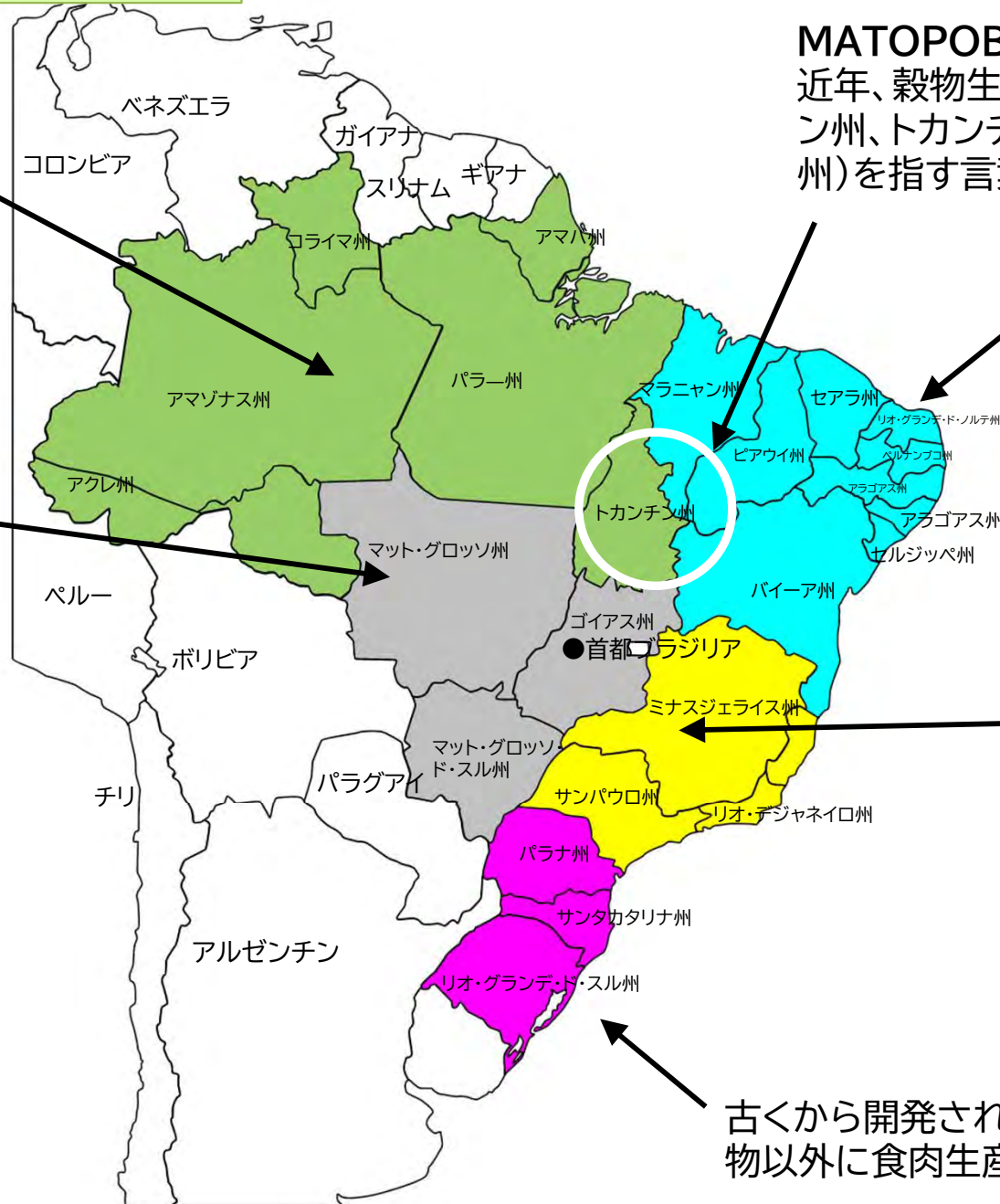
ブラジルの地域区分と農業

アマゾン熱帯雨林が広がり新規開発を抑制。アグロフォレストリーが注目(例:パラ州トメアス)

マツト・グロッソ州

セラードが広く分布し、農業生産の中心地

北部	緑色
北東部	青色
南東部	黄色
南部	ピンク色
中西部	灰色



MATOPABA(マトピバ)地域

近年、穀物生産の拡大が著しい4州(マラニオン州、トカンチンス州、ピアウイ州、バイーア州)を指す言葉。

半乾燥地帯が広がり、農業に不適。近年、灌漑による果樹栽培が発達。西部のセラードで大規模農業

古くからコーヒー、サトウキビを栽培。ミナスジェライス州は酪農の中心地。

古くから開発された農業地帯。穀物以外に食肉生産の中心地。

(参考)ブラジルのセラード地帯に広がる円形農場

- ブラジルでは、広大な国土や豊富な水資源など穀物生産に適した条件が揃っており、マッドグロッソ州に広がるセラード地帯を中心とした作付け面積の増加が生産拡大をけん引している。
- 同地帯では、センターピボット法と呼ばれる灌漑農法が普及しており、直径約1キロメートルにも及ぶ円形農場の中心に設置されたスプリンクラーがタイヤのついたアームで回転しながら散水を行う。

直径約1km

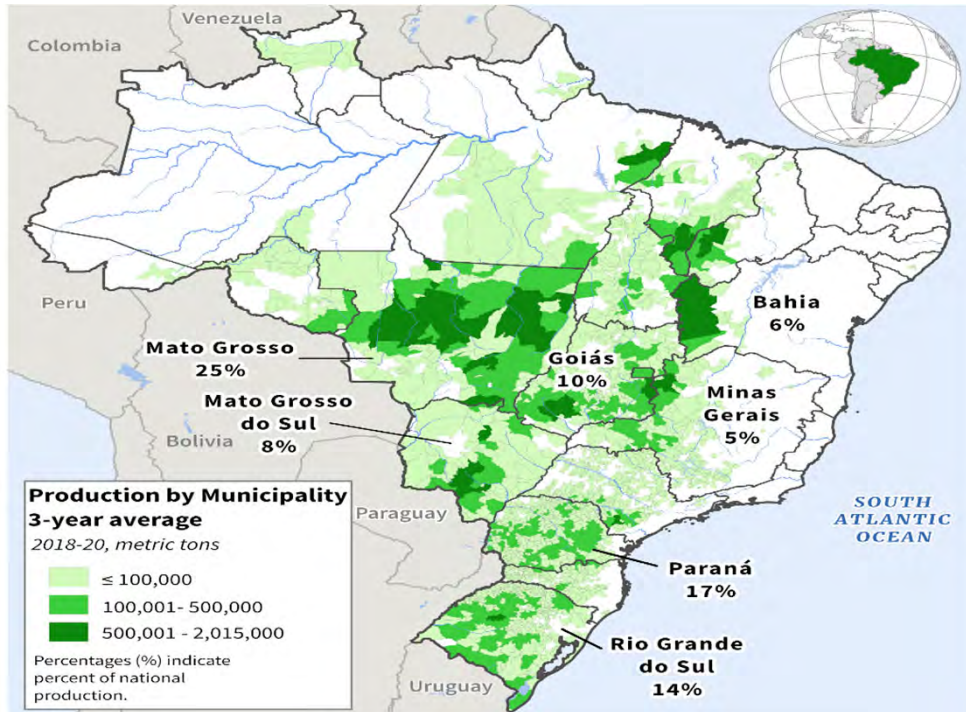


円形農場の中心に設置されている
スプリンクラー

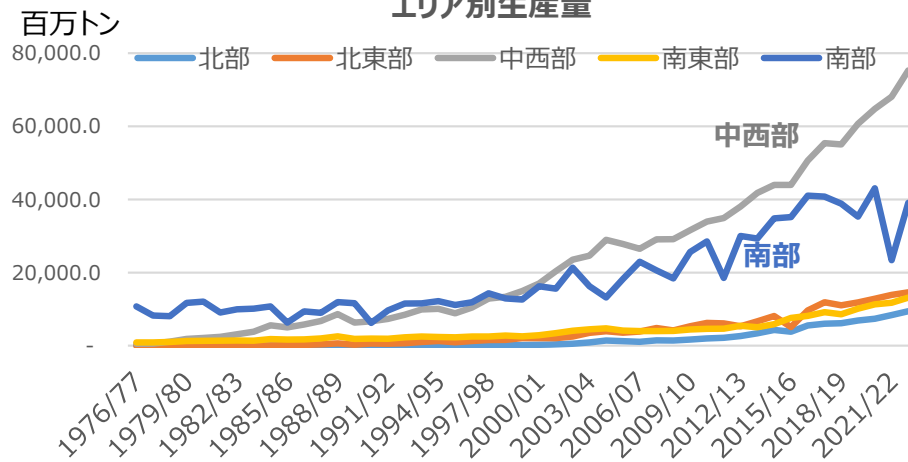
(参考)ブラジルの農林水産概況③

- 大豆・とうもろこしの生産は、伝統的な南部の生産地から、セラード開発等により中西部の生産が増加。
- 一方、流通拠点・消費地域・輸出港が南部に集中しているため、北部で生産された農産物の約半分が、南部に輸送された上で消費、輸出されている。

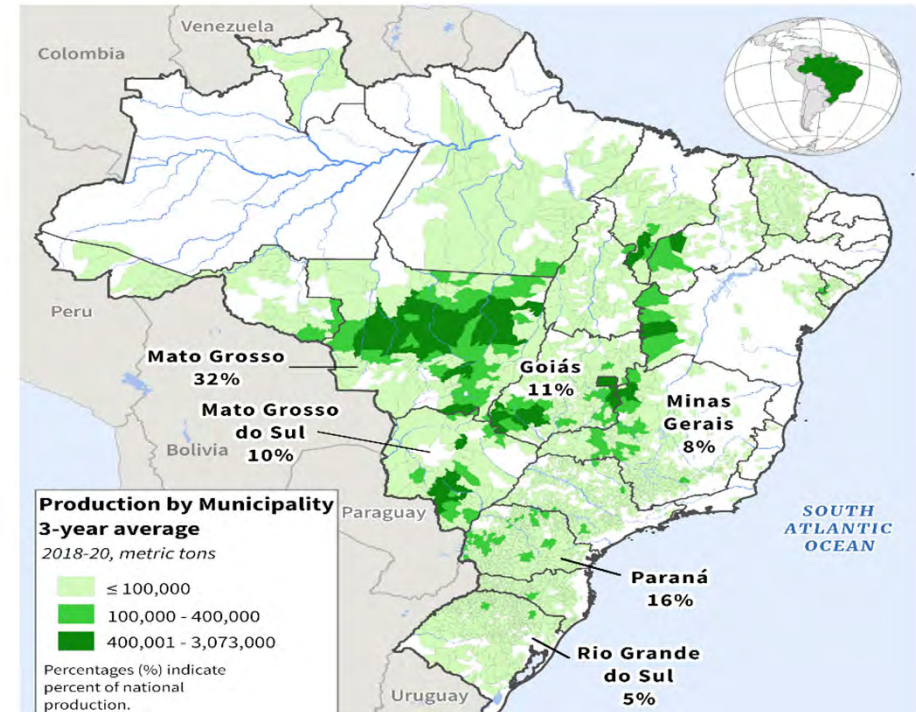
大豆



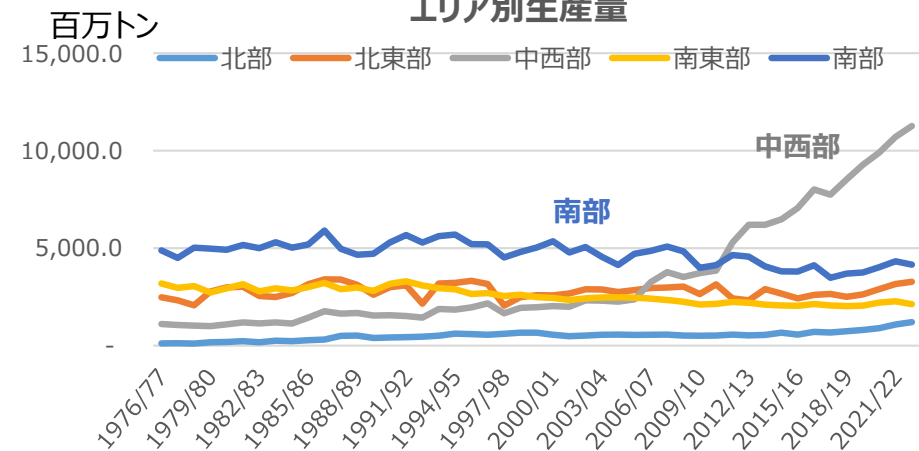
エリア別生産量



とうもろこし

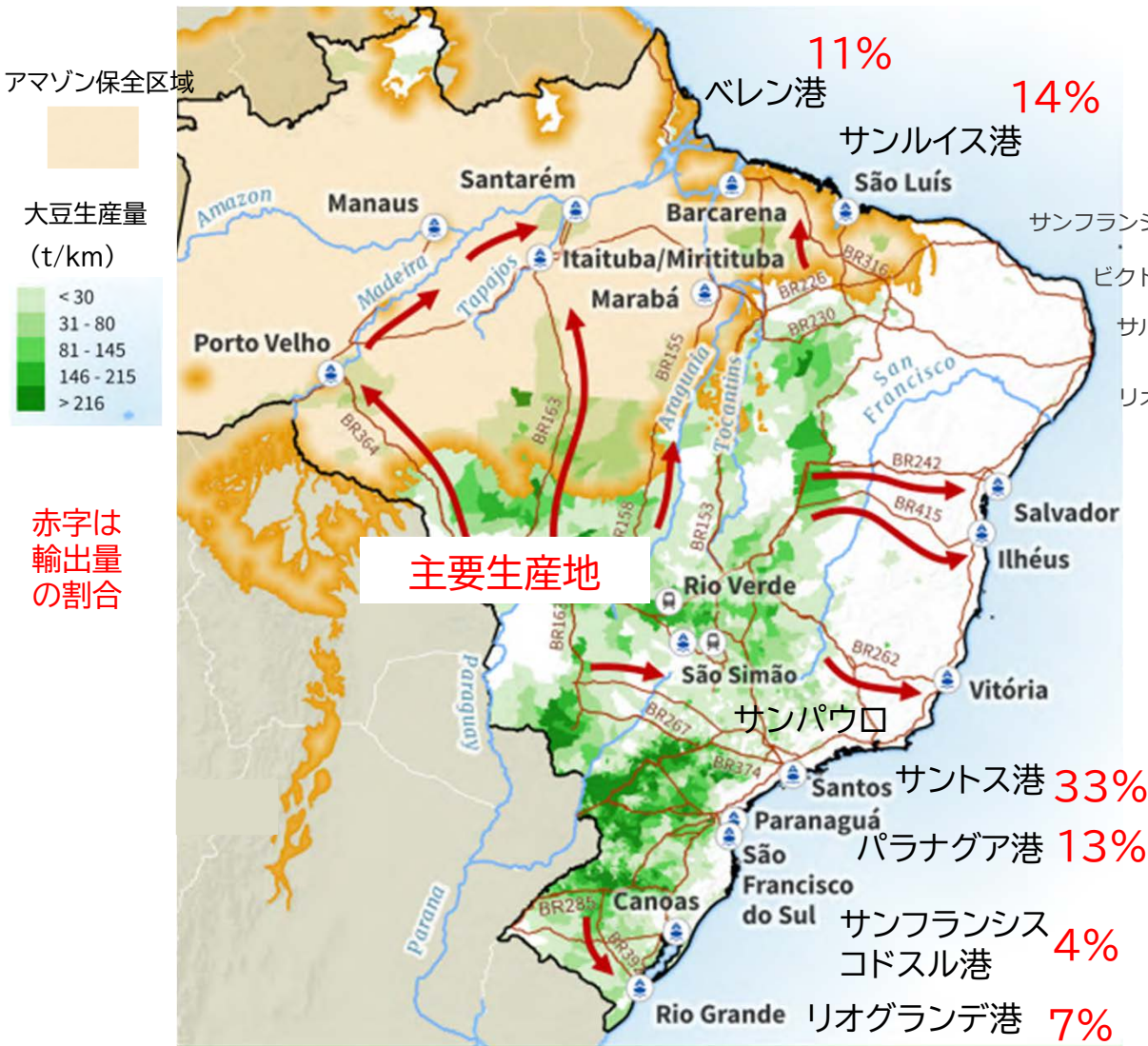


エリア別生産量

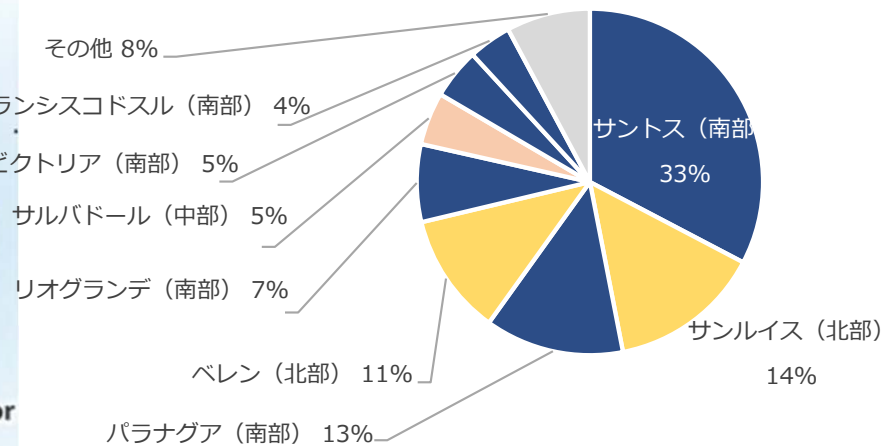


(参考)ブラジルの輸送経路

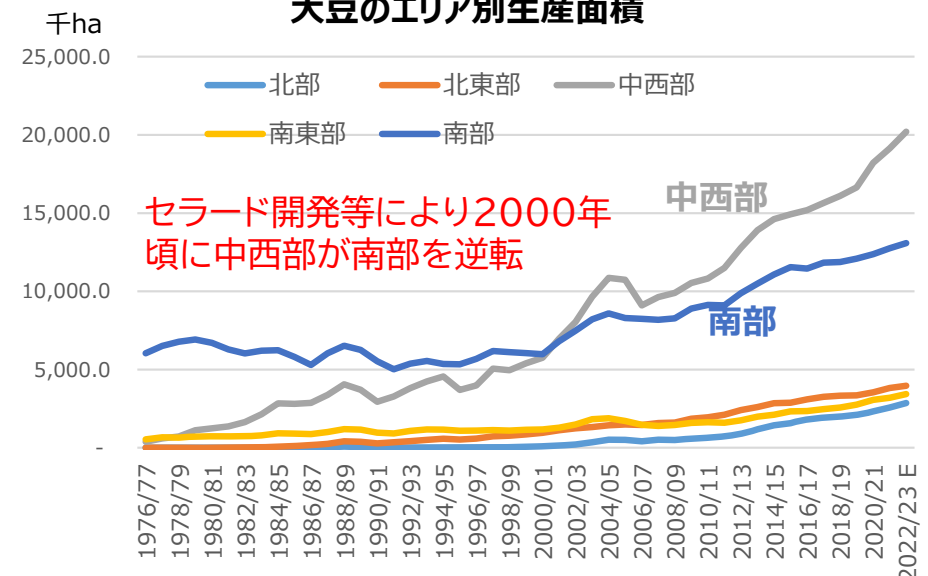
- ブラジルの農業開発は南部から内陸へ進み、今後開発が進むマツト・グロッソ州北部やマトピバ地域は南部の主要輸出港から遠い。
- そのような中、2020年に国道163号線の舗装が完工し、2021年には南北鉄道の一部路線の運行が開始するなど、インフラ状況も徐々に改善しつつある。



大豆の輸出港別の輸出量



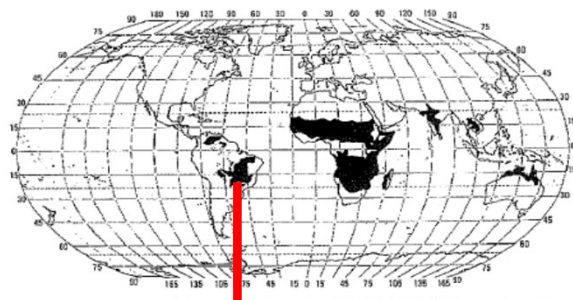
大豆のエリア別生産面積



(参考)日・ブラジルセラード農業開発関連事業:事業概要

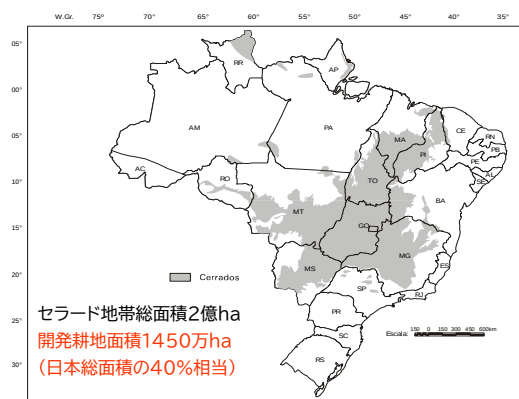
- 日ブラジル協力事業の最優良事例として、ODA事業による「日伯セラード農業開発協力事業 (PRODECER)」がある。(※セラード:ブラジル中央部のサバンナ気候地域にみられる植生)
- 同事業は第1期から第3期((1979~2001年)まで行われ、技術協力と資金協力の両側面からの支援により、ブラジル農業の発展に大きく貢献。

世界の熱帯サバンナ分布図(20億ha)



サバンナ農業開発先駆例

ブラジル・セラード地帯農業開発



セラード地帯総面積2億ha
開発耕地面積1450万ha
(日本総面積の40%相当)

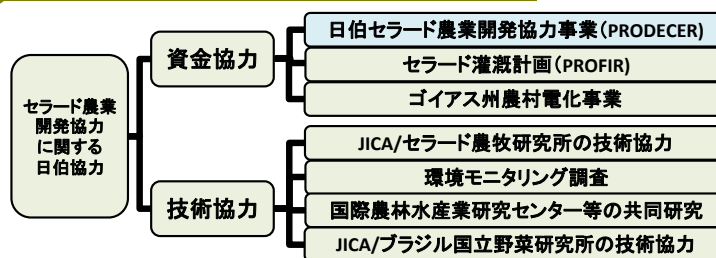


ブラジル・セラード(サバンナ)地帯の原景観

経緯・目的

- 米国の大豆輸出停止を契機に、昭和49年の田中総理とガイゼル大統領との共同声明及び昭和51年の閣議了解に基づき、日伯両国官民連携の国家プロジェクトとして実施。
- ブラジルにおける食料増産、地域開発の推進、世界の食料供給の増大と両国の経済協力関係の促進等が目的。

セラード農業開発に関する日伯協力



PRODECER事業概要

セラード地域の農業開発(入植者717戸が、農地造成、灌漑整備等を実施し34.5万ha(東京都面積の1.6倍)を開拓)に対して、融資を実施。

(JICA開発投融资、OECF(現JICA)海外投融资、民間銀行)

- ①総事業費:約684億円(うちODA279億円)
- ②事業期間:1979年~2001年
(第1期事業~第3期事業)

【出典:日伯セラード農業開発協力事業合同評価調査総合報告書他】

事業成果

●作物栽培に不適とされていたセラード地域で①土壌改良、②適正作物の選定と育種③組合育成、④入植地造成、⑤環境保全技術、⑥民間との連携推進等を行い、熱帯サバンナ地域における農業開発の草分け的役割を果たした。

●セラード地帯の穀物増産
生産量が大幅に増大
米国に並ぶ大豆輸出国へ成長
世界の食料需給の安定化に貢献

●セラード地帯の農業生産拡大・多様化により、アグリビジネス(穀物以外にも青果物、畜産、燃料作物など)が進展。

●ブラジルの地域開発及び環境保全にも大きな貢献。



広大な大豆畑



参考

(アルゼンチン)

(参考)アルゼンチンの農林水産業概況

- 人口は4,733万人(2022年)。パンパと呼ばれる草原地域では、穀物及び油糧種子の不耕起栽培が行われている。主要農産物は、とうもろこし、大豆、小麦、牛肉等。我が国への輸出では、飼料 穀物等やエビ等が多い。
- アルゼンチンでは、財政赤字補填のため主要農産物に輸出税を賦課しており、また、国内供給を確保するため、とうもろこし、小麦には輸出上限数量も設定している。



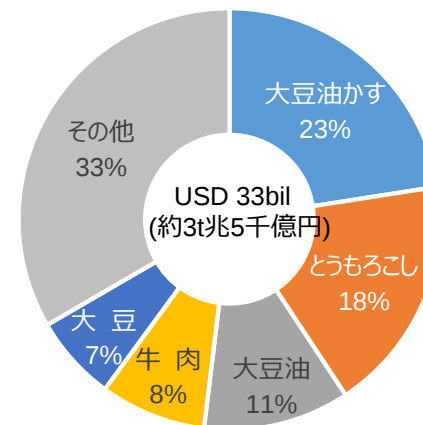
・主要農産物の生産状況

(単位:万トン)

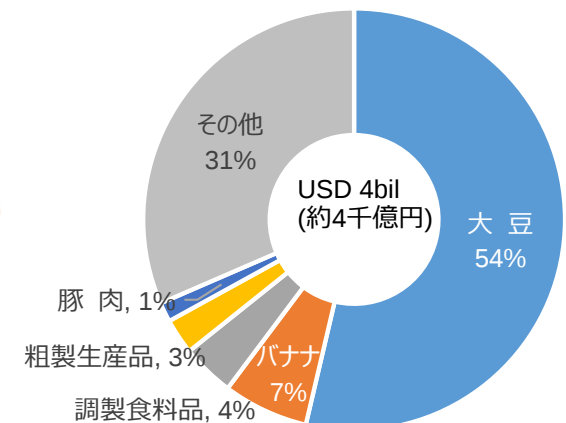
	2017	2018	2019	2020	2021
とうもろこし	4,948	4,346	5,686	5,840	6,053
大豆	5,497	3,779	5,526	4,880	4,622
小麦	1,840	1,852	1,946	1,978	1,764
さとうきび	1,890	1,856	1,863	1,870	1,863
大麦	374	506	378	448	404
こうりゃん	253	156	160	183	332
ひまわりの種	355	354	383	323	343
ぶどう	197	257	252	206	224
じゃがいも	246	251	260	288	295
レモン・ライム	168	199	168	115	138
生乳(牛)	1,010	1,053	1,034	1,111	1,155
牛肉	284	307	314	317	298
鶏肉	212	207	220	222	229

・農林水産物貿易の概況 (2020年)

輸出 (アルゼンチン→世界)

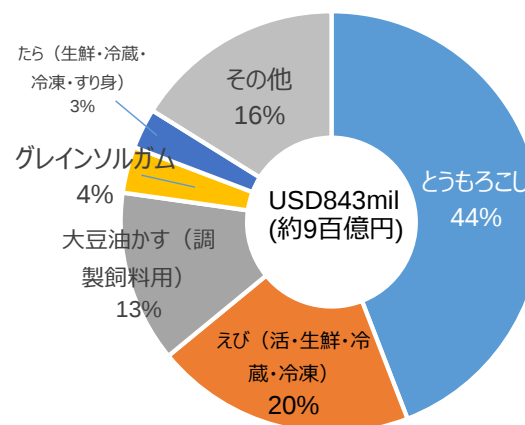


輸入 (世界→アルゼンチン)

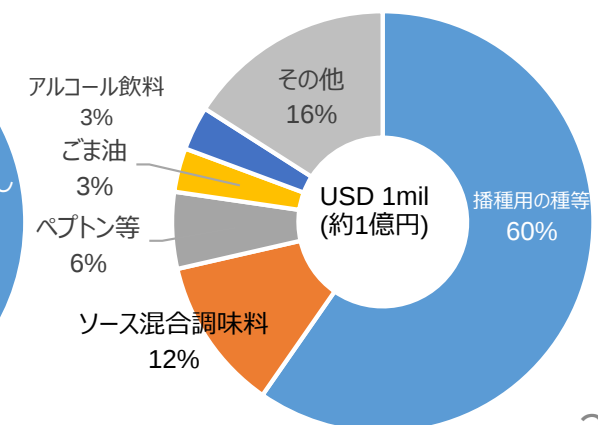


・我が国との農林水産物貿易 (2020年)

輸入 (アルゼンチン→日本)



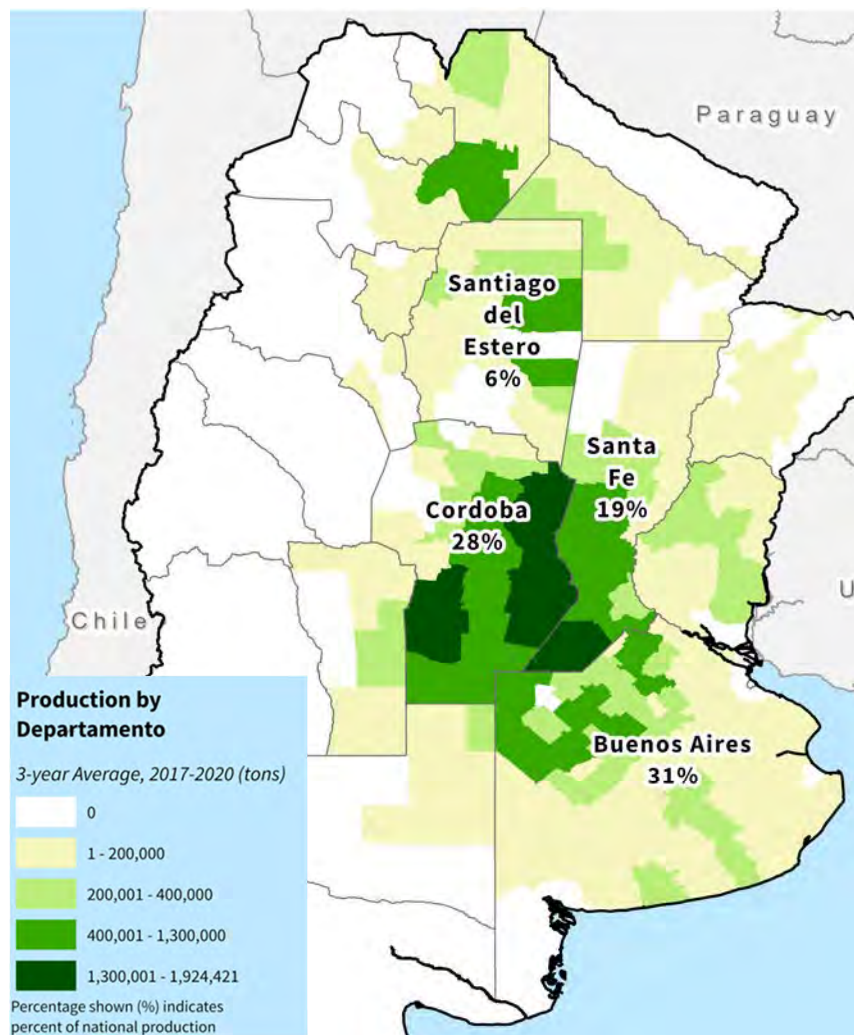
輸出 (日本→アルゼンチン)



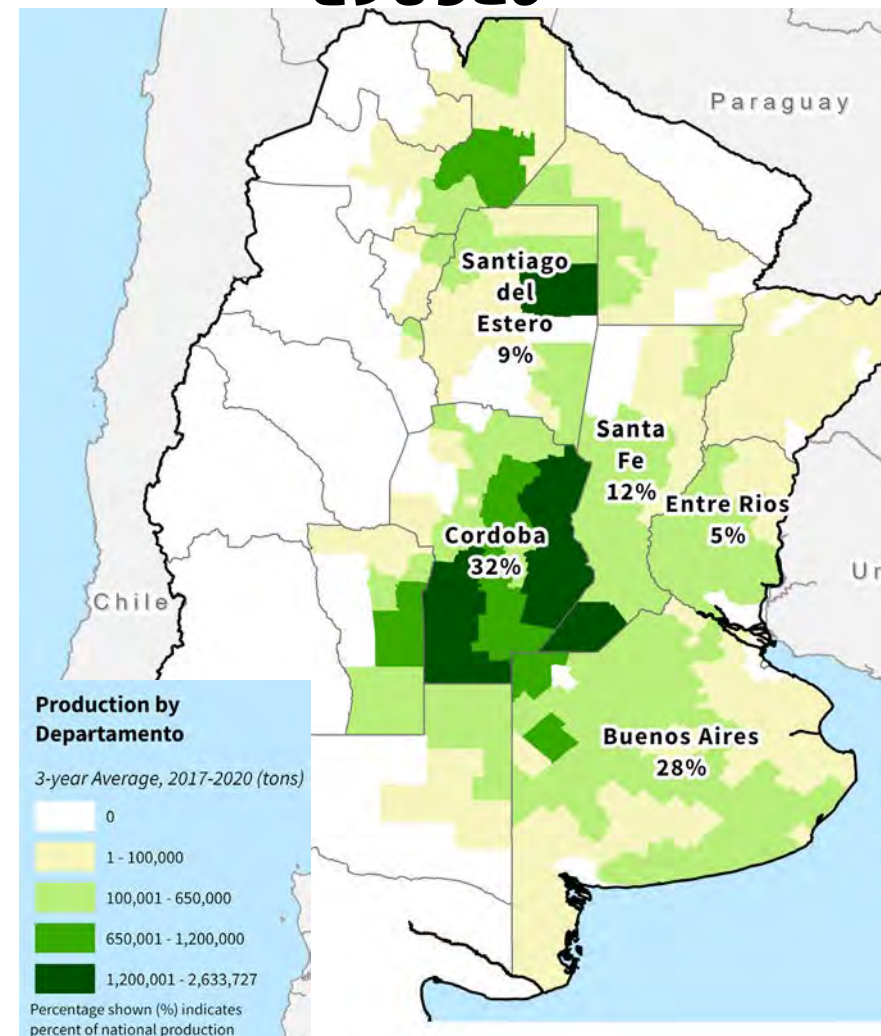
(参考)アルゼンチンの主要生産地

- 農地は国土の約半分を占めており、特に国土の中央部に位置するパンパ地域は、温暖な気候、平坦な土地、肥沃な土壌等農業に適した環境を有している。
- 大豆生産については、パンパ地域を中心にグローバル企業による積極的な投資や技術革新(不耕起栽培、遺伝子組み換え等)が進み、収穫面積の拡大、生産コストの低下、単収の増加が図られた。

大豆

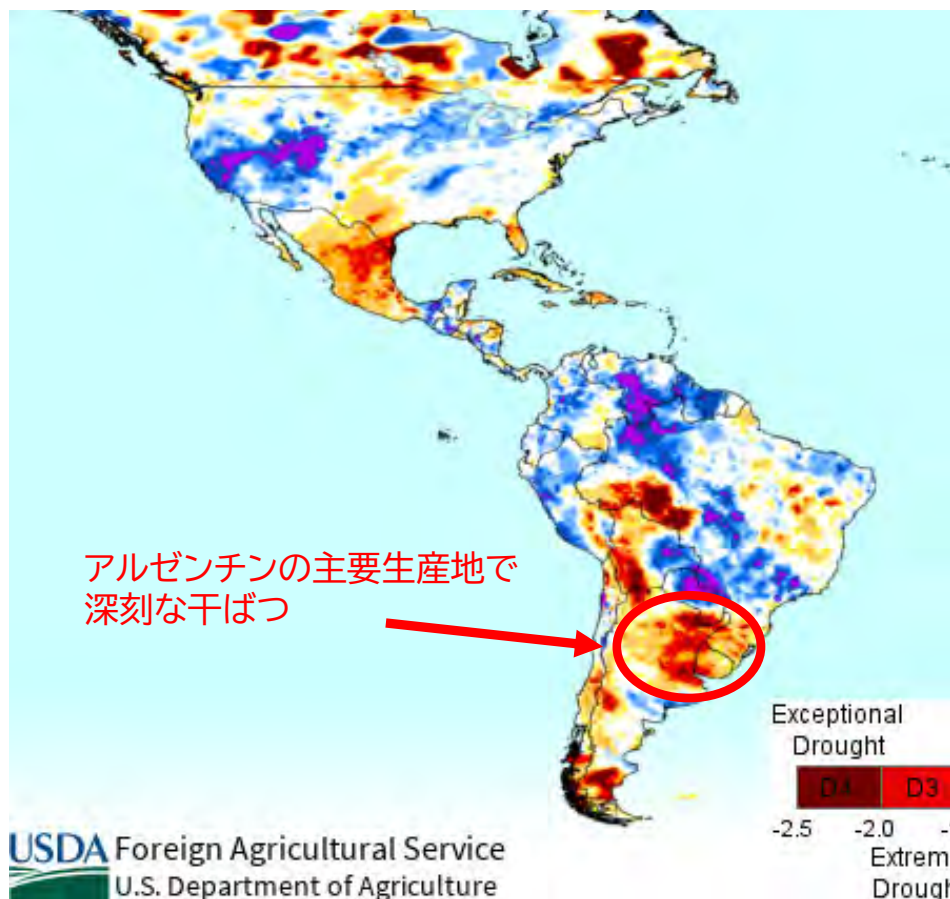


とうもろこし



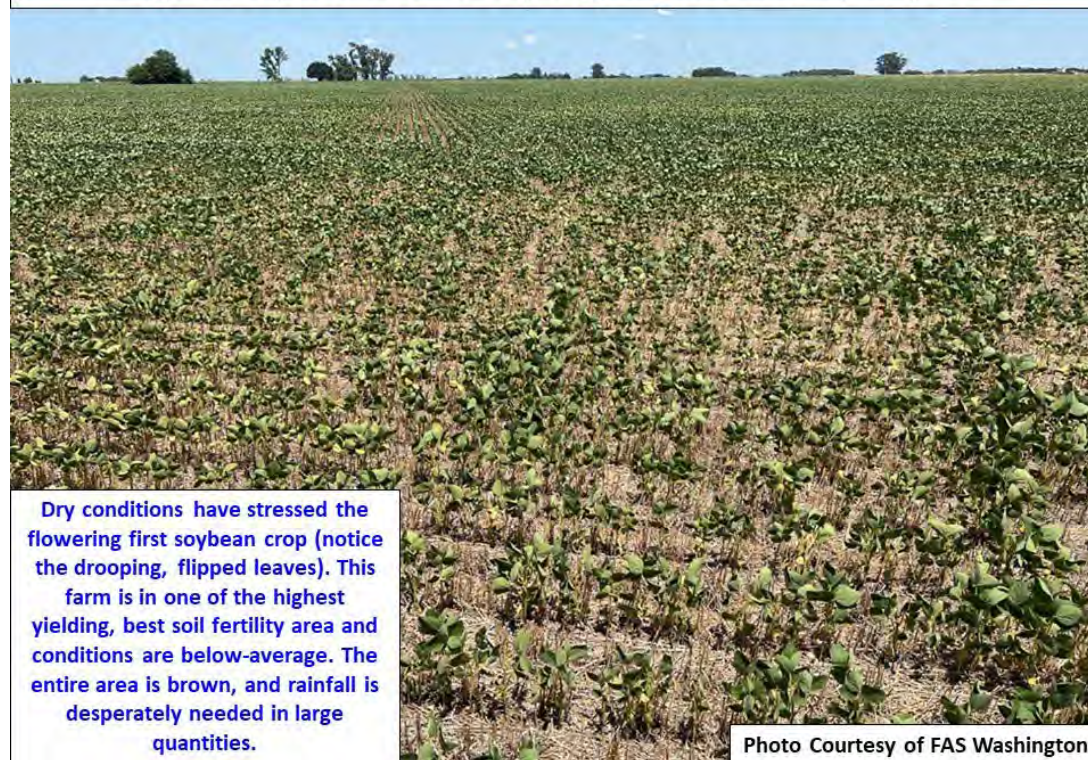
(参考)アルゼンチンの干ばつ

- 近年、ラニーニャ現象により、降雨量不足という問題に直面しており、ブラジル南部およびアルゼンチン北部における穀物生産に影響。
- 特に、2022/2023年度の夏季は過去60年間で最悪の干ばつと言われており、降水量不足で穀物の主要輸送路であるパラナ川の水位が大きく低下し、穀物生産自体も大きく減産する見通し。



アルゼンチンの主要生産地で
深刻な干ばつ

Pergamino, Buenos Aires, Argentina January 19, 2023



乾燥により大豆の開花にストレスを与えている（写真は、葉が落ちて裏返しになる様子）。当該農場は、生産性が高く、最も肥沃な土地であるが、生育条件は平年を下回った。エリア全体は茶色く、大量の降雨が相当に必要な状況。

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2023 年 3 月中旬までに発表した情報を引用しています。

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

英国については、2020 年 1 月 31 日付けで EU を離脱しました。英国の小麦に関する情報については小麦の EU27+英国のコーナーで取り扱います。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--

「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

- 1 あなたの所属を教えてください。（選択式）
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大学生・高校生、その他
- 2 あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外
その他
- 3 月報をどこで知りましたか。（選択式）
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、
書籍、その他
- 4 月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。
- 5 月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、その他）
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））
特別分析トピック
- 6 月報で一番関心／参考にしている項目のうち、特別分析トピックを選択された場合、特に関心があったテーマがあれば教えてください。
- 7 最近で最も興味を引いた／役立った記事は何ですか。（自由記載）
- 8 今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）
中国の需要・輸入動向
- 9 特別分析トピックで取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
- 10 今後月報に期待することはありますか。（自由記載）



ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。

https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html